

平安京右京七条二坊十二町跡・ 西市跡・衣田町遺跡発掘調査報告書

平安京右京七条二坊十二町跡・西市跡・衣田町遺跡発掘調査報告書

二〇二三

株式会社 文化財サービス

2023

株式会社 文化財サービス

**平安京右京七条二坊十二町跡・
西市跡・衣田町遺跡発掘調査報告書**

2 0 2 3

株式会社 文化財サービス

例 言

- 1 本書は、京都市下京区西七条北衣田町 37 - 1 番地を実施した、平安京右京七条二坊十二町跡・西市跡・衣田町遺跡の発掘調査成果報告書である。(京都市番号 22H101)
- 2 調査は、医療施設、商業施設および共同住宅の複合施設の建設に伴い実施した。
- 3 現地調査は、平安埋蔵文化財事務所株式会社(代表取締役 池田光繁)より株式会社文化財サービス(以下、「文化財サービス」という)に委託され、田邊貴教(文化財サービス)・辻 純一(特定非営利活動法人 平安京調査会)が担当した。
- 4 調査期間は令和4年12月19日～令和5年2月21日である。
- 5 調査面積は325.2㎡である。
- 6 本文・図中で使用した地図は、京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「島原」「西京極」「中河原」「梅小路」を調整して作成した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高はT.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 本書の執筆は田邊が行い、編集は田邊、中西佳奈江(文化財サービス)が行った。
- 10 現地での記録写真撮影は田邊が行い、出土遺物の撮影は写真 楠華堂(内田真紀子氏)に依頼した。
- 11 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 田中慎一、上田智也、吉岡創平、中 優作、清須慶太(以上、文化財サービス)、
作業員(株式会社京カンリ)

〔整理作業〕 多賀摩耶、吉川絵里、森下直子、中 優作、望月麻佑、中西佳奈江、
場勝由紀菜、古谷真由美、野地ますみ、神野いくみ、上野恵己、甲田春奈、
下市紗耶香、内牧明彦、溝川珠樹(以上、文化財サービス)
- 13 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
中世土器研究会 新版『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 2022年
に依った。
- 14 図33は西山善峯寺、図35・36は極楽山浄土寺の了承を得て掲載した。
- 15 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示、御協力をいただいた。記して感謝いたします。

(敬称略)

國下多美樹(龍谷大学)、鈴木久男(京都産業大学)、狭川真一(大阪大谷大学)、
山本原也(小野市教育委員会)、杉本仁永(安阿弥寺住職)、極楽山浄土寺、西山善峯寺

目 次

第 I 章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	3

第 II 章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 既往の調査	6

第 III 章 調査成果

1 基本層序	10
2 検出遺構	10
(1) 1区	13
(I) 第1面	13
(II) 第2面	13
(III) 第3面	17
(IV) 第4面	23
(V) 下層	31
(2) 2区	31
(I) 第1面	31
(II) 第2面	31
(III) 第3面	33
(IV) 第4面	44
(V) 下層	52
3 出土遺物	52
(1) 1区	53
(I) 第2面遺構出土遺物	53
(II) 第3面遺構出土遺物	54
(III) 第4面遺構出土遺物	55
(2) 2区	59
(I) 第2面遺構出土遺物	59
(II) 第3面遺構出土遺物	59
(III) 第4面遺構出土遺物	64

第IV章 まとめ

1 各面の検出遺構について……………	67
2 溝012・031・032について……………	70
3 「南無阿弥陀佛」文軒丸瓦について……………	72

附章 安阿弥寺門前の板碑について……………	76
-----------------------	----

図版目次

図版1	遺構	1. 1区第1面全景（東から） 2. 1区第1面全景（西から）
図版2	遺構	1. 1区第2面全景（東から） 2. 1区第2面全景（上が北）
図版3	遺構	1. 1区第3面全景（東から） 2. 1区第3面全景（上が北）
図版4	遺構	1. 1区礎石建物140、柱列143検出状況（南東から） 2. 1区礎石建物140、柱列143検出状況（上が北）
図版5	遺構	1. 1区柱穴019断面（南から） 2. 1区柱穴020断面（南から）
図版6	遺構	1. 1区第4面全景（東から） 2. 1区第4面全景（上が北）
図版7	遺構	1. 1区溝032遺物出土状況（北から） 2. 1区溝032完掘状況（南から）
図版8	遺構	1. 1区溝033遺物出土状況（南から） 2. 1区杭148・149断面（南から）
図版9	遺構	1. 2区第2面全景（東から） 2. 2区第2面全景（西から）
図版10	遺構	1. 2区第3面全景（東から） 2. 2区第3面全景（上が北）
図版11	遺構	1. 2区溝031、礎石建物141、土坑074・075・077全景（上が西） 2. 2区礎石建物142全景（上が西）
図版12	遺構	1. 2区土坑077掘削状況（北から） 2. 2区土坑077遺物出土状況（北から）
図版13	遺構	1. 2区土坑077漆器皿出土状況（北から） 2. 2区土坑074掘削状況（東から）

図版14	遺構	1. 2区第4面全景（東から） 2. 2区第4面全景（上が北）
図版15	遺構	1. 2区柱穴071遺物出土状況（東から） 2. 2区溝032完掘状況（北から）
図版16	遺物	1. 1区第4面 溝032出土遺物（「南無阿弥陀佛」文軒丸瓦） 2. 2区第3面 土坑077出土遺物（漆器皿）
図版17	遺物	1. 1区第2面 整地層内出土遺物（水晶製装飾具） 2. 1区第2面 溝008・028出土遺物（土師器・須恵器・施釉陶器）
図版18	遺物	1. 1区第3面 溝031出土遺物（土師器・瓦器） 2. 1区第4面 溝032・033・043・044出土遺物（土師器）
図版19	遺物	1. 1区第4面 溝032・033出土遺物（瓦器） 2. 1区第4面 溝033・044、土坑045出土遺物（山茶椀・瓦質土器）
図版20	遺物	1. 2区第2面 溝068出土遺物（輸入銭） 2. 2区第3面 溝031、土坑077、柱穴082・083、整地層内出土遺物（土師器）
図版21	遺物	1. 2区第3面 土坑077出土遺物（瓦質土器・須恵器） 2. 2区第3面 整地層内出土遺物（須恵器）
図版22	遺物	1. 2区第4面 柱穴071・098、土坑104・109・139出土遺物（土師器） 2. 2区第4面 溝032、土坑108・130・133・138出土遺物 （灰釉陶器・瓦器・輸入青磁）

挿図目次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査経過写真	2
図3	調査区地区割り・基準点配置図（1：250）	4
図4	平安京条坊図（1：80,000）	5
図5	既往調査位置図（1：5,000）	6
図6	1区調査区北壁・西壁断面図（1：100）	11
図7	2区調査区南壁・西壁断面図（1：100）	12
図8	1区第1面平面図（1：100）	15
図9	1区第2面平面図（1：100）	16
図10	1区第3面平面図（1：100）	19
図11	1区礎石建物140、柱列143平面・断面図（1：80）	22
図12	1区第4面平面図（1：100）	24
図13	1区土坑045・048・050平面・断面図（1：40）	25
図14	1区溝032平面・断面図（1：40）、遺物出土状況図（1：20）	28
図15	1区溝033・043平面・断面図（1：40）	29

図16	2区第2面平面図 (1 : 100)	32
図17	2区第3面平面図 (1 : 100)	34
図18	2区土坑074平面・立面図 (1 : 50)、土坑075平面・断面図 (1 : 50)	35
図19	2区土坑077平面・立面図 (1 : 50)	37
図20	2区礎石建物141平面・断面図 (1 : 50)	39
図21	2区礎石建物142平面・断面図 (1 : 80)	41
図22	2区第4面平面図 (1 : 100)	45
図23	2区溝032・127平面・断面図 (1 : 60)、柱穴071平面・断面図 (1 : 20)	51
図24	出土遺物1 (1 : 2、1 : 4)	56
図25	出土遺物2 (1 : 4)	57
図26	出土遺物3 (1 : 4)	58
図27	出土遺物4 (1 : 4)	60
図28	出土遺物5 (1 : 2、1 : 4)	61
図29	出土遺物6 (1 : 4)	63
図30	1・2区第2面平面図 (1 : 200)	67
図31	1・2区第3面平面図 (1 : 200)	68
図32	1・2区第4面平面図 (1 : 200)	69
図33	善峯寺参詣曼荼羅 (部分)	70
図34	区画溝変遷図 (1 : 500)	71
図35	浄土寺浄土堂	72
図36	浄土寺浄土堂復元瓦	72
図37	浄土寺・神出窯跡・溝032出土軒丸瓦 (1 : 4)	72
図38	安阿弥寺門前板碑	76

表目次

表1	既往調査一覧表	7
表2	遺構概要表	10
表3	遺物概要表	53
表4	遺物観察表	74

第 I 章 調査の経緯

1 調査に至る経緯（図 1）

調査地は京都市下京区西七条北衣田町 37-1 に位置する。当地においてケイ・アール・イー株式会社が発掘調査、商業施設および共同住宅の複合施設の建設を計画した。そのため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）が発掘調査を指導した。これをうけて、平安埋蔵文化財事務所株式会社から委託を受け、株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）が発掘調査を実施した。

2 調査の経過（図 2）

調査は 2022 年 12 月 19 日より現地作業に着手し、2023 年 2 月 21 日にすべての工程を終了した。調査区は文化財保護課の指示により、第 1 調査区（以下、「1 区」）は東西 18 m、南北 7.4 m、第 2 調査区（以下、「2 区」）は東西 15 m、南北 12.8 m で設定した。面積は 1 区が 133.2 m²、2 区が 192 m²、計 325.2 m² である。

1 区の調査は、近現代の造成土と床土層を重機により除去し、その後人力により第 1 面の精査および遺構検出を行ったが、近現代の溝と柱穴を 2 基確認したのみだった。第 1 面の記録作業実施後、第 1 面の整地層を除去し、第 2 面の精査および遺構検出を行った。その結果、室町時代前期～中期の南北方向の耕作溝と区画溝を検出した。第 2 面の記録作業実施後、第 2 面の整地層を除去し、第 3 面の精査および遺構検出を行った。その結果、南北朝時代の区画溝・礎石建物・柱列を検出した。第 3 面の記録作業実施後、第 3 面の整地層を除去し、第 4 面の精査および遺構検出を行った。その結果、平安時代末期～鎌倉時代の区画溝と南北方向および東西方向の耕作溝を検出した。第 4 面は遺物を含まず整地層では無いと判断し、下層確認として調査区北側と西側を断割り掘削した。2023 年 1 月 27 日に埋め戻し作業を行い、1 区の調査は終了した。



図 1 調査地位置図（1：2,500）



1. 調査前（北東から）



2. 1区重機掘削作業（東から）



3. 1区遺構掘削作業（東から）



4. 2区重機掘削作業（東から）



5. 2区遺構掘削作業（南東から）



6. 発掘現場一般公開での遺物展示状況



7. 埋め戻し作業（南東から）



8. 調査完了後（東から）

図2 調査経過写真

2区の調査は、1月28日より近現代の造成土と耕作土層、床土層を重機により除去し、1区と同様に第1面の検出を試みたが遺構の痕跡が見られず、また建物の撤去の際の攪乱で第1面の整地層の大部分は失われており、協議の結果第2面まで掘削を行った。その結果、東西方向と南北方向の耕作溝を8条検出した。第2面の記録作業実施後、第2面の整地層を除去し、第3面の精査および遺構検出を行った。その結果、南北朝時代の礎石建物2棟、土坑3基および区画溝を検出した。第3面の記録作業実施後、第3面の整地層を除去し、第4面の精査および遺構検出を行った。その結果、平安時代末期～鎌倉時代の区画溝・耕作溝・柱穴を検出した。第4面は遺物を含まないことから整地層では無いと判断し、下層確認として調査区西側と南側を断割り掘削した。2月20日に埋め戻し作業を行い、2月21日に全ての作業を終了した。

なお、写真撮影機材は、35mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35mm白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の検査および指導を受けた。また、遺構検出段階および掘削段階において、本調査の検証審査員である國下多美樹氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

3 測量基準点の設置と地区割り（図3）

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にT.1、T.2を設置し、その2点からトータルステーションによりT.3、T.4を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

T.1	X = -112,074.530 m	Y = -24,445.796 m	H = 20.909 m
T.2	X = -112,061.289 m	Y = -24,448.216 m	H = 21.088 m
T.3	X = -112,071.121 m	Y = -24,472.548 m	H = 21.040 m
T.4	X = -112,085.237 m	Y = -24,457.142 m	H = 20.923 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して3mグリッドを設定した。Y軸にアルファベットを西から東に、X軸にアラビア数字を北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。

4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した田邊貴教、編集作業は中西佳奈江が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

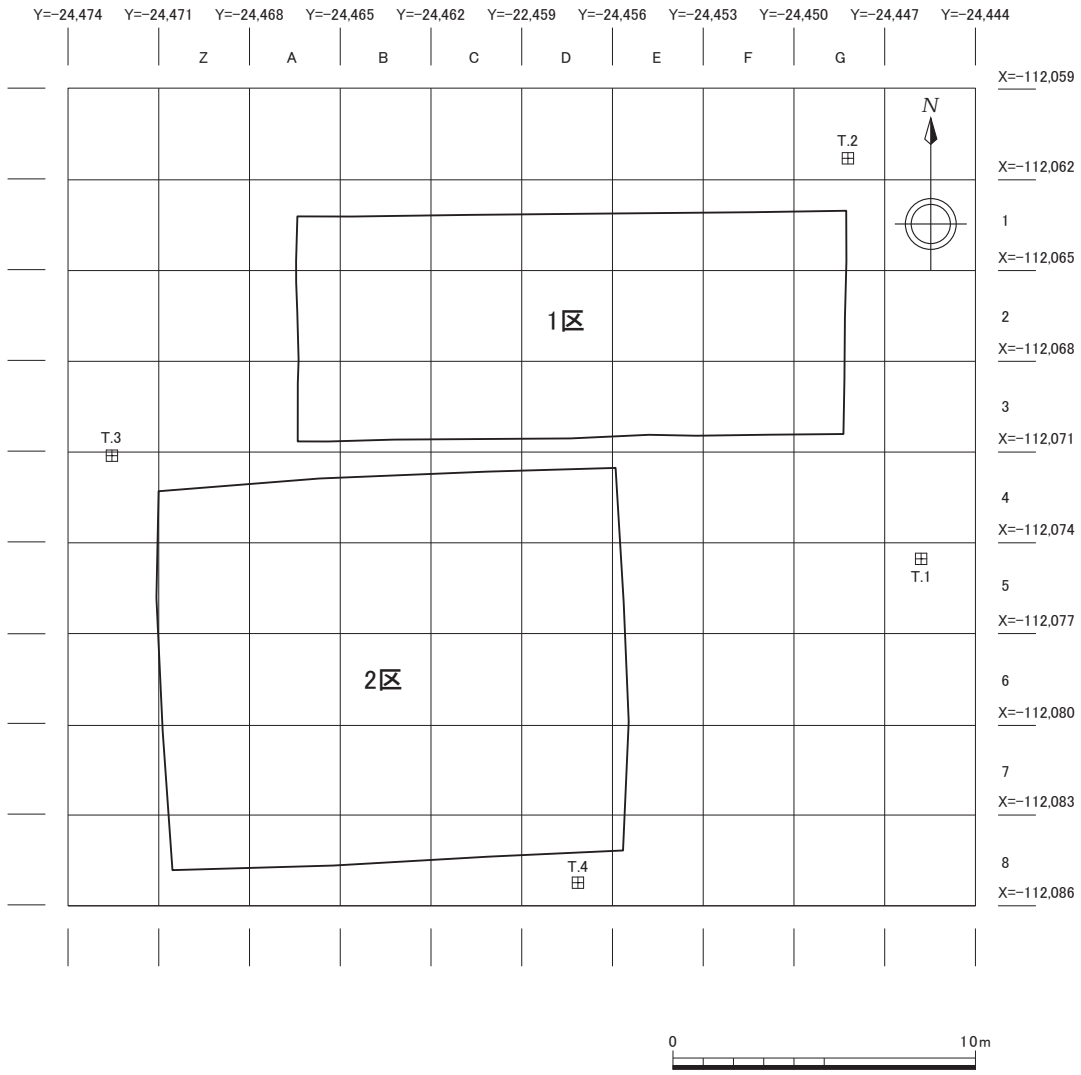


図3 調査区地区割り・基準点配置図 (1 : 250)

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境 (図4)

調査地は平安京では右京七条二坊十二町の南西部にあたる。この町域は北を北小路、南を七条大路、西を野寺小路、東を西堀川小路に囲まれる。また西市外町の西端に位置する。西市は東市とともに平安京内に置かれた官営の市で、『日本紀略』によると、延暦十三(794)年に平安京遷都に先立って長岡京から移設された⁽¹⁾。東西の市はそれぞれ「市町」が4町、その東西南北に付属する「外町」が8町の計12町を占めており、市司によって統括されていた。市は東市が月の15日まで、西市が月の16日以降に開かれ、それぞれの市で取り扱う品が異なっていた⁽²⁾。しかし、水はけが悪い湿地帯だった右京域の衰退に伴い、西市も同様に寂

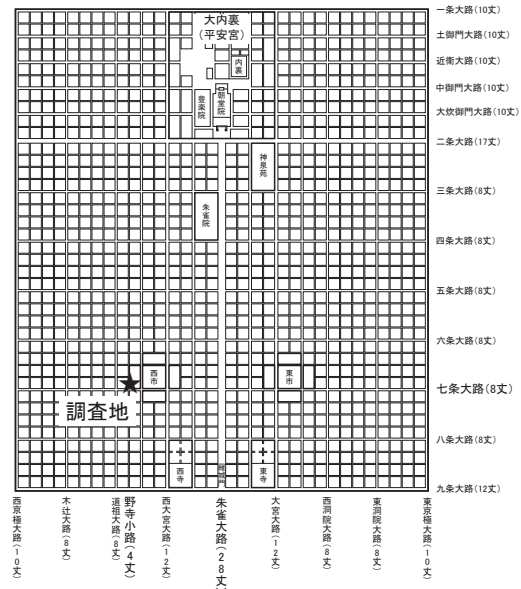


図4 平安京条坊図(1:80,000)

れていったとみられ、承和二(835)年に新たに西市の専売品を設け⁽³⁾、承和八年には西市北東の空閑地に「右坊城出挙銭所」を設置するなどの対策が行われたが⁽⁴⁾、効果はなく西市は衰退、右京域が農村化されるに伴い、西市も農村化したものとみられる。

鎌倉時代になると、現在と同じ「西七条」の地名が定着していたようで、「平家物語」巻八に「北方なのめならず悦、宮いざなひまいらせて、西七条なる所まで出られたりしを」という記述がみられる。江戸時代には西七条村は天領、松尾大社御旅所領、岩倉家領となっている⁽⁵⁾。

註

- (1) 『日本紀略』延暦十三年七月一日条
- (2) 『延喜式』東西市司
- (3) 『續日本後記』承和九年十月二十日条
- (4) 『續日本後記』承和九年十月二十日条
- (5) 下中邦彦「京都市の地名」『日本歴史地名大系27』平凡社 1979年

参考文献

財団法人 古代学協会・古代学研究所『平安京提要』1994年

2 既往の調査（図5・表1）

調査地周辺ではこれまでに発掘調査、試掘調査、立会調査が実施されている。例として、右京七条二坊十二町内において1997年に実施された右京七条二坊跡の発掘調査（23）では、平安時代から鎌倉時代の柱穴・柵・井戸・土坑・溝などを検出している。1977年の発掘調査（5）では、平安時代の柱穴・土坑・溝・井戸を、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物・柱穴・柵・土坑・井戸等を検出している。

右京七条二坊十一町内では、1993年の立会調査（17）で平安時代の流路状遺構・北小路南側溝が、1981年（19）、1983年（20）の立会調査で平安時代の湿地と包含層が、2005年の試掘調査（22）で平安時代後期～鎌倉時代の柱穴・土坑・溝・流路が検出されている。

西堀川小路の調査では、1984年の発掘調査（14）にて西堀川小路の東側溝と築地を検出したほか、平安時代後期～室町時代の西堀川と想定される流路を検出している。

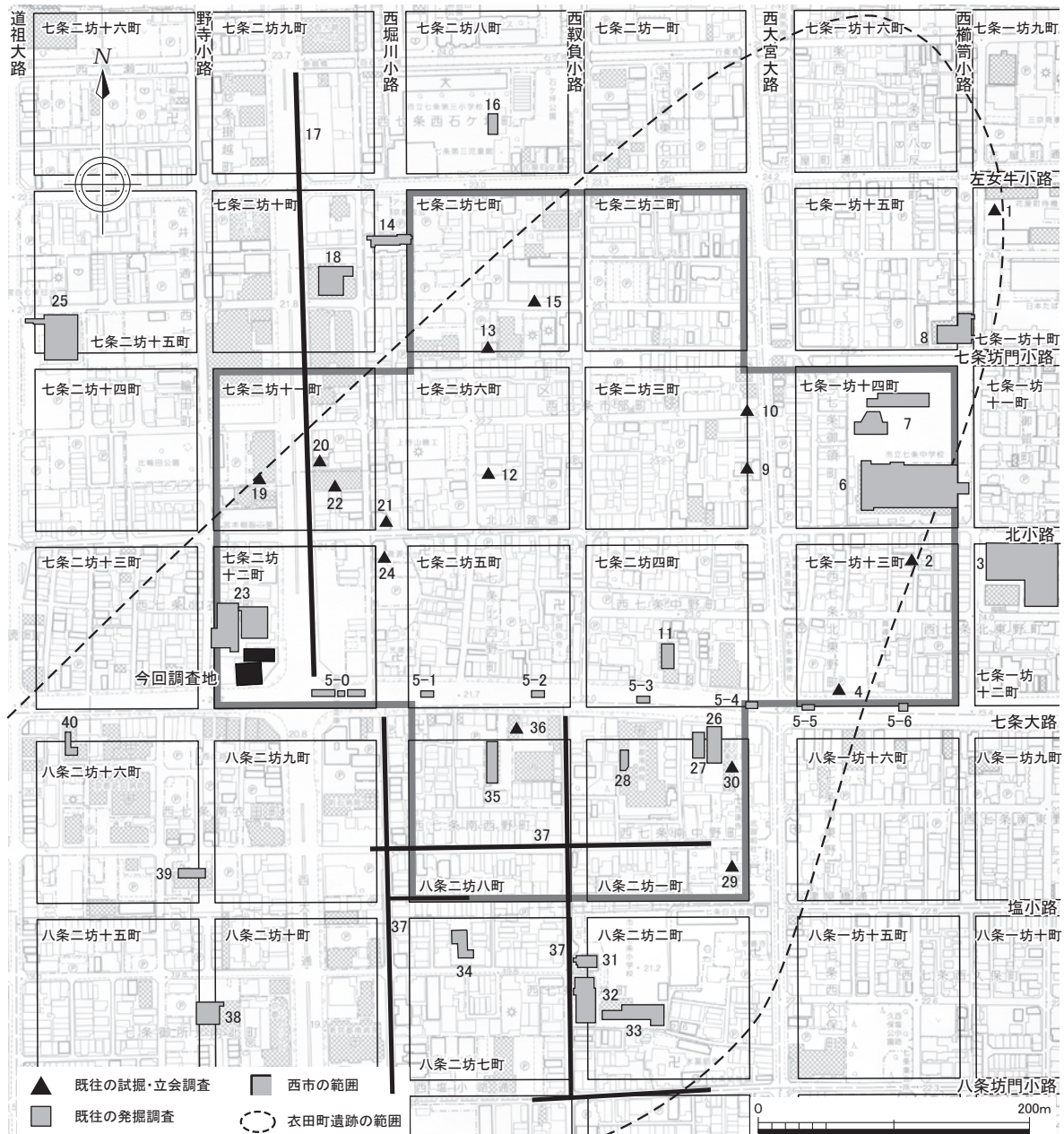


図5 既往調査位置図（1：5,000）

表1 既往調査一覧表

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	七条一坊十町	立会	明治時代以前の低湿地。	『平安京右京七条一坊』『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概報』埋文研 1989年
2	七条一坊十三町(外町)	立会	平安時代の土坑。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
3	七条一坊十二町	発掘	平安時代前期～中期の掘立柱建物・柵・井戸・溝・土坑・柱穴。北小路の南側溝。	『平安京右京七条一坊十二町跡』『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-12』埋文研 2019年
4	七条一坊十三町(外町)	立会	平安末期～鎌倉時代の土坑。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
5	七条一坊十三町・二坊四・五・十二町	発掘	平安時代前期の井戸・溝・集石・柱穴・土坑・土器溜・炉跡。鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物・柵・井戸・集石・柱穴・土坑。江戸時代の掘立柱建物・井戸・柱穴・土坑・落込み。遺物・平安時代前期の鉄滓が付着した土師器甕・杯・皿。	『平安京右京七条一・二坊、西市跡』『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011年
6	七条一坊十四町(外町)	発掘	平安時代前期～中期の掘立柱建物・柵・井戸・溝・土坑。西櫛笥小路の西側溝。	『平安京右京七条一坊』『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1999年
7	七条一坊十四町(外町)	発掘	弥生時代の方形周溝墓・落込み。平安時代前期の掘立柱建物・井戸・溝。	『平安京右京七条一坊十四町・衣田町遺跡』『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011年
8	七条一坊十五町	発掘	奈良時代以前の流路。平安時代前期～中期の掘立柱建物・柵・井戸・水利施設・流路。西櫛笥小路の西側溝。	『平安京右京七条一坊十五町跡』『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-19』埋文研 2009年
9	七条二坊三町(市町)	立会	平安時代前期～後期の土坑・西大宮大路の西側溝。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
10	七条二坊三町(市町)	立会	西大宮大路の西側溝。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
11	七条二坊四町(市町)	発掘	平安時代末期～鎌倉時代の柱穴・土坑。室町時代の柱穴・土坑・溝。江戸時代以降の土坑・柱穴・土取り穴・井戸。遺物・鎌倉時代後半の輪羽口・鉄塊。	『平安京右京七条二坊四町(西市)跡』『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-6』埋文研 2005年
12	七条二坊六町(市町)	立会	縄文時代の落込み、弥生時代の溝、平安時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局・埋文研 1982年
13	七条二坊七町(外町)	立会	遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
14	七条二坊七町(外町)	発掘	平安時代前期の西堀川小路東側溝・築地、平安時代後期～室町時代の流路、江戸時代の高瀬川の流路。	『平安京跡発掘調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
15	七条二坊七町(外町)	立会	弥生時代の竪穴住居か。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
16	七条二坊八町	発掘	平安時代中期の溝。	『右京七条二坊』『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』埋文研 1983年
17	七条二坊九～十二町	立会	平安時代の流路状遺構・北小路南側溝。時期不明の井戸。	『平安京右京七条二坊』『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1993年
18	七条二坊十町	発掘	奈良時代以前の流路。平安時代前期の掘立柱建物・柵・井戸・土坑。平安時代中期の柱穴・溝。	『平安京右京七条二坊』『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1994年
19	七条二坊十一町(外町)	立会	平安時代中期の包含層。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』埋文研 1981年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
20	七条二坊十一町 (外町)	立会	平安時代の池または湿地。	『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年
21	七条二坊十一町 (外町)	立会	平安時代の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年
22	七条二坊十一町 (外町)	試掘	平安時代後期～鎌倉時代の柱穴・土坑・溝・流路。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局 2005年
23	七条二坊十二町 (外町)	発掘	平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物・柵・井戸・柱穴群。	『平安京右京七条二坊』『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1999年
24	七条二坊十二町 (外町)	立会	平安時代の包含層・溝。	『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1987年
25	七条二坊十五町	発掘	古墳時代の流路。平安時代の掘立柱建物・井戸・溝・土坑。平安時代中期の七条坊門小路北側溝。鎌倉時代以降の溝。	『平安京右京七条二坊』『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1993年
26	八条二坊一町 (外町)	発掘	平安時代の七条大路路面と南側溝・流路・区画溝・土坑(井戸か)・柱穴。鎌倉時代～室町時代の七条大路路面と南側溝・区画溝・井戸・溝・土坑・柱穴・土取り穴。江戸時代の七条大路南側溝・溝・井戸・竈・土坑・土取り穴。遺物・鎌倉時代～室町時代の鉄滓。	『平安京右京八条二坊・西市跡』『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1994年
27	八条二坊一町 (外町)	発掘	平安時代後期～室町時代の掘立柱建物・柱穴・土坑。平安時代後期～鎌倉時代の七条大路路面と南側溝。	『右京八条二坊(1)』『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』埋文研 1983年
28	八条二坊一町 (外町)	発掘	平安時代前期の井戸。平安時代中期の柱穴。鎌倉時代～室町時代の土坑・柱穴群。	『平安京右京八条二坊一町』『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011年
29	八条二坊一町 (外町)	立会	平安時代後期の土坑。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
30	八条二坊一町 (外町)	立会	平安時代の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
31	八条二坊二町	発掘	平安時代前期の流路。平安時代前期～中期の西靱負小路路面と東西側溝・区画溝。鎌倉時代の溝・土坑。	『平安京右京八条二坊』『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1988年
32	八条二坊二町	発掘	平安時代前期の流路・西靱負小路路面と東西側溝・区画溝・掘立柱建物・柵・土留め・土坑・護岸施設。	『平安京右京八条二坊』『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1996年
33	八条二坊二町	発掘	平安時代前期の池状遺構・堤状遺構。平安時代中期の掘立柱建物。室町時代の井戸・土坑墓。	『平安京右京八条二坊』『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1985年
34	八条二坊七町	発掘	弥生時代～古墳時代中期の竪穴建物・湿地。平安時代前期の土坑。	『平安京右京八条二坊』『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
35	八条二坊八町 (外町)	発掘	平安時代前期～中期の溝・土坑・柱穴・湿地。平安時代後期～鎌倉時代の井戸・溝・土坑・柱穴。桃山時代の井戸・柱穴。江戸時代の井戸・溝・土坑・柱穴。	『平安京右京八条二坊七町跡・衣田町遺跡発掘調査報告書』『文化財サービス発掘調査報告書 第17集』株式会社文化財サービス 2021年
36	八条二坊八町 (外町)	立会	平安時代の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
37	八条二坊一～ 三・六～九町	立会	平安時代の西靱負小路東側溝を検出。	『右京八条二坊』『平安京跡発掘調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
38	八条二坊十・十五町	発掘	平安時代前期～中期の野寺小路路面と東西側溝・掘立柱建物・柵・柱穴。室町時代～江戸時代の溝。	「平安京右京八条二坊十・十五町跡、衣田町遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-8』埋文研 2008年
39	八条二坊十六町	発掘	平安時代前期の野寺小路路面と西側溝・溝・柱穴群。	「右京八条二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
40	八条二坊十六町	発掘	平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物・柱穴。鎌倉時代の七条大路路面と南側溝。	「右京八条二坊(2)」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』埋文研 1983年

埋文研→公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

第三章 調査成果

1 基本層序（図6・7）

基本層序は8層に分けられる。

第1層は灰黄褐色砂質土からなる近現代の造成土で、煉瓦片・瓦片・陶磁器類・タイルなどを含む。また宅地の時期に使用されていた便壺とみられる埋壺も出土した。

第2層は灰黄褐色シルトからなる近世以降の耕作土で、1区では削平のため失われている。

第3層は明褐色シルトからなる近世以降の床土である。

第4層は黒褐色シルトからなる室町時代後期以降の整地層である。平安時代～室町時代に至る遺物片を多く含むが、近世の遺物は見られない。この上面を第1面とした。

第5層は黒褐色シルトからなる室町時代前期～中期の整地層である。平安時代～鎌倉時代の遺物を多く含み、室町時代の遺物も少量含む。この上面を第2面とした。

第6層は黒褐色シルトからなる南北朝時代の整地層である。平安時代～鎌倉時代の遺物を多く含む。この上面を第3面とした。

第7層は黒褐色粘質土からなる層である。この上面を平安時代末期～鎌倉時代の第4面とした。

第8層はオリーブ黒色からなる砂質シルトである。

第7層と第8層は自然堆積層であるが、第7層は底湿地に堆積した泥濘の様相を呈する。鎌倉時代以前はそのままの状態であったが、南北朝時代以後に土地利用を可能にするため、層厚約0.2m前後の整地を行っている。

2 検出遺構（表2）

今回の調査では、室町時代前期～中期の耕作溝、区画溝、南北朝時代の礎石建物・柱列・土坑・区画溝、平安時代末期～鎌倉時代の耕作溝・柱穴・土坑・区画溝を確認した。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
室町時代後期以降	柱穴 001・003、溝 002	
室町時代前期～中期	土坑 004、溝 005～013・028・061～068	
南北朝時代	礎石建物 140～142、柱列 143、土坑 004、溝 031・034・038・039・040・069・072・135、柱穴 041・073・078・079・080・088・097	
平安時代末期～鎌倉時代	土坑 045・048・050・104・106・108・109・115・116・120・126・129・130・138、溝 032・033・043～047・049・051～053・056・107・118・127、柱穴 041・042・045・055・057～060・070・071・098・100・102・105・110・111・117・119・121～125・128・131～136・137・139	

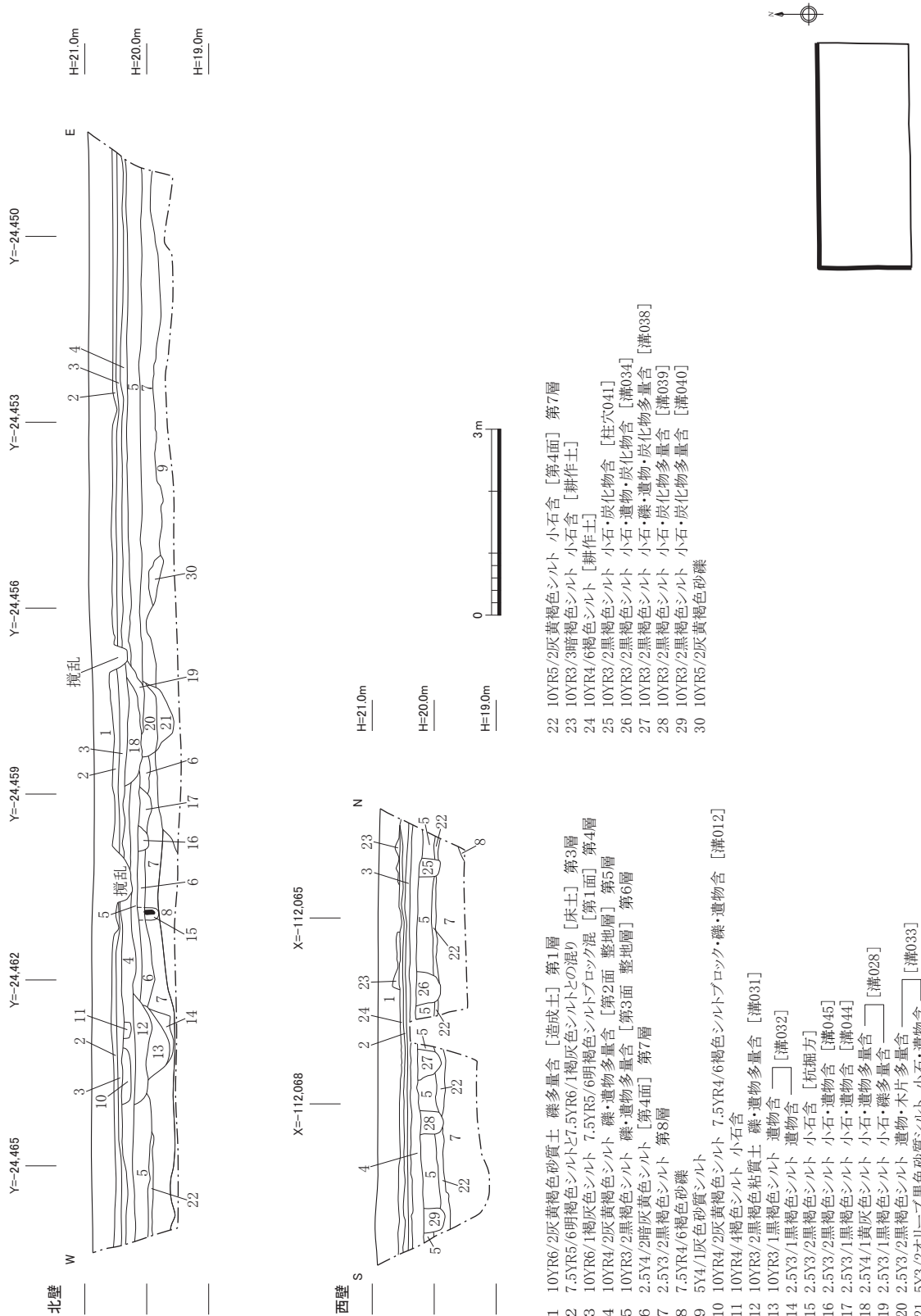


図6 1区調査区北壁・西壁断面図 (1:100)

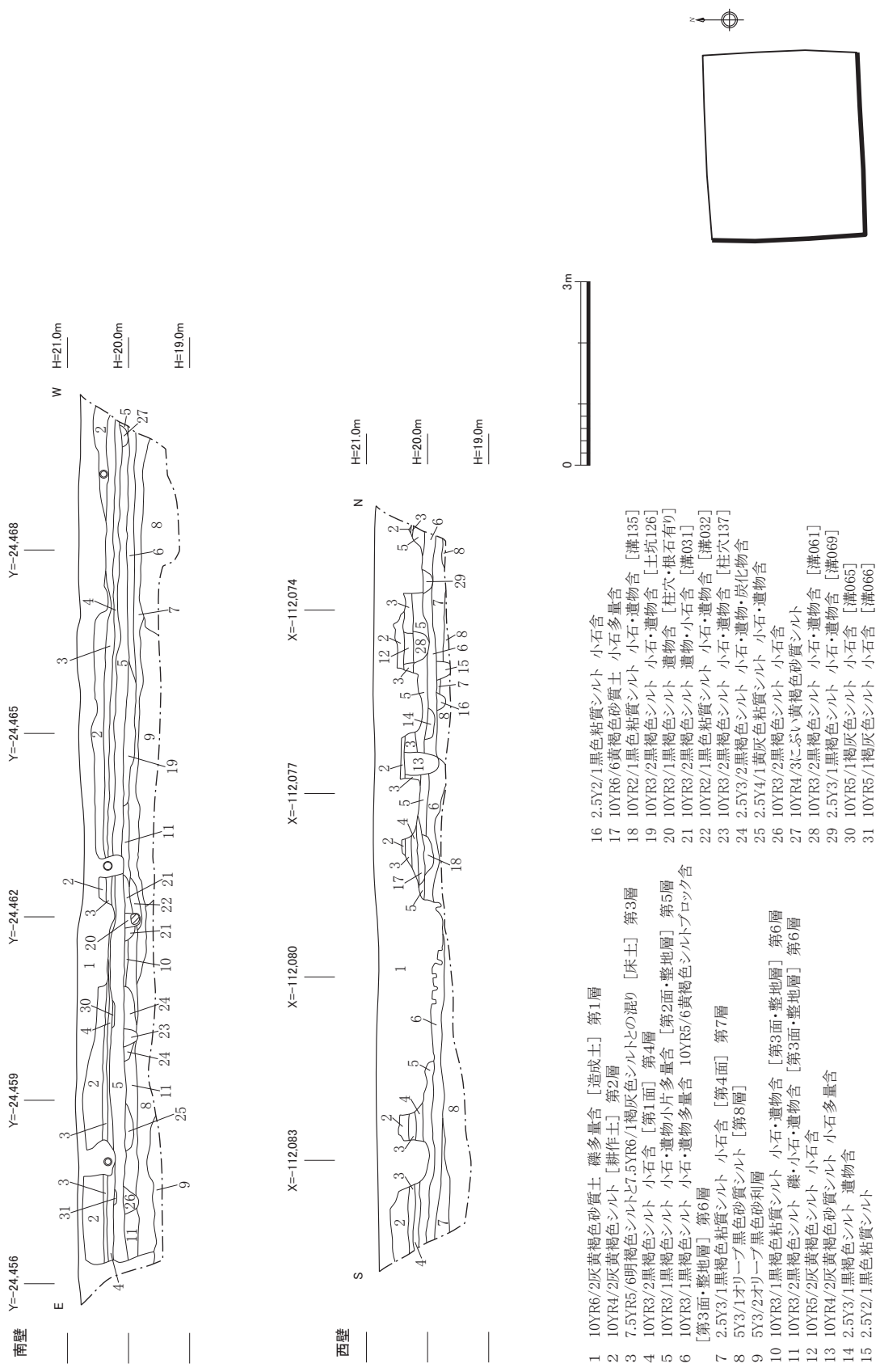


図7 2区調査区南壁・西壁断面図 (1 : 100)

(1) 1区

(I) 第1面 (図8、図版1-1・2)

第1面は第4層の整地が行われた後の室町時代後期以降(16世紀)と想定される。溝、柱穴を検出した。

[柱穴]

柱穴001

G2で検出した。検出時の規模は、東西長約0.2m、南北長約0.4m、深さ0.04m。埋土は褐灰色シルトで礫を含む。遺物の出土は無かった。

柱穴003

B2で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.3m、深さ0.17m。埋土は褐灰色シルトで礫を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片、13世紀の所産と考えられる瓦器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

[溝]

溝002

D1～D3で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約6.8m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで、礫を含む。遺物は18世紀～19世紀頃の所産と考えられる陶磁器片・銅銭(寛永通宝)が出土した。近世以降の溝である。

(II) 第2面 (図9、図版2-1・2)

第2面は第5層の整地が行われた後の室町時代前期～中期(14世紀～15世紀)と想定される。南北方向の耕作溝、区画溝を検出した。

[土坑]

土坑004

D1～D2で検出した。検出時の規模は、東西長約1.0m、南北長約1.2m、深さ約0.6mで底面は丸みを帯びた方形の土坑である。溝010を切り込んでいる。埋土は暗灰黄色シルトで、小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片、13世紀の所産と考えられる瓦器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

[溝]

溝005

F1～F3・G1～G3で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5m、南北長約5.3m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。耕作溝と思われる。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片、13世紀の所産と考えられ

る瓦器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝006

F 1～F 3で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約5.3m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。耕作溝と思われる。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片、13世紀の所産と考えられる瓦器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝007

F 1～F 3で検出した。検出時の規模は、東西長0.25m、南北長約5.4m、深さ0.04mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は灰黄褐色シルトで小石を含む。耕作溝と思われる。遺物の出土は無かった。

溝008

E 1～E 3で検出した。検出時の規模は、東西長約1.5m、南北長約6.7m、深さ0.08mで底面は平坦の南北方向の溝である。埋土は褐灰色シルトと黄灰色シルトの混じりで小石を含む。幅約1.4mほどの溝であるため、区画溝あるいは小径の側溝である可能性がある。遺物は9世紀前半頃の所産と考えられる緑釉陶器片、9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片、13世紀の所産と考えられる瓦器片が出土した。整地層からの混入と思われる。

溝011

C 1～C 3で検出した。検出時の規模は、東西長約0.7m、南北長約6.0m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は灰褐色シルトと褐灰色シルトの混じりで小石を含む。幅約1.0mほどの溝であるため、区画溝あるいは側溝の可能性はある。遺物は15世紀頃の所産と考えられる瀬戸産の鉄釉仏花器が出土した。他に9世紀前半頃の所産と考えられる緑釉陶器片・灰釉陶器片、9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片、13世紀の所産と考えられる瓦器片が出土した。9世紀～13世紀の遺物は埋め立ての際に用いられた土への混入とみられる。

溝012

B 1～B 3で検出した。検出時の規模は、東西長約1.7m、南北長約6.8m、深さ約0.1mで底面は平坦の南北方向の溝である。埋土はにぶい黄橙色シルトと褐灰色シルトの混じりで礫を多量に含むことから、溝012の埋立てに礫を使用したものと考えられる。幅約1.5mほどの溝であるため、区画溝あるいは小径の側溝である可能性がある。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片、13世紀の所産と考えられる瓦器片が出土した。埋め立ての際に用いられた土への混入とみられる。

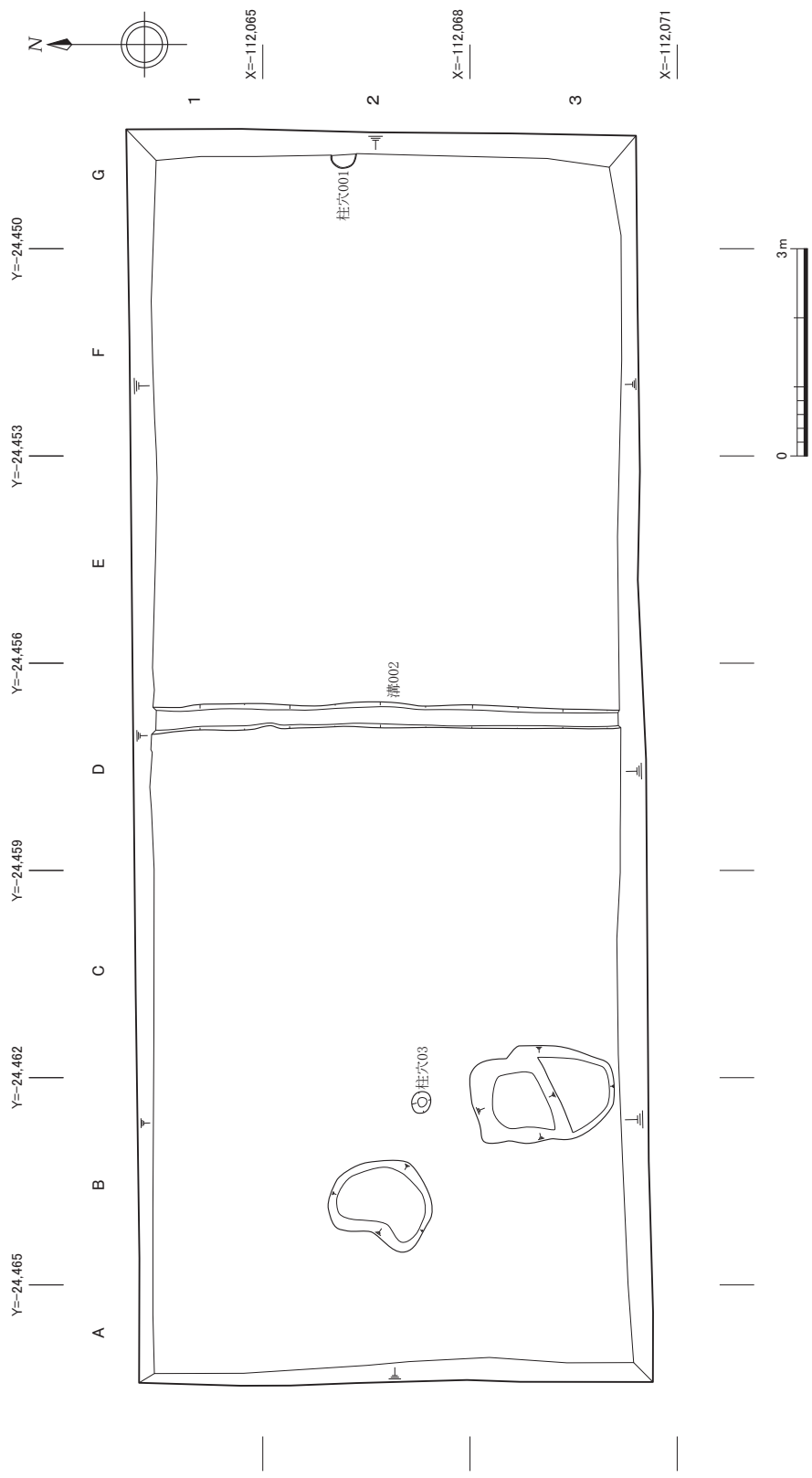


图8 1区第1面平面图 (1 : 100)

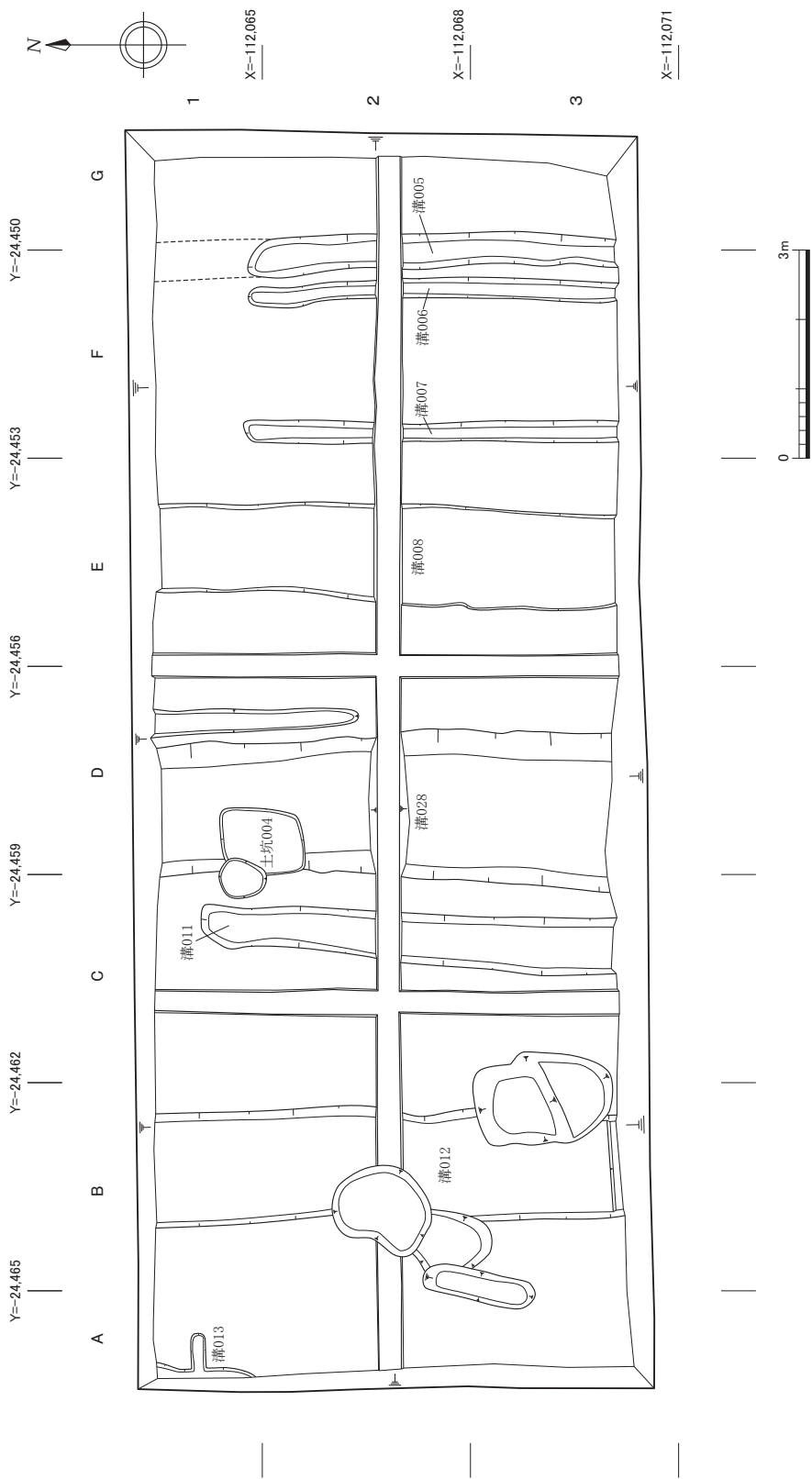


图9 1区第2面平面图 (1 : 100)

溝013

A 1で検出した。検出時の規模は、東西長約0.2m、南北長約1.4m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は褐灰色シルトの混じりで小石を含む。耕作溝と思われる。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝028

C 1～C 3・D 1～D 3で検出した。検出時の規模は、東西長約2.3m、南北長約6.7m、深さ約0.3mで底面は平坦の南北方向の溝である。埋土は上層が黄灰色シルトで小石を多量に含み、下層が黒褐色シルトで礫を多量に含む。溝012と同じく埋立ての際に礫を使用したものと考えられる。幅約2.0mほどの溝であるため、区画溝あるいは小径の側溝である可能性がある。遺物は15世紀頃の所産と考えられる瀬戸産の天目茶碗片が出土した。他に9世紀前半頃の所産と考えられる緑釉陶器・灰釉陶器片、9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片、13世紀の所産と考えられる瓦器・瓦質土器片が多量に出土した。9世紀～13世紀の遺物は埋め立ての際に用いられた土への混入と思われる。なお、当初検出していた溝009、溝010は溝028と同一遺構と判明した。

(Ⅲ) 第3面 (図10、図版3-1・2)

第3面は第6層による整地が行われた後、南北朝時代(14世紀)に属すると考えられる。区画溝・礎石建物・柱列を検出した。

〔溝〕

溝031

B 1～B 3で検出した。検出時の規模は、東西長約2.0m、南北長約6.6m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は黒褐色シルトで礫を含む。第2面の溝012の直下に構築されており、区画溝か小径の側溝である可能性がある。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀の所産と考えられる瓦器が出土した。埋め立ての際に用いられた土への混入と思われる。

溝034

A 2～B 2で検出した。検出時の規模は、東西長約1.6m、南北長約0.3m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は黒褐色シルトで小石、炭化物を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片、13世紀の所産と考えられる瓦器が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝038

A 2～B 2で検出した。検出時の規模は、東西長1.45m、南北長0.35m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は黒褐色シルトで小石、炭化物を含む。遺物は9～11

世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片、13世紀の所産と考えられる瓦器が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝039

A2～B2・A3～B3で検出した。検出時の規模は、東西長約1.6m、南北長約0.5m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は黒褐色シルトで小石、炭化物を含む。遺物の出土は無かった。

溝040

A3～B3で検出した。検出時の規模は、東西長約1.8m、南北長約0.4m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は黒褐色シルトで炭化物を多く含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝041

A1で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長0.35m、深さ0.01mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は黒褐色シルトで小石、炭化物を含む。遺物の出土は無かった。

[礎石建物]

礎石建物140 (図11、図版4-1・2)

柱穴014～017、022～027、029、030からなる東西3間、南北2間の総柱の建物として検出した。西に約3度傾いている。東西の柱間は約2.0m(約7尺)、南北の柱間は約1.8m(約6尺)である。

柱穴014 (図11)

G1で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで炭化物を含む。埋土上に径約0.2mの礎石を据えている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴015 (図11)

F1で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.3m、深さ0.16mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで炭化物を含む。埋土上に径約0.2mの礎石を据えている。遺物は9世紀前半頃の所産と考えられる緑釉陶器片、9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴016 (図11)

E1で検出した。検出時の規模は、東西長0.35m、南北長0.35m、深さ0.14mで底面は丸みを帯

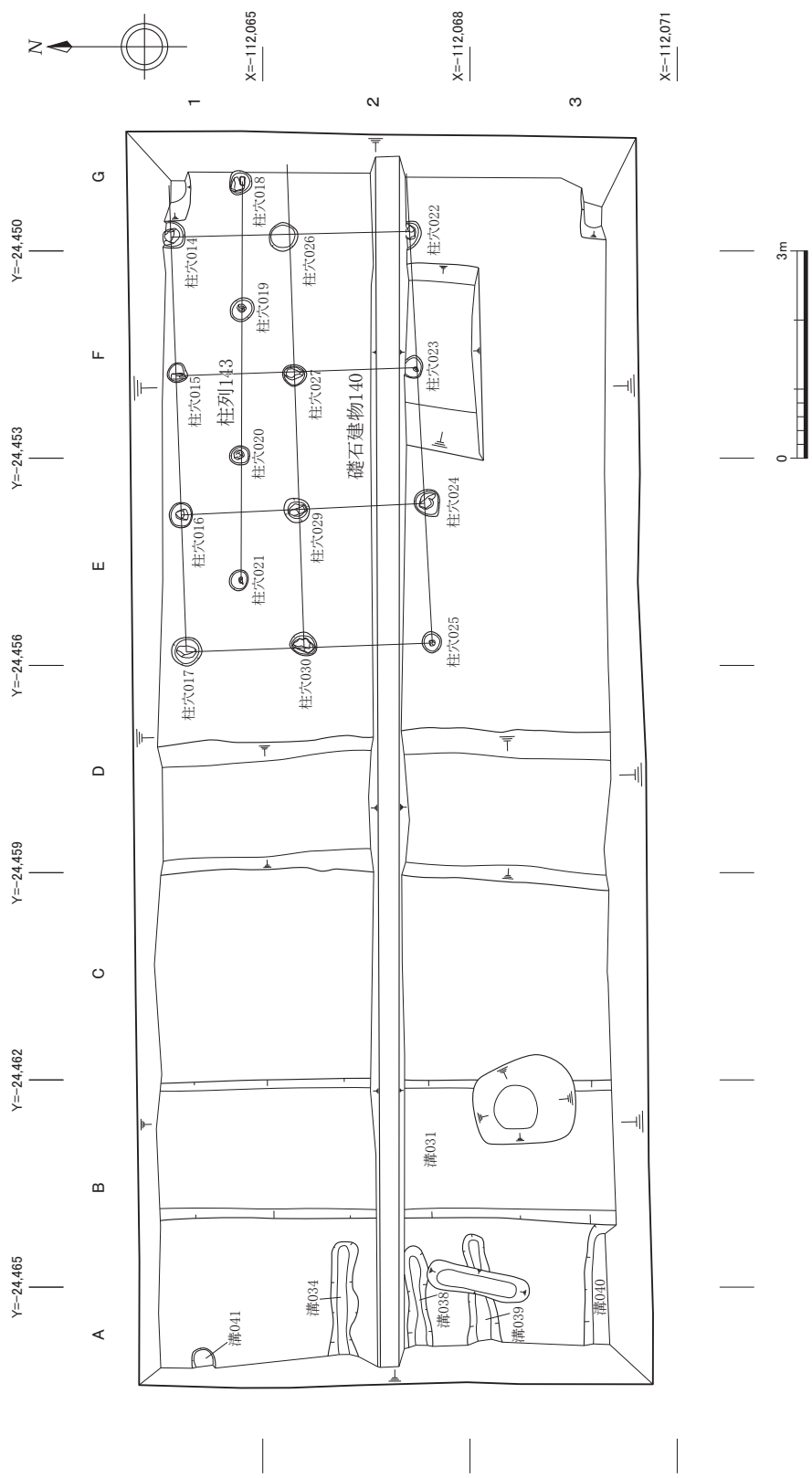


图 10 1 区第 3 面平面图 (1 : 100)

びている。埋土は黒褐色シルトで炭化物を含む。埋土に半分埋もれる形で径約0.2mの礎石を据えている。遺物の出土は無かった。

柱穴017 (図11)

E 1で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長0.45m、深さ0.16mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで炭化物を含む。埋土上に径約0.3mの礎石を据えている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴022 (図11)

G 2で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.3m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで炭化物を含む。埋土上に径約0.2mの礎石を据えている。遺物の出土は無かった。

柱穴023 (図11)

F 2で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長0.25m、深さ0.14mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。礎石は無く、廃絶後に失われた可能性がある。遺物の出土は無かった。

柱穴024 (図11)

E 2で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで小石、炭化物を含む。埋土上に径約0.2mの礎石を据えている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴025 (図11)

E 2で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ0.14mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで小石、炭化物を含む。柱材の一部が残存する。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴026 (図11)

G 2で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ0.14mで底面は丸みを帯びている。埋土は黄灰色シルトで炭化物を含む。礎石は無く、廃絶後に失われた可能性がある。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴027 (図11)

F 2で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長0.35m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色粘質土で炭化物を含む。埋土上に径約0.3mの礎石を据えている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴029 (図11)

E 2で検出した。検出時の規模は、東西長0.35m、南北長約0.4m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。埋土は褐色シルトで炭化物を含む。底面に径約0.3mの礎石を据えている。遺物の出土は無かった。

柱穴030 (図11)

E 2で検出した。検出時の規模は、東西長0.35m、南北長約0.4m、深さ0.16mで底面は丸みを帯びている。埋土は灰黄褐色シルトで炭化物を含む。底面に径約0.3mの礎石を据えている。遺物の出土は無かった。

〔柱列〕

柱列143 (図11)

柱穴018～021からなる3間の東西方向の柱列として検出した。礎石建物140と重なり、柱間は柱穴018～柱穴019、柱穴020～柱穴021が約1.8m(6尺)、柱穴019～柱穴020が約2.1m(7尺)である。礎石の上に8面の面取りを施した柱材が残存する。

柱穴018 (図11)

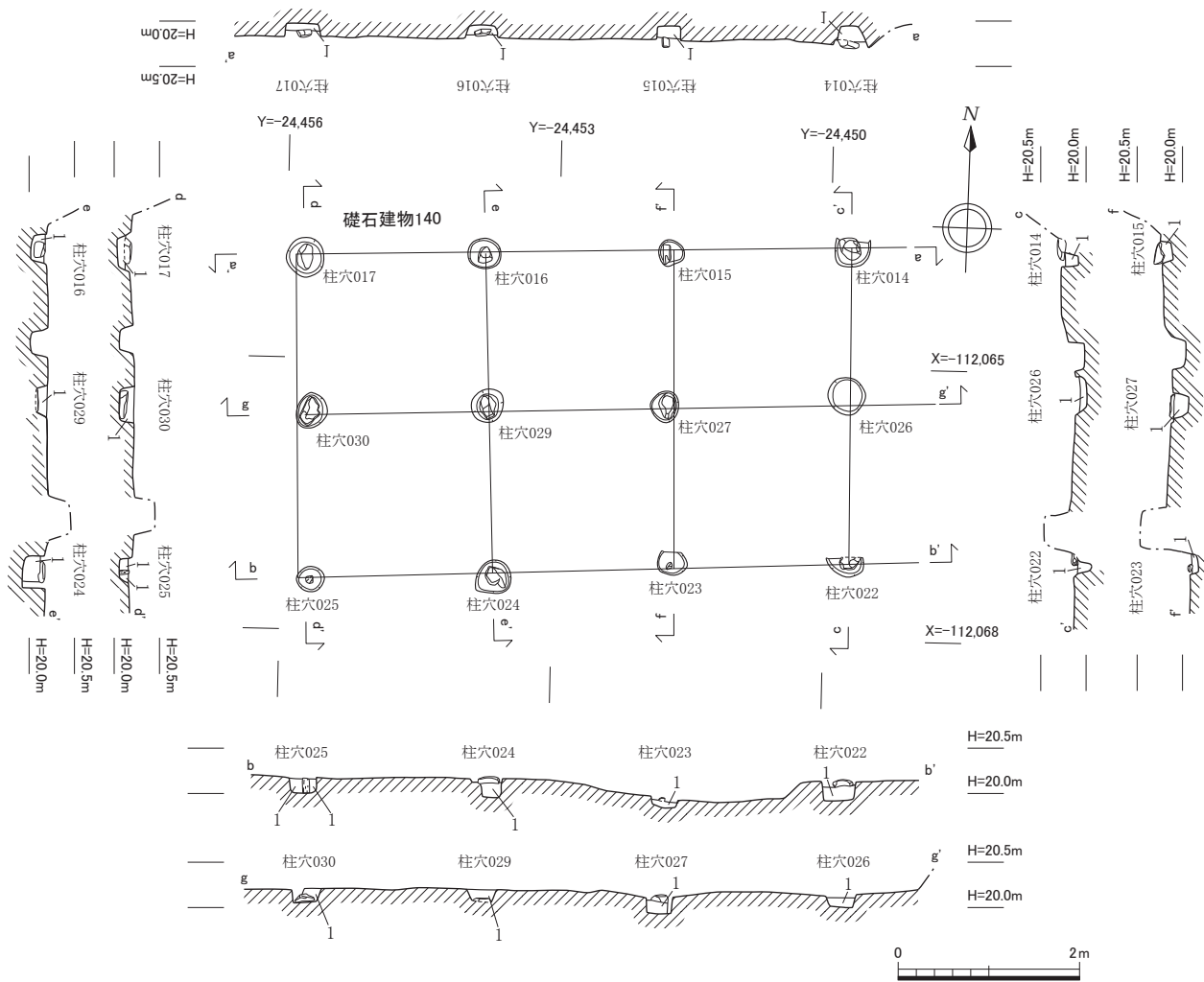
G 1で検出した。検出時の規模は、東西長0.35m、南北長約0.3m、深さ約0.1mで、底面は礎石を据えた上に柱を立て、掘方を埋めている。礎石の上に柱材が残る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・灰釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴019 (図11、図版5-1)

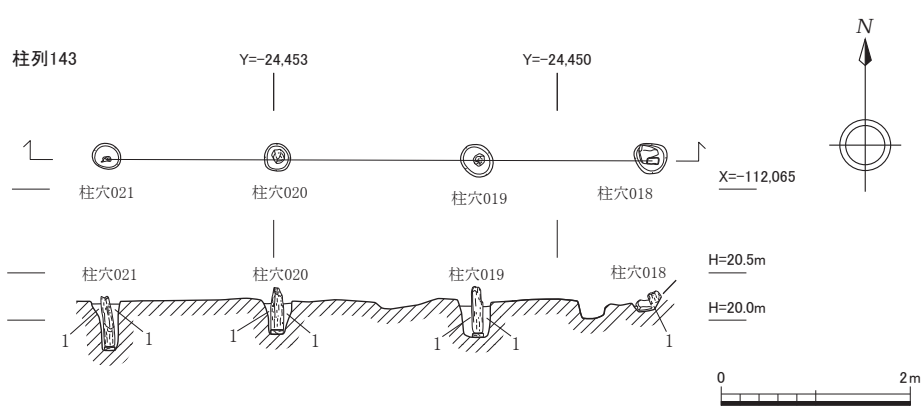
F 1で検出した。検出時の規模は、東西長0.35m、南北長0.35m、深さ約0.4mで、底面は礎石を据えた上に柱を立て、掘方を埋めている。礎石の上に柱材が残る。埋土は黒褐色シルトで炭化物を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴020 (図11、図版5-2)

E 1・F 1で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.3m、深さ0.36mで、底面



- | | | |
|----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|
| 柱穴014
1 10YR3/1黒褐色シルト 炭化物・遺物含 | 柱穴026
1 2.5Y4/1黄灰色シルト 炭化物含 | 柱穴022
1 10YR3/2黒褐色シルト 炭化物含 |
| 柱穴015
1 10YR3/1黒褐色シルト 炭化物・遺物含 | 柱穴027
1 2.5Y3/1黒褐色粘質土 炭化物含 | 柱穴023
1 10YR3/1黒褐色シルト |
| 柱穴016
1 10YR3/2黒褐色シルト 炭化物・遺物含 | 柱穴029
1 10YR4/1褐灰色シルト 炭化物・遺物含 | 柱穴024
1 2.5Y3/1黒褐色シルト 小石・炭化物含 |
| 柱穴017
1 2.5Y3/2黒褐色シルト 炭化物含 | 柱穴030
1 10YR4/2灰黄褐色シルト 炭化物・遺物含 | 柱穴025
1 10YR4/2灰黄褐色シルト 炭化物・遺物含 |



- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 柱穴018
1 2.5Y3/1黒褐色粘質土 | 柱穴020
1 10YR3/2黒褐色シルト 炭化物・遺物含 [掘方] |
| 柱穴019
1 2.5Y3/1黒褐色シルト 炭化物・遺物含 [掘方] | 柱穴021
1 10YR3/1黒褐色シルト 炭化物含 [掘方] |

图 11 1区礎石建物 140、柱列 143 平面・断面图 (1 : 80)

は礎石を据えた上に柱を立て、掘方を埋めている。礎石の上に柱材が残る。埋土は黒褐色シルトで炭化物を含む。遺物の出土は無かった。

柱穴021 (図11)

E1で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.3m、深さ約0.5mで、底面は礎石を据えた上に柱を立て、掘方を埋めている。礎石の上に柱材が残る。埋土は黒褐色シルトで炭化物を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

(Ⅳ) 第4面 (図12、図版6-1・2)

第4面は平安時代末期～鎌倉時代(12世紀末～13世紀)に属すると想定される。区画溝・耕作溝・土坑・柱穴を検出した。

[土坑]

土坑045 (図13)

D1で検出した。検出時の規模は、東西長0.75m、南北長約0.7m、深さ0.25mで底面は丸みを帯びた円形の土坑である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片、13世紀前半頃の所産と考えられる山茶碗が出土した。土師器と須恵器は整地層からの混入とみられる。山茶碗は東濃系の所産である。

土坑048 (図13)

E2・F2で検出した。検出時の規模は、東西長約1.0m、南北長約1.0m、深さ0.18mの底面は丸みを帯びたやや方形の土坑である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

土坑050 (図13)

F2で検出した。検出時の規模は、東西長約0.8m、南北長約0.7m、深さ約0.4mで底面は丸みを帯びた不定形の土坑である。埋土は黒褐色シルトで径約0.2m大の礫を埋めている。遺物の出土は無かった。

[溝]

溝032 (図14、図版7-1・2)

B1～B3で検出した。検出時の規模は、東西長約1.2m、南北長約6.4m、深さ約0.3mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は黒褐色シルトである。第3面の溝031の直下に位置する。遺物は13世紀前半～半ばの所産と考えられる土師器皿と瓦器碗が埋納された状態で、ま

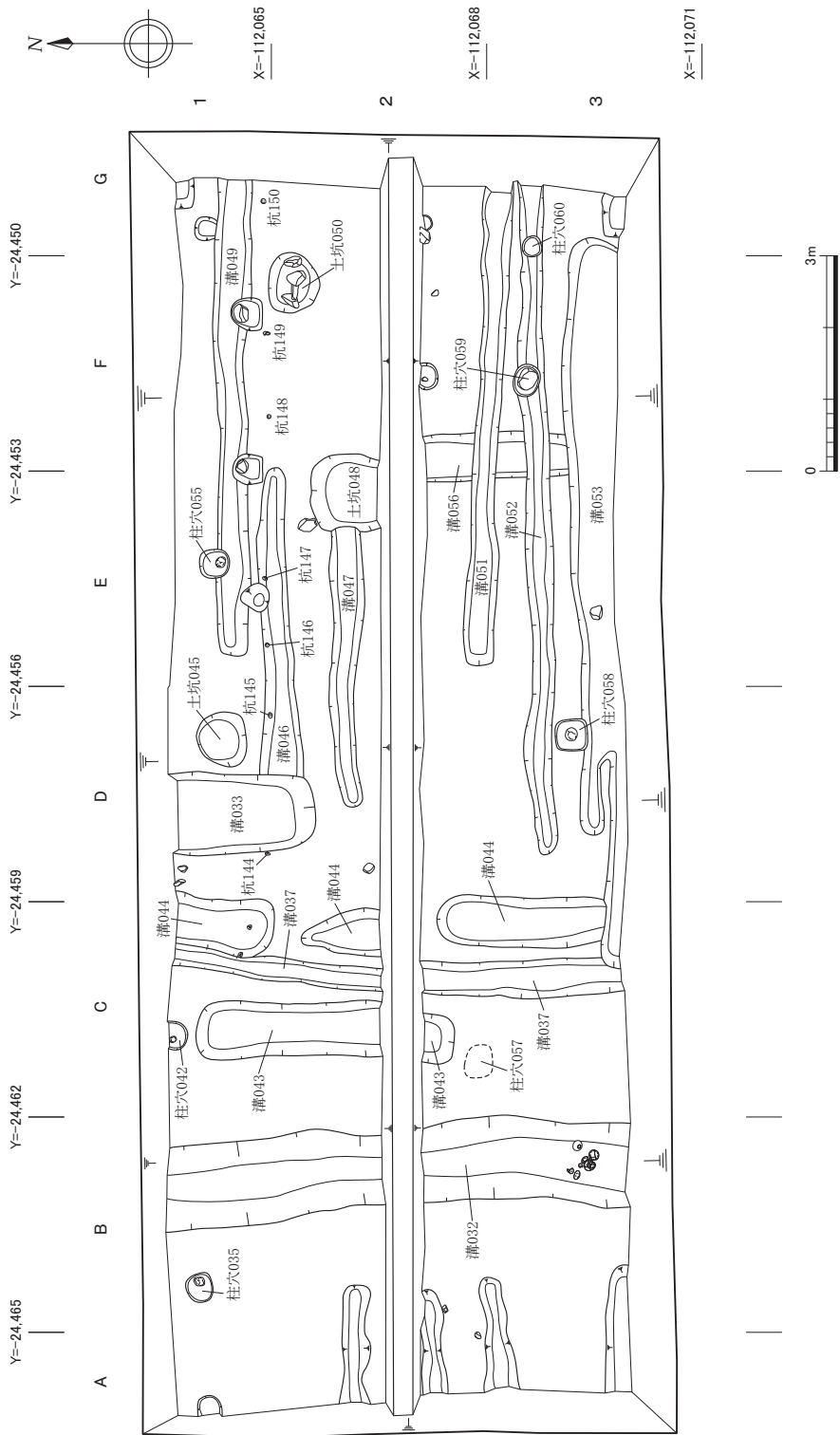
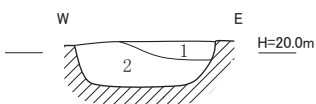
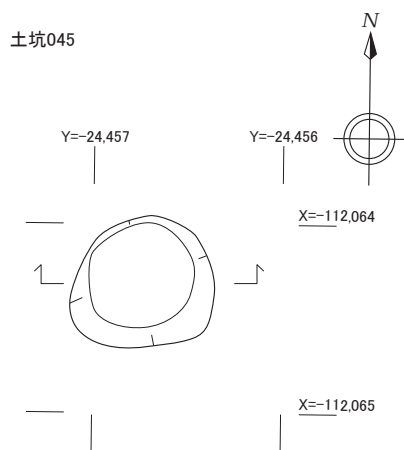
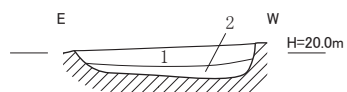
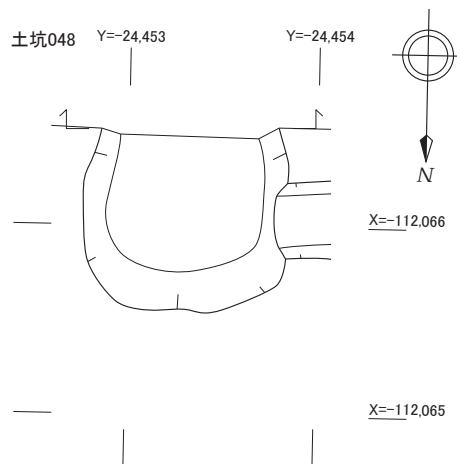


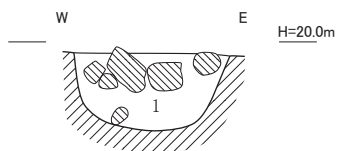
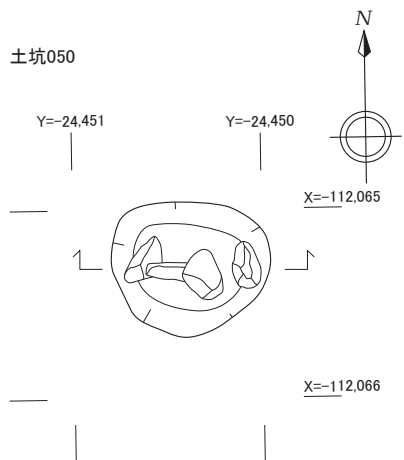
图 12 1区第4面平面图 (1 : 100)



- 1 10YR3/1黒褐色シルト 小石・遺物含
- 2 2.5Y3/1黒褐色シルト 小石・遺物含



- 1 2.5Y3/1黒褐色シルト 遺物・小石含
- 2 10YR3/1黒褐色シルト 遺物含



- 1 2.5Y3/1黒褐色シルト 小石含



図 13 1区土坑 045・048・050 平面・断面図 (1 : 40)

とまって出土した。瓦器椀は楠葉型Ⅲ－2型式である。溝032を埋め立てる際に何らかの儀式を行っていた可能性がある。また、13世紀頃の所産と考えられる「陀」の文字がある軒丸瓦が出土した。兵庫県小野市の浄土寺境内より出土した、創建時の瓦とされる「南無阿弥陀佛」文軒丸瓦と同一文異范とみられ、近隣に阿弥陀如来を祀る浄土系の寺院が存在した可能性がある。

溝033（図15、図版8－1）

D1～D2で検出した。検出時の規模は、東西長約1.1m、南北長約2.1m、深さ約0.3mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は上層が黒褐色シルトで木片を多量に含み、下層がオリーブ黒色砂質シルトで小石を含む。第2面の溝028の直下に位置する。遺物は13世紀前半～半ばの所産と考えられる土師器皿・瓦器椀・山茶椀が出土した。瓦器椀は上層より伏せた形で完形の状態で出土している。瓦器椀は楠葉型Ⅲ－2型式、山茶椀は渥美系と考えられる。

溝037

C1～C3で検出した。検出時の規模は、東西長約0.2m、南北長約6.4m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。溝044の東側を切っている。埋土は黒褐色シルトで小石を少量含む。遺物の出土は無かった。-

溝043（図15）

C1～C2で検出した。検出時の規模は、東西長約0.7m、南北長約3.6m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は上層が黒褐色シルトで小石を含み、下層が暗灰黄色砂質シルトで小石を含む。遺物は土師器皿が出土した。6Bに属し、13世紀前半頃の所産と考えられる。

溝044

C1～C3・D1～D3で検出した。検出時の規模は、東西長約0.8m、南北長約6.0m、深さ0.15mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。西側を溝037によって切られている。埋土は上層が灰黄褐色シルトで小石を含み、下層が暗灰黄色シルトで小石を含む。遺物は土師器皿が出土した。6Bに属し、13世紀前半頃の所産と考えられる。

溝046

D1～E1・D2～E2で検出した。検出時の規模は、東西長約4.3m、南北長約0.4m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。遺物の出土は無かった。

溝047

D 2～E 2で検出した。検出時の規模は、東西長約3.9m、南北長約0.5m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は黄灰色シルトで小石を含む。遺物は13世紀頃の所産と考えられる瓦器、9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・灰釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝049

E 1～G 1で検出した。検出時の規模は、東西長約6.6m、南北長約0.5m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。遺物の出土は無かった。

溝051

E 2～G 2・E 3～G 3で検出した。検出時の規模は、東西長約6.7m、南北長約0.3m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は上層が灰褐色シルトで小石を含み、下層が黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝052

D 3～G 3で検出した。検出時の規模は、東西長約9.4m、南北長約0.4m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は褐灰シルトで小石を含む。遺物は13世紀頃の所産と考えられる瓦器が出土した。

溝053

C 3～G 3で検出した。検出時の規模は、東西長約10.2m、南北長約0.8m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

〔柱穴〕

柱穴035

B 1で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ約0.3mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。柱材が残存する。遺物の出土は無かった。

柱穴042

C 1で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.2m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている。埋土は褐灰色シルトである。遺物の出土は無かった。

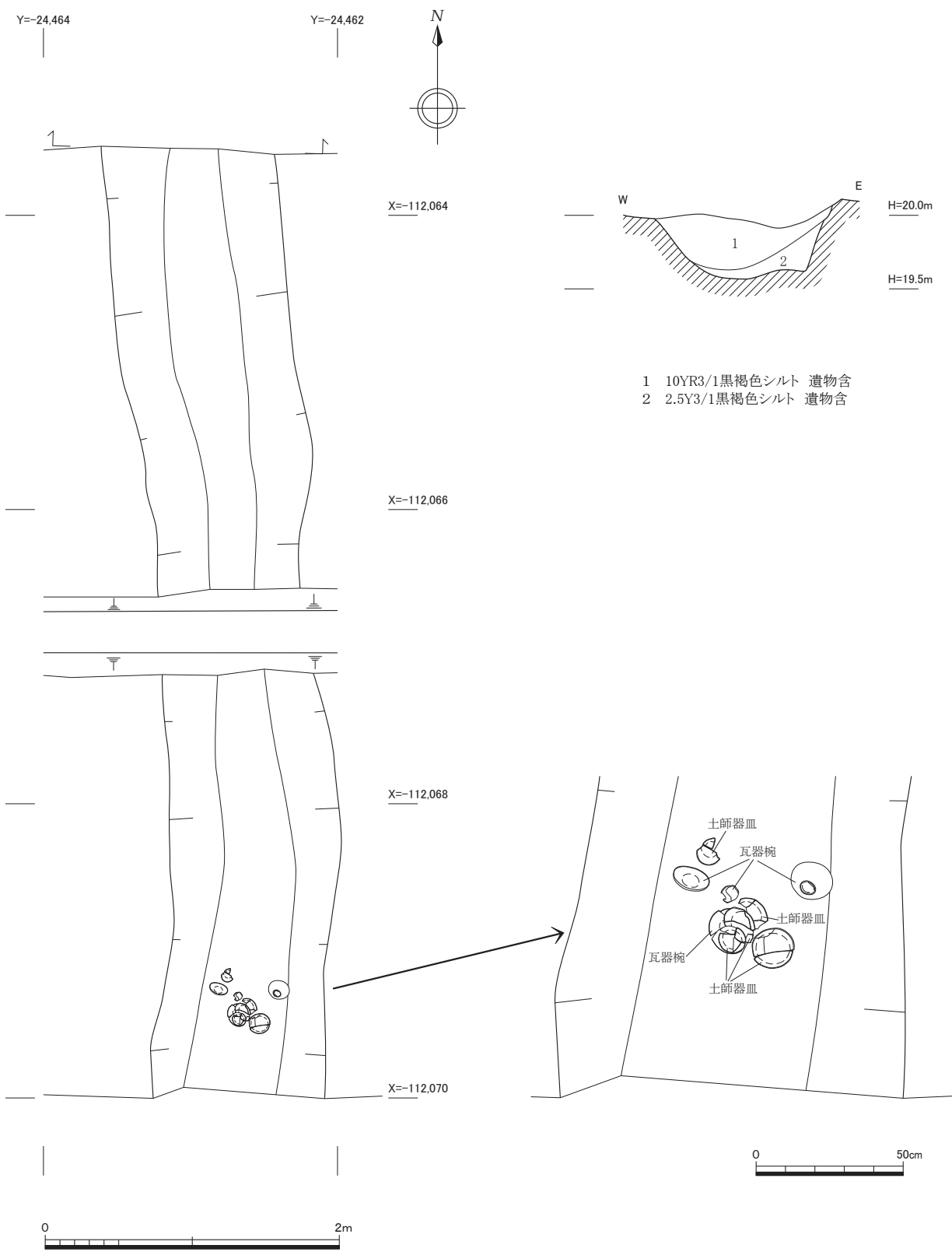


図 14 1区溝 032 平面・断面図 (1 : 40)、遺物出土状況図 (1 : 20)

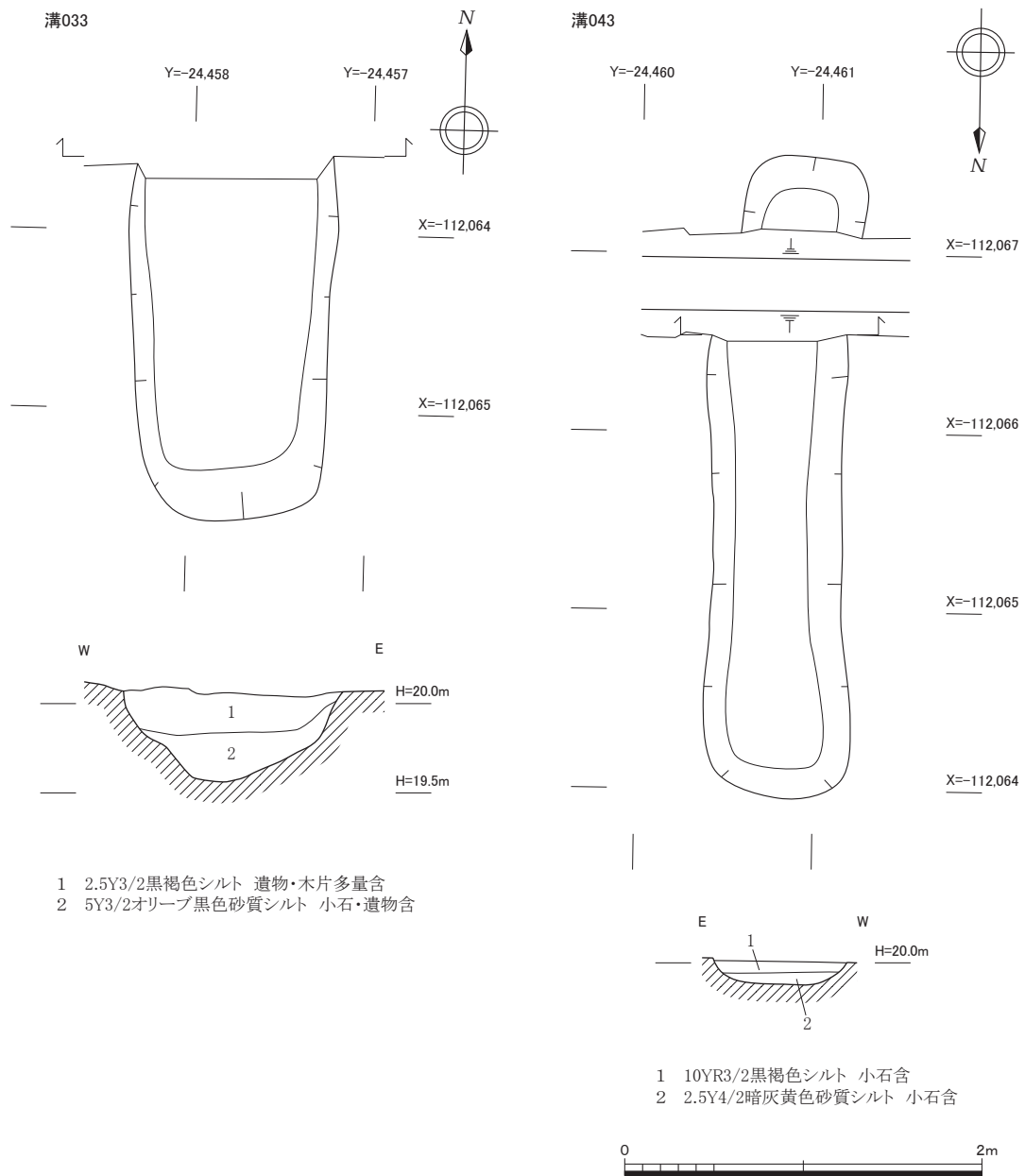


図15 1区溝033・043平面・断面図(1:40)

柱穴055

E1で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ約0.6mで底面は丸みを帯びている。埋土は上層が黒褐色シルト、中層がオリーブ黒色シルト、下層がオリーブ黒色砂質シルトである。柱材が残存する。遺物の出土は無かった。

柱穴058

D3で検出した。検出時の規模は、東西長0.45m、南北長0.45m、深さ0.32mで底面は丸みを帯びている。平面形は方形である。埋土は褐灰色粘質シルトである。柱材が残存する。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴059

F 3で検出した。検出時の規模は、東西長0.45m、南北長約0.4m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。溝052を切っている。埋土は黄灰色シルトである。径約0.3mの石を中心に据えている。遺物の出土は無かった。

柱穴060

G 3で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.3m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている。溝052を切っている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

〔杭〕

東西方向に並ぶ杭を7本検出した。

杭144

D 1で検出した。杭の長さは0.60mで、遺構面から0.40m埋没する。掘方の埋土は黒褐色粘質シルトで小石を含む。

杭145

D 1で検出した。杭の長さは0.50mで、遺構面から0.30m埋没する。掘方の埋土は黄灰色シルトで炭化物を含む。

杭146

E 1で検出した。杭の長さは0.50mで、遺構面から0.30m埋没する。掘方の埋土は黒褐色シルトで炭化物を含む。

杭147

E 1で検出した。杭の長さは0.60mで、遺構面から0.36m埋没する。掘方の埋土は黄灰色シルトである。

杭148（図版8－2）

F 1で検出した。杭の長さは0.50mで、遺構面から0.46m埋没する。掘方の埋土は黒褐色シルトである。

杭149（図版8－2）

F 1で検出した。杭の長さは0.50mで、遺構面から0.38m埋没する。掘方の埋土は黒褐色シルトである。

杭150

G1で検出した。杭の長さは0.55mで、遺構面から0.40m埋没する。掘方は確認できなかった。掘削せず直接打ち込んでいる可能性がある。

杭列は溝046と溝049の間を通り、溝に沿うように打ち込まれているが、杭列の性格は不明である。

(V) 下層 (図6・7)

第4面の全景写真撮影、遺構測量後に調査区の北側と西側を断割り、下層の確認を行った。第4面の第7層の下層からは黒褐色シルト層の第8層を検出し、さらにその下層からは砂礫層を検出した。旧河川等による自然堆積層と考えられる。遺物の出土は無かった。

(2) 2区

(I) 第1面

2区の第1面は調査区の大部分が建物の基礎の撤去等で損なわれており、遺構の確認はできなかった。

(II) 第2面 (図16、図版9-1・2)

第2面は第5層による整地後、室町時代前期～中期(14世紀～15世紀)に属すると想定される。東西方向と南北方向の耕作溝を8条検出した。

[溝]

溝061

Z5～A5で検出した。検出時の規模は、東西長約2.8m、南北長約0.2m、深さ0.25mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝062

Z5～A5で検出した。検出時の規模は、東西長約4.1m、南北長約0.4m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝063

Z4～Z5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約3.6m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・灰釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

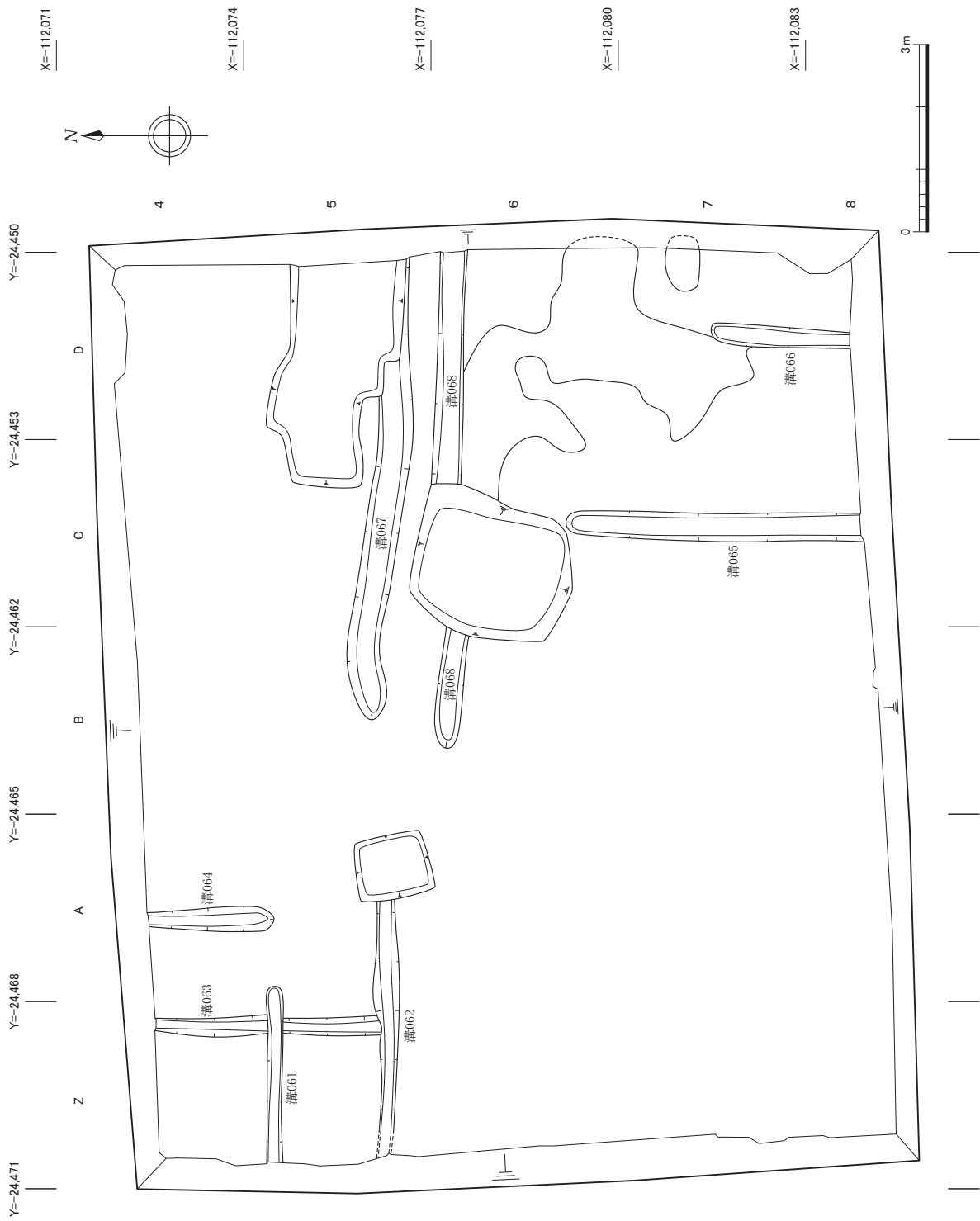


图 16 2 区第 2 面平面图 (1 : 100)

溝064

A 4～A 5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約2.0m、深さ0.06mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。遺物は13世紀頃の所産と考えられる瓦器、9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝065

C 6～C 8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約4.8m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。遺物は13世紀頃の所産と考えられる瓦質土器、9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝066

D 7～D 8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約2.2m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝067

B 5～D 5で検出した。検出時の規模は、東西長約8.0m、南北長約0.5m、深さ0.06mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。遺物は13世紀頃の所産と考えられる瓦器、9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝068

B 6～D 6で検出した。検出時の規模は、東西長約8.0m、南北長約0.4m、深さ0.08mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。遺物は13世紀頃の所産と考えられる瓦器、9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

(Ⅲ) 第3面 (図17、図版10-1・2)

第3面は第6層による整地後、南北朝時代(14世紀)に属すると想定される。区画溝・礎石建物・土坑を検出した。

〔土坑〕

土坑074 (図18、図版11-1、13-2)

D 5で検出した。検出時の規模は、東西長約1.0m、南北長1.75m、深さ0.18mで底面は丸みを帯びている長方形の土坑である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。土坑内より板材が重なり合

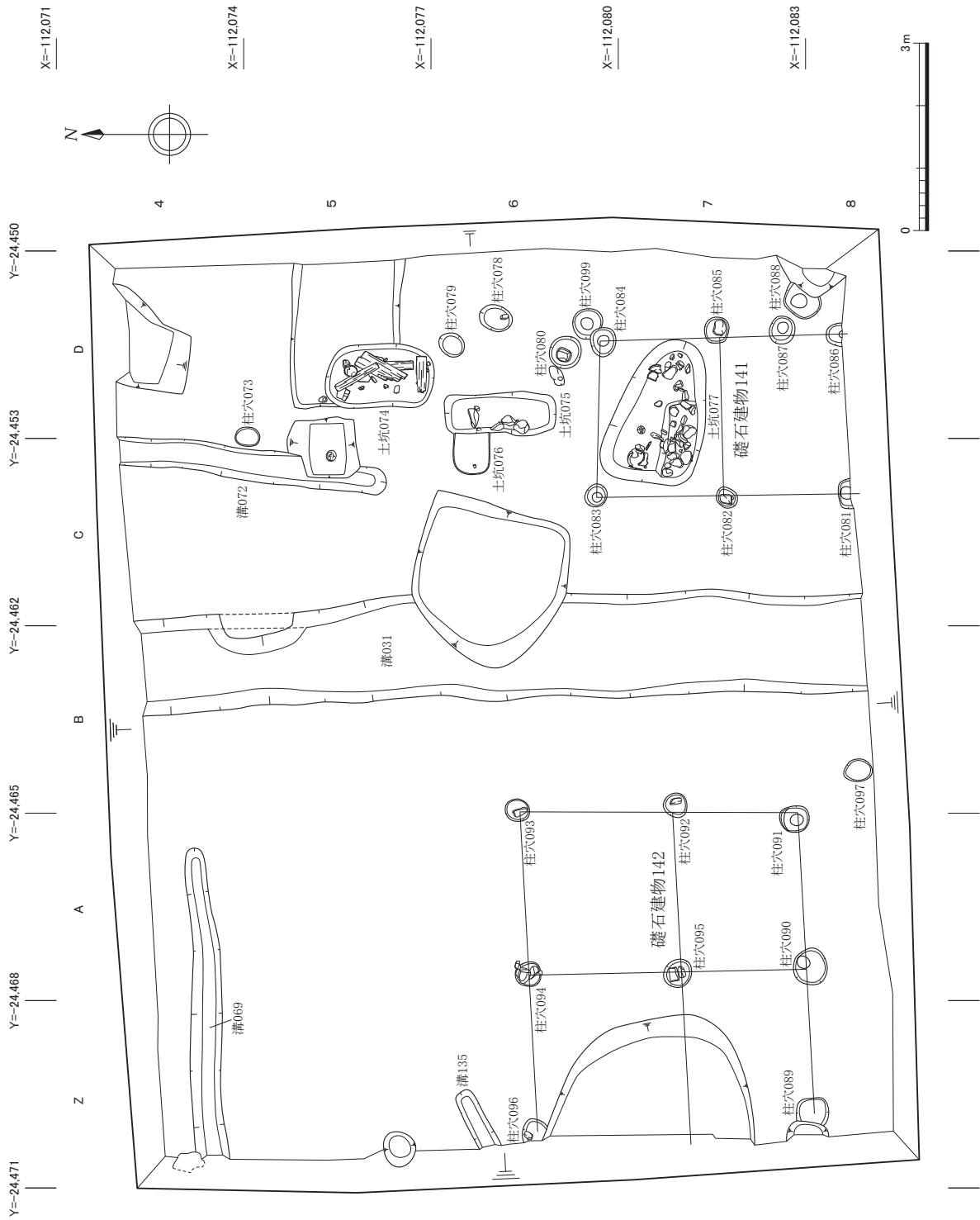
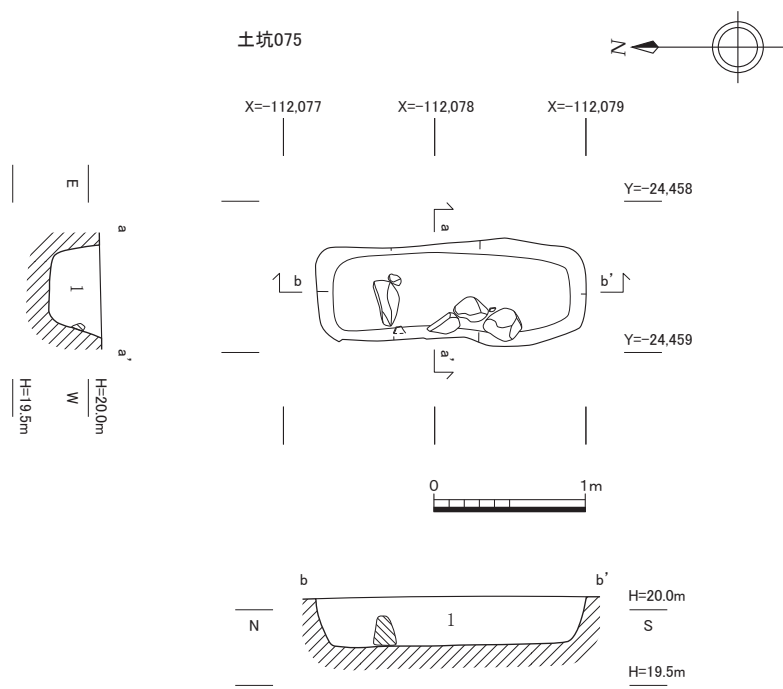
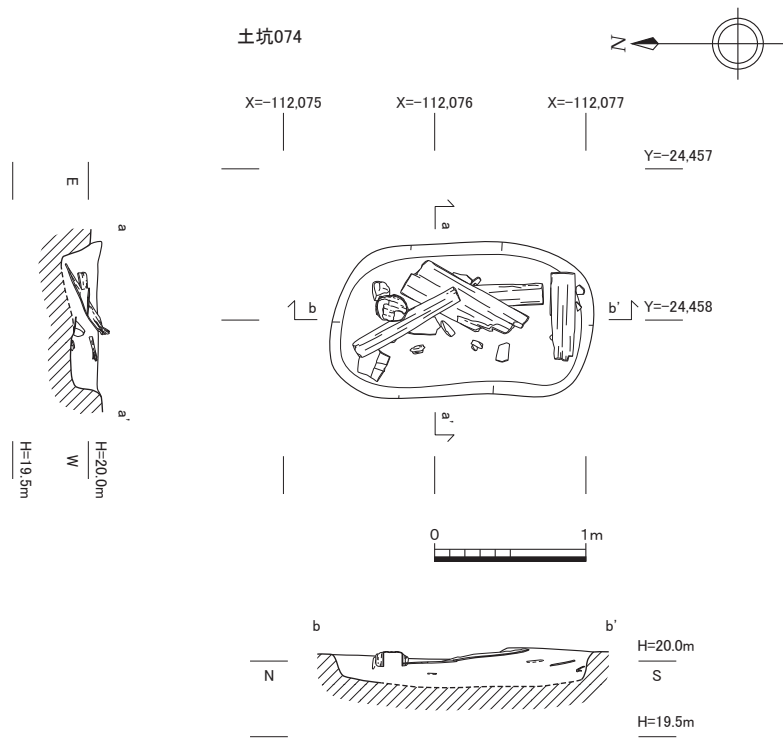


图 17 2 区第 3 面平面图 (1 : 100)



1 10YR3/1黑褐色粘質土 小石含

图 18 2区土坑 074 平面·立面图 (1:50)、土坑 075 平面·断面图 (1:50)

うように出土した。また土坑の南側より伏せた状態の木桶も出土した。遺物は14世紀頃の所産と考えられる常滑焼の壺あるいは甕の体部が出土した。土坑内の埋没状況や形状から土坑墓と考えられ、板材は木棺の部材で、木桶は副葬品とみられる。常滑焼の壺もしくは甕の体部は、板材の下から出土していることから、木棺の傾きを調整するために敷かれたものと想定される。土坑の長軸は南北方向を向いており、南北溝の溝031と方向を合わせている可能性がある。

土坑075 (図18、図版11-1)

D6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.6m、南北長約1.8m、深さ約0.4mで底面は丸みを帯びている長方形の土坑である。埋土は黄灰色粘質土と黒褐色粘質土との混じりである。径約0.3~0.4mの礫を4個、土坑内より検出した。遺物は13世紀頃の所産と考えられる瓦器、9~11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。土坑074と同じく長軸を南北方向に向けており、土坑墓と考えられる。

土坑076

C6~D6で検出した。検出時の規模は東西長0.65m、南北長約0.6m、深さ約0.4mで底面は丸みを帯びている。土坑075に東半分を切られている。埋土は黒褐色粘質土で小石を含む。遺物は9~11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

土坑077 (図19、図版11-1、12-1・2、13-1)

C6~D6・C7~D7で検出した。検出時の規模は、東西長約2.3m、南北長約1.6m、深さ約0.4mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで小石、木片を含む。土坑の上層の多くは後世に掘り返されているが、南側の一部は径約0.1~0.2mの礫が詰め込まれており、本来は礫で埋められていたか覆われていたものが陥没により土坑内に落ち込んだものと想定される。遺物は下層から14世紀頃の所産と考えられる土師器皿・漆器皿・瓦質土器鍋・焼締陶器甕が出土した。土師器皿は完形が多く、漆器皿も2/3以上が残された状態で出土していることから、土坑墓の副葬品として埋納されたものと思われる。また、瓦質土器鍋は土坑の東端から、焼締陶器甕は西端から出土したが、それぞれ半分以上が失われており、焼締陶器甕は表面や断面に風化が見られる。このことから、副葬品として埋納したものではなく、廃棄されていた物を棺台として再利用したものと考えられる。土坑の南辺は東西方向であるが、北辺は約18度の傾きがある。

[溝]

溝031

B4~B8・C4~C8で検出した。検出時の規模は、東西長約1.6m、南北長約11.5m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。1区第3面で検出した溝031の続きである。1区では直上にて溝012を検出したが、2区では削平のため検出できなかった。埋土は黒褐色

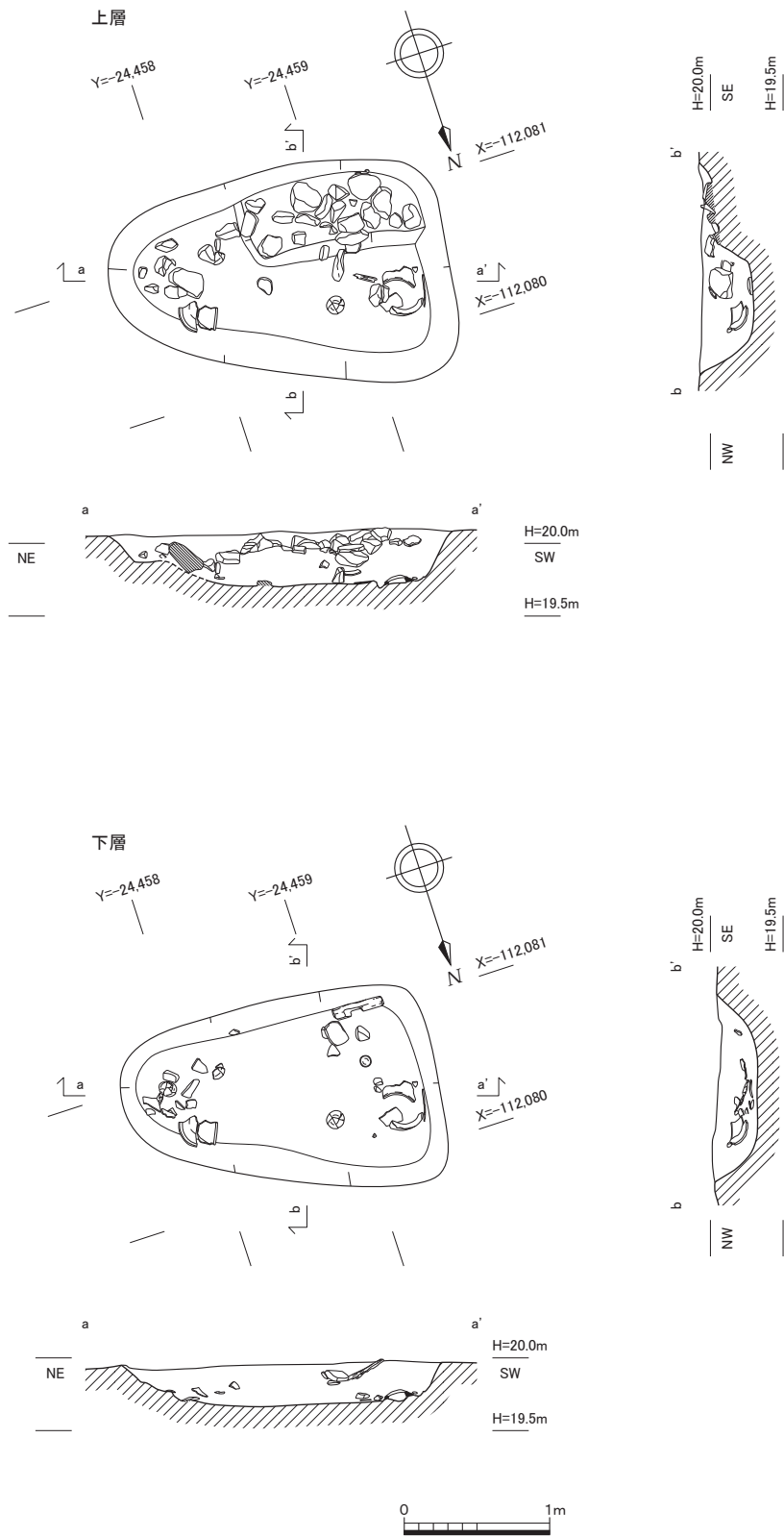


图 19 2区土坑 077 平面·立面图 (1 : 50)

シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器・瓦質土器、13世紀後半頃の所産と考えられる山茶碗が出土した。埋め立ての際に用いられた土への混入とみられる。

溝069

Z4～A4で検出した。検出時の規模は、東西長約5.0m、南北長約0.5m、深さ0.15mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物の出土は無かった。

溝072

C4～C5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5m、南北長約4.3m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器・瓦質土器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

溝135

Z6で検出した。検出時の規模は、東西長約1.0m、南北長約0.3m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている南東方向に約30度傾く溝である。埋土は黒色粘質シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀の所産と考えられる瓦質土器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

〔礎石建物〕

礎石建物141（図20、図版11－1）

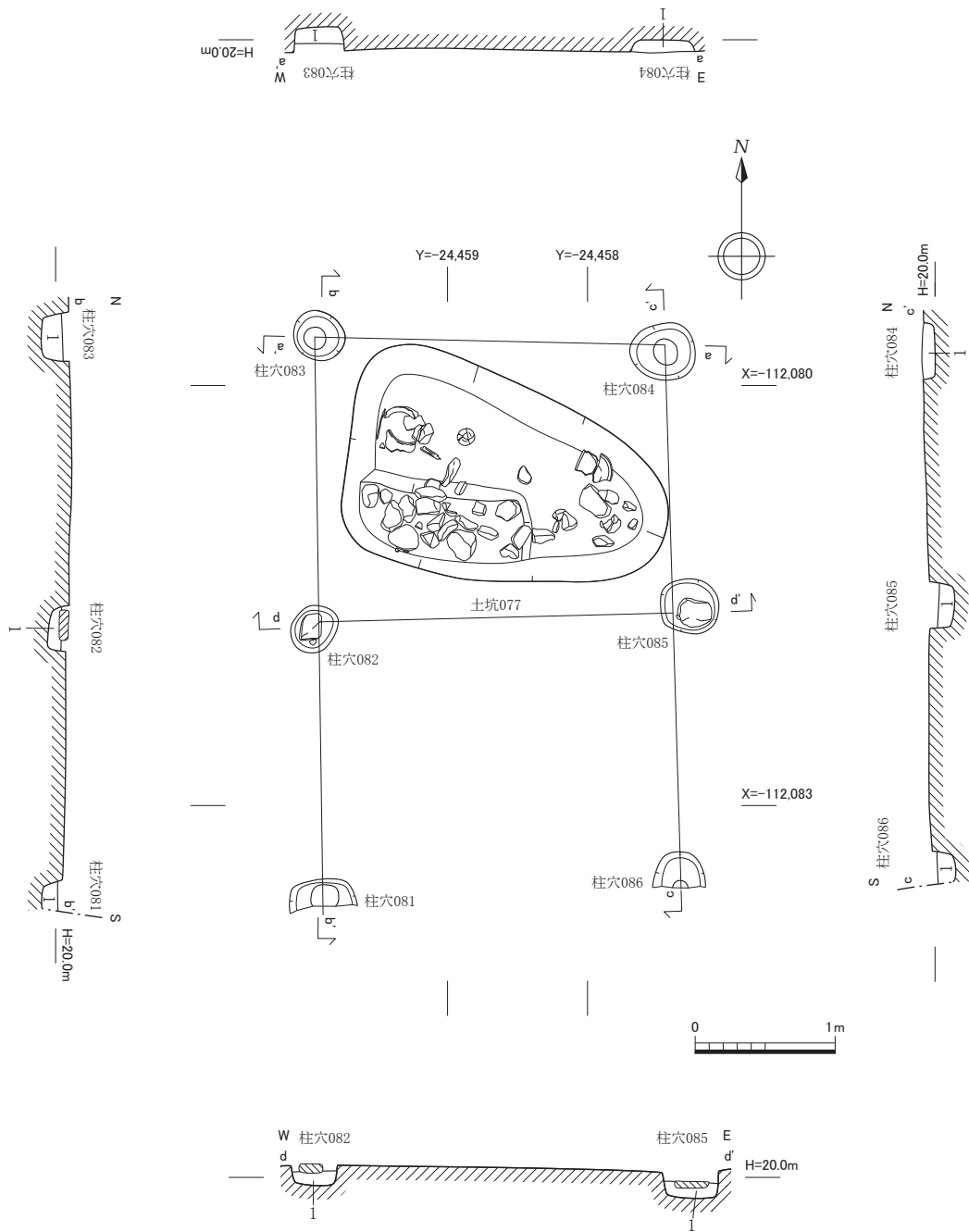
柱穴081～086からなる東西1間、南北2間の総柱の建物として検出した。東西の柱間は約2.5m（約8尺）、南北の柱間は約2.1m（約7尺）である。礎石建物141は、北側1間分のスペースに土坑077が収まり、柱間も土坑077に合わせるかのように東西の柱間が南北の柱間より1尺ほど長い。土坑077を土坑墓と推測した場合、土坑077を保護するために建てられた墓堂の可能性が考えられる。

柱穴081（図20）

C8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5m、南北長約0.2m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。南半分は調査区外である。埋土は黒褐色シルトである。礎石は抜き取られたのか検出されなかった。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴082（図20）

C7で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長0.35m、深さ0.16mで底面は丸みを



柱穴081 1 2.5Y3/1黒褐色シルト	柱穴082 1 10YR3/1黒褐色シルト	柱穴083 1 10YR3/1黒褐色シルト 遺物含
柱穴084 1 2.5Y6/1黄灰色シルト	柱穴085 1 2.5Y3/1黒褐色シルト 遺物含	柱穴086 1 10YR3/2黒褐色シルト 小石含

図 20 2区礎石建物 141 平面・断面図 (1 : 50)

帯びている。埋土は黒褐色シルトである。埋土上に径約0.2mの礎石を据えている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀の所産と考えられる瓦器片が出土した。整地層からの混入とみられる。また、14世紀頃の所産と考えられる土師器が出土した。

柱穴083 (図20)

C6で検出した。検出時の規模は、東西長0.35m、南北長0.35m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。礎石は抜き取られたのか検出されなかった。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器、13世紀の所産と考えられる瓦器片が出土した。整地層からの混入とみられる。また、14世紀頃の所産と考えられる土師器が出土した。

柱穴084 (図20)

D6で検出した。検出時の規模は、東西長0.45m、南北長約0.4m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。礎石は抜き取られたのか検出されなかった。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴085 (図20)

D7で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。底面に径0.25mの礎石が据えられている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる須恵器・緑釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴086 (図20)

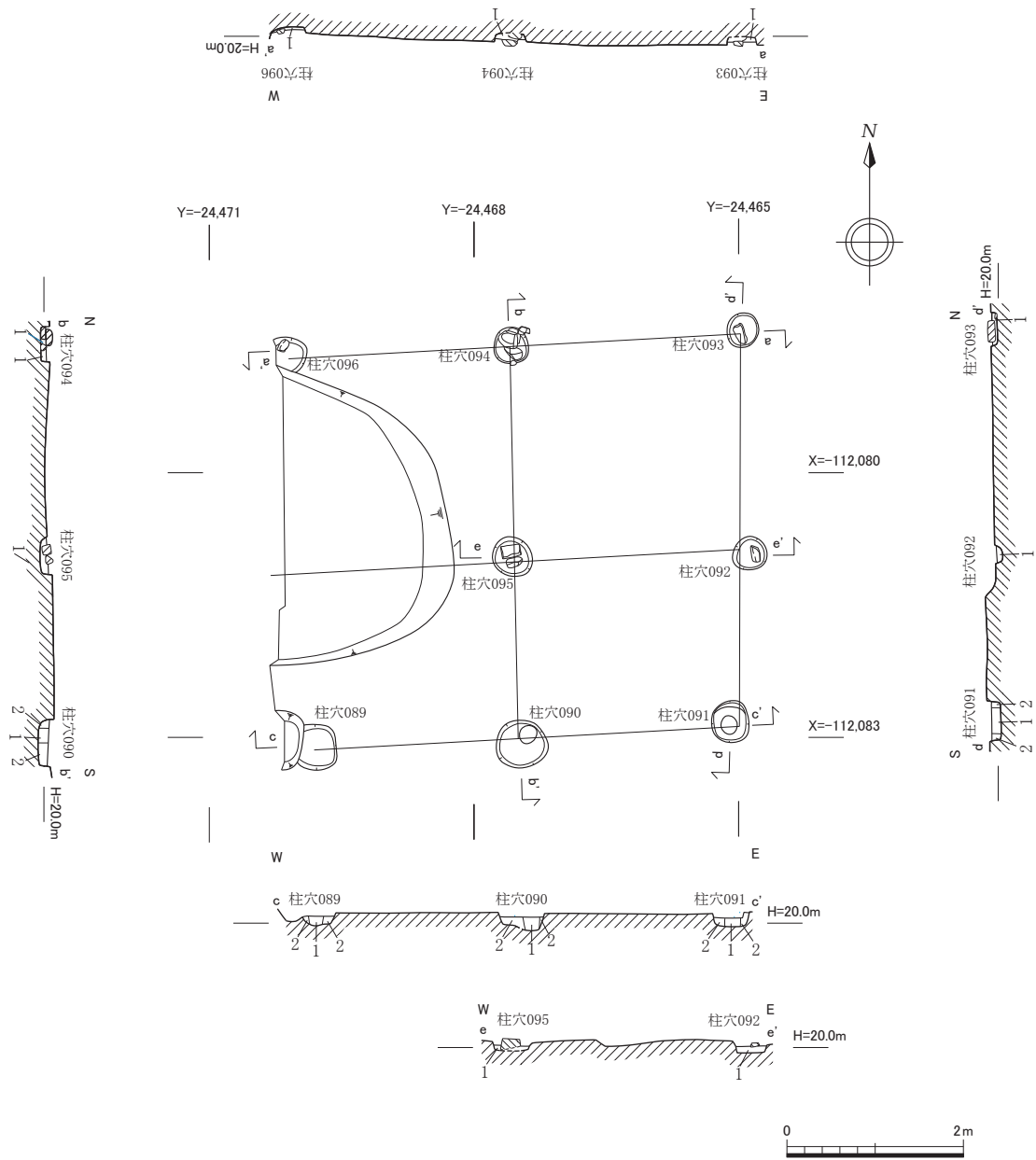
D8で検出した。検出時の規模は、東西長0.35m、南北長0.25m、深さ0.16mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。礎石は抜き取られたのか検出されなかった。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

礎石建物142 (図21、図版11-2)

柱穴089～096からなる東西2間、南北2間の総柱の建物として検出した。礎石建物140と同じく、西に約3度傾いている。東西の柱間は約2.7m(約9尺)、南北の柱間は約2.4m(約8尺)である。

柱穴089 (図21)

Z7～Z8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.5m、深さ0.16mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。礎石は抜き取られたのか検出されなかった。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦質土器片が出土した。整地層からの混入とみられる。



柱穴089
 1 2.5Y4/1黄灰色シルト
 2 10YR4/1褐色シルト

柱穴092
 1 2.5Y3/1黒褐色シルト 礫・遺物含

柱穴095
 1 10YR3/1黒褐色シルト 小石含

柱穴090
 1 10YR2/1黒色粘質土
 2 10YR3/1黒褐色粘質土 小石含

柱穴093
 1 2.5Y3/1黒褐色シルト 遺物含

柱穴096
 1 10YR4/1褐色シルト 遺物含

柱穴091
 1 10YR3/1黒褐色粘質土 礫含
 2 2.5Y4/1黄灰色シルト 礫含

柱穴094
 1 10YR3/1黒褐色シルト 小石含

図 21 2区礎石建物 142 平面・断面図 (1 : 80)

柱穴090 (図21)

A7～A8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.6m、南北長約0.6m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。礎石は抜き取られたのか検出されなかった。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴091 (図21)

A7～B7で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.5m、深さ0.16mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで礫を含む。礎石は抜き取られたのか検出されなかった。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴092 (図21)

A7～B7で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ0.16mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで礫を含む。径約0.2mの礎石が据えられている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴093 (図21)

A6～B6で検出した。検出時の規模は、東西長0.35m、南北長約0.4m、深さ0.14mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。埋土上に径約0.2mの礎石が据えられている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴094 (図21)

A6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。底面に径0.16mの礎石を据えた後、さらに埋土上に径0.16mの礎石を据えている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴095 (図21)

A7で検出した。検出時の規模は、東西長0.45m、南北長0.45m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。底面に径約0.2mの礎石を据え、さらに埋土上に径約0.2mの礎石を据えている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴096 (図21)

Z6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。埋土は褐灰色シルトである。底面に約0.1mの礎石を据えている。遺物の出土は無かった。

[柱穴]

その他、並びが確認できなかった単独の柱穴である。

柱穴073

C4～C5・D4～D5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.4m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている。埋土は柱痕が黒褐色シルトで掘方が褐灰色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴078

D6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.5m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴079

D6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。埋土は褐灰色シルトで小石、炭化物を含む。遺物の出土は無かった。

柱穴080

D6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5m、南北長約0.5m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。埋土上に径約0.2mの礎石を据えている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴088

D8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.6m、南北長約0.6m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている。埋土は柱痕が黒褐色シルトで礫を含み、掘方が灰黄褐色シルトで礫を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴097

B8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.5m、深さ0.05mで底面は丸みを

帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物の出土は無かった。

柱穴099

D 6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5m、南北長約0.5m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている。柱穴089に切られている。埋土は柱痕が黒褐色シルトで掘方が黄灰色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

(Ⅳ) 第4面 (図22、図版14-1・2)

第4面は平安時代末期～鎌倉時代(12世紀末～13世紀)に属すると想定される。区画溝・耕作溝・土坑・柱穴を検出した。

[土坑]

土坑103

B 5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長0.25m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。土坑104に切られている。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物の出土は無かった。

土坑104

B 5～B 6で検出した。検出時の規模は、東西長約3.0m、南北長約0.3m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている不定形な土坑である。溝032を切っている。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる土師器・瓦器・瓦質土器・輸入白磁片が出土した。

土坑106

Z 6～Z 7・A 6～A 7で検出した。検出時の規模は、東西長約1.5m、南北長0.75m、深さ0.16mで底面は丸みを帯びている長方形の土坑である。土坑120を切っている。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器、13世紀頃の所産と考えられる土師器・瓦器・瓦質土器片が出土した。

土坑108

B 7で検出した。検出時の規模は、東西長約1.1m、南北長約1.0m、深さ0.06mで底面は丸みを帯びているやや方形の土坑である。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる土師器・瓦器片が出土した。

土坑109

Z 7～Z 8・A 7～A 8で検出した。検出時の規模は、東西長約1.0m、南北長約1.3m、深さ

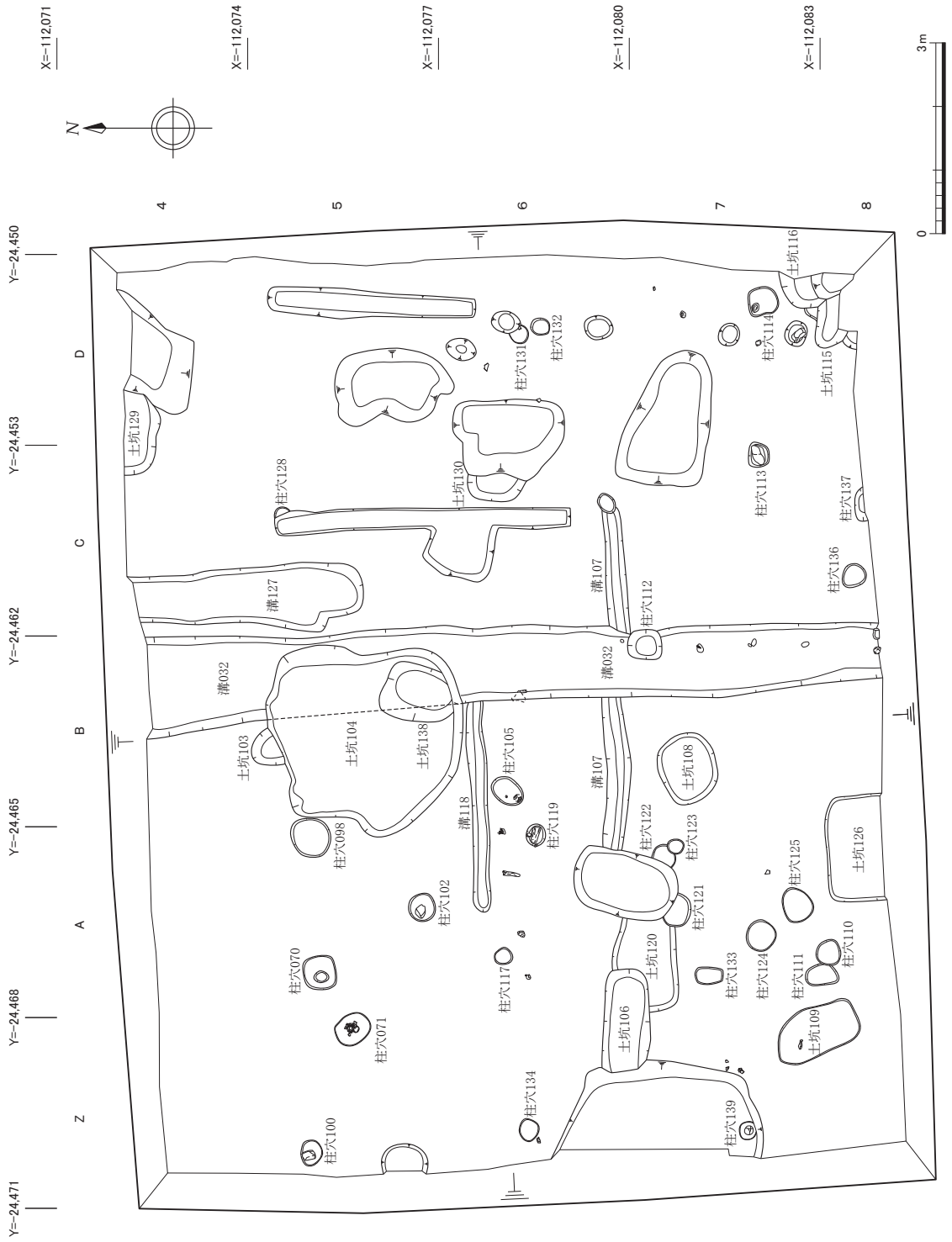


图 22 2区第4面平面图 (1 : 100)

0.08 mで底面は丸みを帯びている不定形な土坑である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる土師器・瓦器・輸入白磁片が出土した。

土坑115

D7～D8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.6 m、南北長約0.5 m、深さ約0.3 mで底面は丸みを帯びている不定形な土坑である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物の出土は無かった。

土坑116

D7で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5 m、南北長約0.6 m、深さ0.25 mで底面は丸みを帯びている不定形な土坑である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

土坑120

A6～A7で検出した。検出時の規模は、東西長約1.4 m、南北長約1.0 m、深さ約0.1 mで底面は丸みを帯びている長方形の土坑である。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・灰釉陶器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器片が出土した。

土坑126

A8～B8で検出した。検出時の規模は、東西長約1.7 m、南北長約0.9 m、深さ約0.2 mで底面は丸みを帯びている長方形の土坑である。南端は調査区外である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器、13世紀頃の所産と考えられる土師器・輸入白磁片が出土した。

土坑129

C4～D4で検出した。検出時の規模は、東西長約1.3 m、南北長約0.6 m、深さ約0.1 mで底面は丸みを帯びている不定形な土坑である。北端は調査区外である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・灰釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

土坑130

C6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4 m、南北長約0.9 m、深さ約0.1 mで底面は丸みを帯びている不定形な土坑である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・灰釉陶器、13世紀頃の所産と考えられる輸入白磁片が出土した。

土坑138

B5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.8m、南北長約1.2m、深さ約0.5mで底面は丸みを帯びている楕円形の土坑である。土坑104の底面より検出し、土坑104の構築時に埋められたものと思われる。また、溝032とも重なり合っているが、土坑104により前後関係は不明である。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器・瓦質土器・輸入白磁片が出土した。

〔溝〕

溝032 (図23、図版15-2)

B4～B8・C4～C8で検出した。検出時の規模は、東西長約1.2m、南北長約11.6m、深さ約0.2mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。1区第4面で検出した溝032の続きである。第3面で検出した溝031の直下に位置する。土坑104に切られている。埋土は黒色粘質シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器・瓦質土器・焼締陶器・輸入白磁片が出土した。

溝107

A6～C6で検出した。検出時の規模は、東西長約5.4m、南北長約0.4m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。溝032に切られている。埋土は黄灰色粘質土で小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器片が出土した。

溝118

A6～B6で検出した。検出時の規模は、東西長約3.3m、南北長約0.3m、深さ0.06mで底面は丸みを帯びている東西方向の溝である。溝032に切られている。埋土は黄灰色粘質土で小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる土師器・瓦器・輸入白磁片が出土した。

溝127 (図23)

C4～C5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.8m、南北長約3.7m、深さ0.12mで底面は丸みを帯びている南北方向の溝である。埋土は褐灰色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器片が出土した。

〔柱穴〕

柱穴070

A5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5m、南北長約0.5m、深さ0.16mで底面は丸みを

帯びているやや方形の柱穴である。埋土は柱痕が黒褐色シルトで小石を含み、掘方が褐灰色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器片が出土した。

柱穴071（図23、図版15－1）

Z5～A5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5m、南北長約0.6m、深さ0.15mで底面は丸みを帯びている。埋土は柱痕が褐灰色シルトで掘方が黄灰色シルトで礫を含む。遺物は12世紀末頃の所産と考えられる土師器皿が柱痕上よりまとまって出土した。建物の廃絶にあたり祭祀として埋納された可能性がある。

柱穴098

A5～B5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.6m、南北長0.65m、深さ0.15mで底面は丸みを帯びている。埋土は褐灰色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる輸入白磁片が出土した。

柱穴100

Z5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長0.35m、深さ0.02mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。底面に径約0.1mの礎石を据えている。遺物の出土は無かった。

柱穴102

A5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.2m、南北長約0.2m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている。埋土は褐灰色シルトである。底面に径約0.1mの礎石を据えている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器・緑釉陶器、13世紀頃の所産と考えられる瓦質土器片が出土した。

柱穴105

B6で検出した。検出時の規模は、東西長0.45m、南北長約0.5m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入と思われる。

柱穴110

A8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている。柱穴111を切っている。埋土は褐灰色シルトである。遺物は13世紀頃の所産と考えられる土師器片が出土した。

柱穴111

A7～A8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.5m、深さ0.02mで底面は丸みを帯びている。柱穴110に切られている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は13世紀頃の所産と考えられる東播系須恵器鉢片が出土した。

柱穴112

B7～C7で検出した。検出時の規模は、東西長0.45m、南北長0.55m、深さ0.15mで底面は丸みを帯びているやや方形の柱穴である。溝032を切っている。埋土は黒色シルトである。遺物の出土は無かった。

柱穴113

C7で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.3m、深さ0.02mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。底面に径約0.3mの礎石を据えている。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴114

D7で検出した。検出時の規模は、東西長0.45m、南北長約0.5m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器片が出土した。

柱穴117

A6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.3m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴119

A6～B6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.3m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。埋土上に径約0.2mの板が据えられており、礎板として用いられた可能性がある。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・灰釉陶器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴121

A7で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5m、南北長0.45m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴122

A7で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている。柱穴123に切られている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴123

A7で検出した。検出時の規模は、東西長0.25m、南北長0.25m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている。柱穴122を切っている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴124

A7で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5m、南北長約0.5m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器片が出土した。

柱穴125

A7で検出した。検出時の規模は、東西長0.55m、南北長約0.5m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトで小石を含む。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴128

C5で検出した。検出時の規模は、東西長約0.2m、南北長0.25m、深さ0.05mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物の出土は無かった。

柱穴131

D6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.3m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物の出土は無かった。

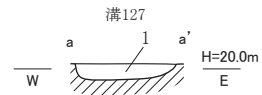
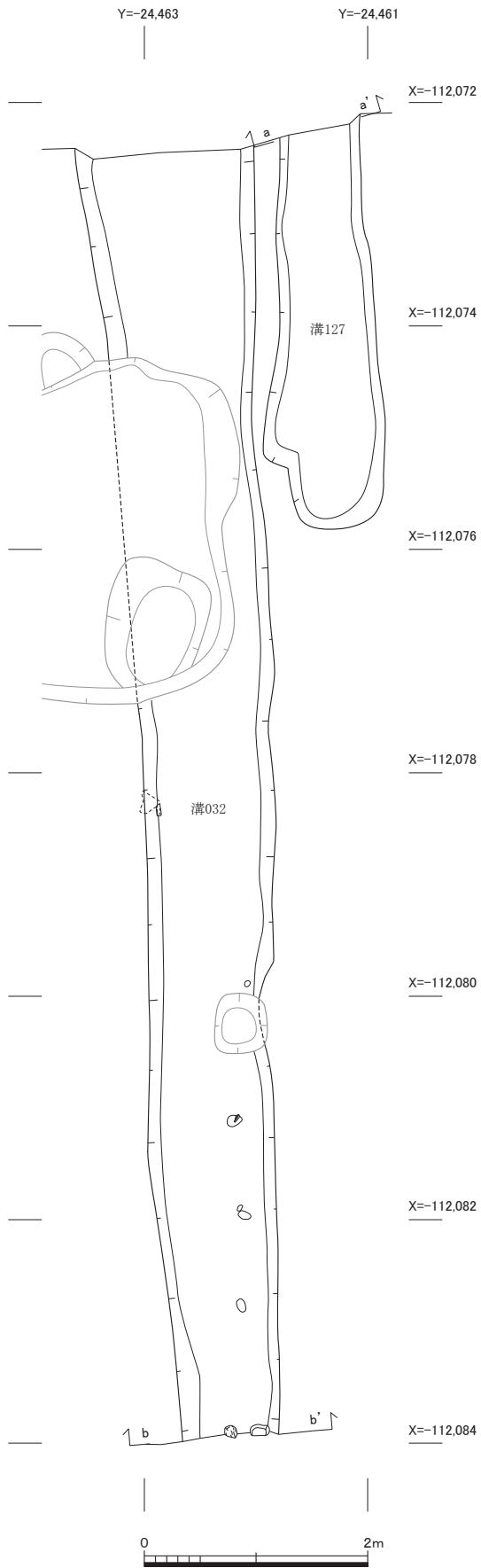
柱穴132

D6で検出した。検出時の規模は、東西長0.25m、南北長約0.3m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器片が出土した。

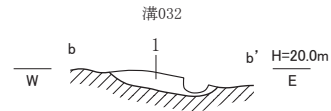
柱穴133

A7で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長0.45m、深さ0.05mで底面は丸みを

溝032・127

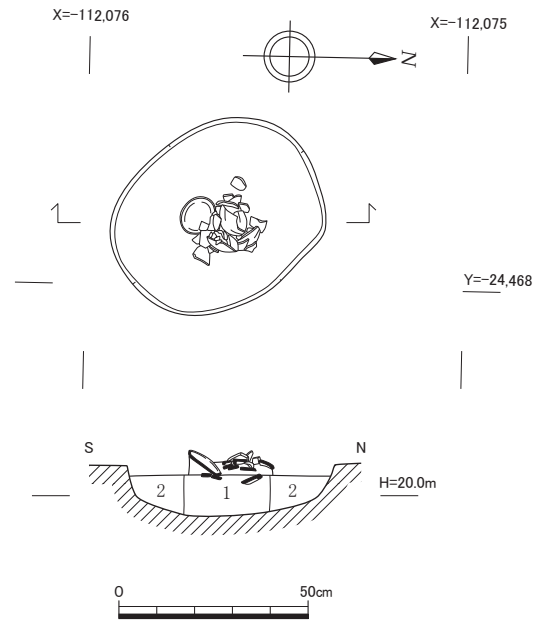


1 7.5YR4/1 褐灰色シルト 小石・遺物含



1 10YR2/1 黒色粘質シルト 小石・遺物含

柱穴071



1 10YR4/1 褐灰色シルト 遺物含
2 2.5Y4/1 黄灰色シルト 礫含

図 23 2 区溝 032・127 平面・断面図 (1 : 60)、柱穴 071 平面・断面図 (1 : 20)

帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器、13世紀頃の所産と考えられる瓦器・輸入青磁片が出土した。

柱穴134

Z6で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.3m、深さ0.04mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴136

C8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.4m、南北長約0.4m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は9～11世紀頃の所産と考えられる土師器・須恵器片が出土した。整地層からの混入とみられる。

柱穴137

C8で検出した。検出時の規模は、東西長約0.5m、南北長0.15m、深さ約0.1mで底面は丸みを帯びている。南端は調査区外である。埋土は黒褐色シルトである。遺物の出土は無かった。

柱穴139

Z7で検出した。検出時の規模は、東西長約0.3m、南北長約0.3m、深さ0.03mで底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。遺物は12世紀末頃の所産と考えられる土師器皿が柱痕に伏せた状態で出土した。建物の廃絶にあたり祭祀として埋納された可能性がある。

(V) 下層 (図6・7)

第4面の全景写真撮影、遺構測量後に調査区の南側と西側を断割り、下層の確認を行った。第4面の第7層の下層からは黒色砂質シルト層の第8層を検出し、さらにその下層からは砂礫層を検出した。旧河川等による自然堆積層と考えられる。遺物の出土は無かった。

3 出土遺物

遺物はコンテナで44箱分出土した(表3)。多くが第2面整地層の第5層内、第3面整地層の第6層内からの出土で、平安時代前期の緑釉陶器・灰釉陶器、平安時代末期～鎌倉時代の土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・輸入青磁・輸入白磁・瓦が出土した。また、2区第3面からは土坑墓内に埋納されたと考えられる南北朝時代の土師器皿と漆器皿、1区第4面からは溝内に埋納された鎌倉時代の完形の土師器皿と瓦器椀、溝の埋土内から鎌倉時代の「南無阿弥陀佛」文軒丸瓦片が出土した。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク 点数	C ランク 箱数
弥生時代	石器		磨製石斧 1		
平安時代前期	緑釉陶器、灰釉陶器、瓦		緑釉陶器 1、灰釉陶器 3、軒丸瓦 1		
平安時代末期～鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、山茶椀、輸入青磁、瓦		土師器 18、須恵器 2、瓦器椀 10、瓦器皿 1、瓦質土器 1、山茶椀 3、輸入青磁 2、軒丸瓦 1		
南北朝時代	土師器、須恵器、瓦質土器、漆器、石製品、木製品		土師器 11、須恵器甕 1、瓦質土器鍋 2、常滑 1、漆器皿 1、石鍋 1、柱材 2、板材 1、		
室町時代前期～中期	石製品、焼締陶器、施釉陶器、輸入銭		水晶製製品 1、常滑壺 1、瀬戸瓶子 1、輸入銭 2		
合計		49 箱	69 点 (8 箱)	0 点	41 箱

*コンテナ箱数は、整理段階で5箱増加した。

(1) 1区

(I) 第2面遺構出土遺物

[溝]

溝008 (図24、図版17-2)

須恵器の鉢(1)が出土した。口径23.8cm、残存器高3.5cm、口縁部はやや外反し、口縁端部は直立する。内面・外面ともロクロナデを施し、口縁端部に重ね焼き痕が残る。12世紀末～13世紀前半の東播系の所産と考えられる。整地層からの混入と思われる。

溝028 (図24、図版17-2)

瀬戸産の瓶子(2)と土師器の皿N(3)が出土した。2は底径3.4cm、残存器高5.6cm、胴から脚部にかけてくびれ、底部は回転糸切痕が残る。外面に褐釉を施す。15世紀前半頃の所産と考えられる。仏具の華瓶と思われる。3は口径13.0cm、器高2.5cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。6Bに属し、13世紀前半頃の所産と考えられる。整地層からの混入と思われる。

[第2面整地層内(第5層)] (図24、図版17-1)

石製品(4)と焼締陶器壺(5)と石器(6)が出土した。4は水晶製の装飾具と思われる。残存長3.0cm、幅0.8cm、厚さ0.8cm、重量2.9g、根元は欠損している。8面の面取りを施し、先端を尖らせる。仏具の装飾と思われる。5は残存器高8.9cm、口縁端部は欠損する。内面・外面ともロクロナデを施す。14世紀後半～15世紀の常滑焼と考えられる。6は磨製石斧である。長さ11.3cm、

幅3.5cm、厚さ2.9cm、重量234gで、4面の棒状に加工し、先端は表面が大きく裏面が緩やかに傾斜し、蛤刃となる。全面に使用痕がある。弥生時代後期頃の所産と考えられる。

(Ⅱ) 第3面遺構出土遺物

〔溝〕

溝031 (図24、図版18-1)

土師器皿N(7)と瓦器椀(8)が出土した。7は口径14.5cm、器高3.3cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。6Bに属し、13世紀前半頃の所産と考えられる。8は体部の小片で、残存長2.6cm、残存幅3.5cm、内面にミガキを施す。13世紀の所産と考えられる。7・8とも整地層からの混入と思われる。

〔柱穴〕

柱穴019 (図25)

木製品の柱材(9)が出土した。残存長46.7cm、幅14.2cm、厚さ13.6cm、側面に8面の面取りを施す八角柱である。柱穴内の礎石上に据えられるように底面は平らに加工を施す。底面から10.0cmの部分に幅6.0cmの切り込みがある。上部は欠損し、建物の廃絶の際に地上面から上の柱を切断し、残された下部の柱材がそのまま整地で埋められたものと思われる。

柱穴020 (図25)

木製品の柱材(10)が出土した。残存長40.5cm、幅11.4cm、厚さ11.2cm、側面に8面の面取りを施す八角柱である。柱穴内の礎石上に据えられるように底面は平らに加工を施す。上部は欠損し、建物の廃絶の際に地上面から上の柱を切断し、残された下部の柱材がそのまま整地で埋められたものと思われる。

〔第3面整地層内(第6層)〕 (図24)

緑釉陶器皿(11)、瓦器皿(12)、石鍋(13)が出土した。11は底径5.9cm、残存器高2.0cm、高台は貼付高台で、底面は回転糸切痕が残る。内面・外面ともオリーブ黄色の緑釉を施す。9世紀頃の所産と考えられる。12は口径9.3cm、器高1.5cm、口縁部は外反し、口縁端部内面に沈線を施す。口縁部から内面にかけてヨコナデを施し、底部はオサエを施す。内面は全体に横方向のミガキを施し、外面は口縁部に横方向のミガキを施す。楠葉産で13世紀前半頃の所産と考えられる。13は体部片で、残存長5.0cm、残存幅6.1cm、重量91.0g、滑石製で外面に鏝を削り出す。外面には煤が付着する。14世紀前半頃の所産と考えられるが、断面部分を磨いて加工した痕が見られるため、破片を加工し温石として再利用したものと思われる。

(Ⅲ) 第4面遺構出土遺物

〔土坑〕

土坑045 (図24、図版19-2)

山茶椀(14)が出土した。底径7.0cm、残存器高3.8cm、高台は貼付高台で底部に回転糸切痕が残る。内面・外面ともロクロナデを施す。見込み部分に使用痕がある。尾張型第5形式に属し、12世紀末～13世紀前半頃の所産と考えられる。

〔溝〕

溝032 (図24・26、図版16-1、18-2、19-1)

土師器皿N(15～19)、瓦器椀(20～24)、軒丸瓦(25)が出土した。15は口径8.6cm、器高1.3cm、口縁部は外反する。口縁部から内面にかけてヨコナデを施し、底部はオサエを施す。底部はやや内側に凹む。口縁端部に油煙が付着する。6Cに属し、13世紀半ば～後半の所産と考えられる。16は口径9.3cm、器高1.7cm、口縁部は外反する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。6Cに属し、13世紀半ば～後半の所産と考えられる。17は口径14.0cm、残存器高3.1cm、口縁部は外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。6Aに属し、12世紀末～13世紀前半頃の所産と考えられる。18は口径14.0cm、器高3.0cm、口縁部は外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。6Aに属し、12世紀末～13世紀前半頃の所産と考えられる。19は口径13.6cm、器高3.1cm、口縁部は外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。6Bに属し、13世紀前半頃の所産と考えられる。20は口径14.6cm、残存器高5.0cm、口縁部は外反し、口縁端部内面に沈線を施す。内面は横方向の緻密なミガキを施し、外面はオサエを施す。高台は貼付高台である。楠葉型Ⅲ-1に属し、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる。21は口径14.5cm、底径4.9cm、器高4.9cm、口縁部は外反し、口縁端部内面に沈線を施す。内面は横方向の緻密なミガキ、見込みにらせん状のミガキを施し、外面はオサエを施す。高台は貼付高台である。楠葉型Ⅲ-1に属し、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる。22は口径14.8cm、底径5.1cm、器高5.2cm、口縁部はやや外反し、口縁端部内面に沈線を施す。内面は横方向の緻密なミガキ、見込みにらせん状のミガキを施し、外面はオサエの後に口縁部に粗いミガキを施す。高台は貼付高台である。楠葉型Ⅱ-3に属し、12世紀後半～末頃の所産と考えられる。23は口径14.8cm、底径5.2cm、器高5.0cm、口縁部はやや外反し口縁端部内面に沈線を施す。内面は横方向の粗いミガキ、見込みにらせん状のミガキを施し、外面はオサエの後に粗いミガキを施す。楠葉型Ⅱ-2に属し、12世紀後半頃の所産と考えられる。24は口径13.7cm、底径4.6cm、器高4.8cm、口縁部はやや外反し、口縁端部に沈線を施す。内面は横方向の緻密なミガキ、見込みにらせん状のミガキを施し、外面はオサエを施す。高台は貼付高台である。楠葉型Ⅲ-2に属し、13世紀前半頃の所産と考えられる。25は推定瓦当径15.0cm、残存瓦当厚4.1cm、瓦当面には「陀」の文字と区画の凸線、外区とを区切る圏線を施す。内面はナデを施し、外側に向かうに従いやや外反する。端部は丸瓦との接続面が剥離したと思われる欠損があ

る。この軒丸瓦の類例として、兵庫県小野市の浄土寺から出土した「南無阿弥陀仏」文の軒丸瓦があり、創建時の浄土寺の瓦を生産したとされる兵庫県神戸市の神出窯跡からも同様の瓦が出土している。浄土寺および神出窯跡出土の軒丸瓦は「南無阿弥陀仏」の6文字を一字ずつ凸線で区切っているが、溝032出土軒丸瓦も文字を区切った凸線が見られる。軒丸瓦の出土例は過去には浄土寺と神出窯跡の2ヶ所しかなく、溝032出土の軒丸瓦は浄土寺と何らかの関係があったと考えられる。ただし、「陀」の書体が異なること、外区に殊文が無いことなど異なる点もある。生産された場所は不明だが、出土した遺構および浄土寺、神出窯跡出土の軒丸瓦の類例から12世紀末～13世紀前半頃の所産と想定される。

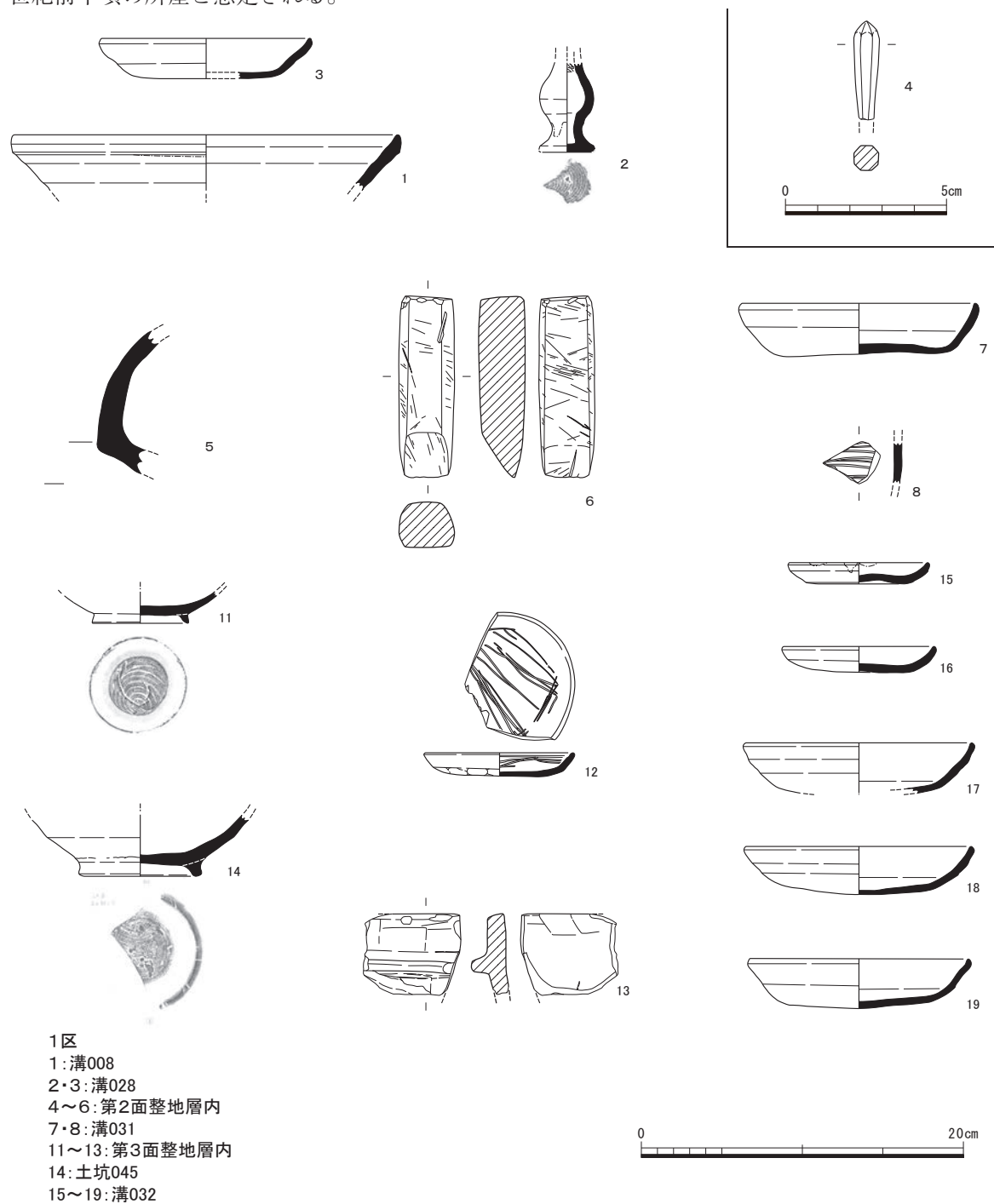


図24 出土遺物1 (1:2、1:4)

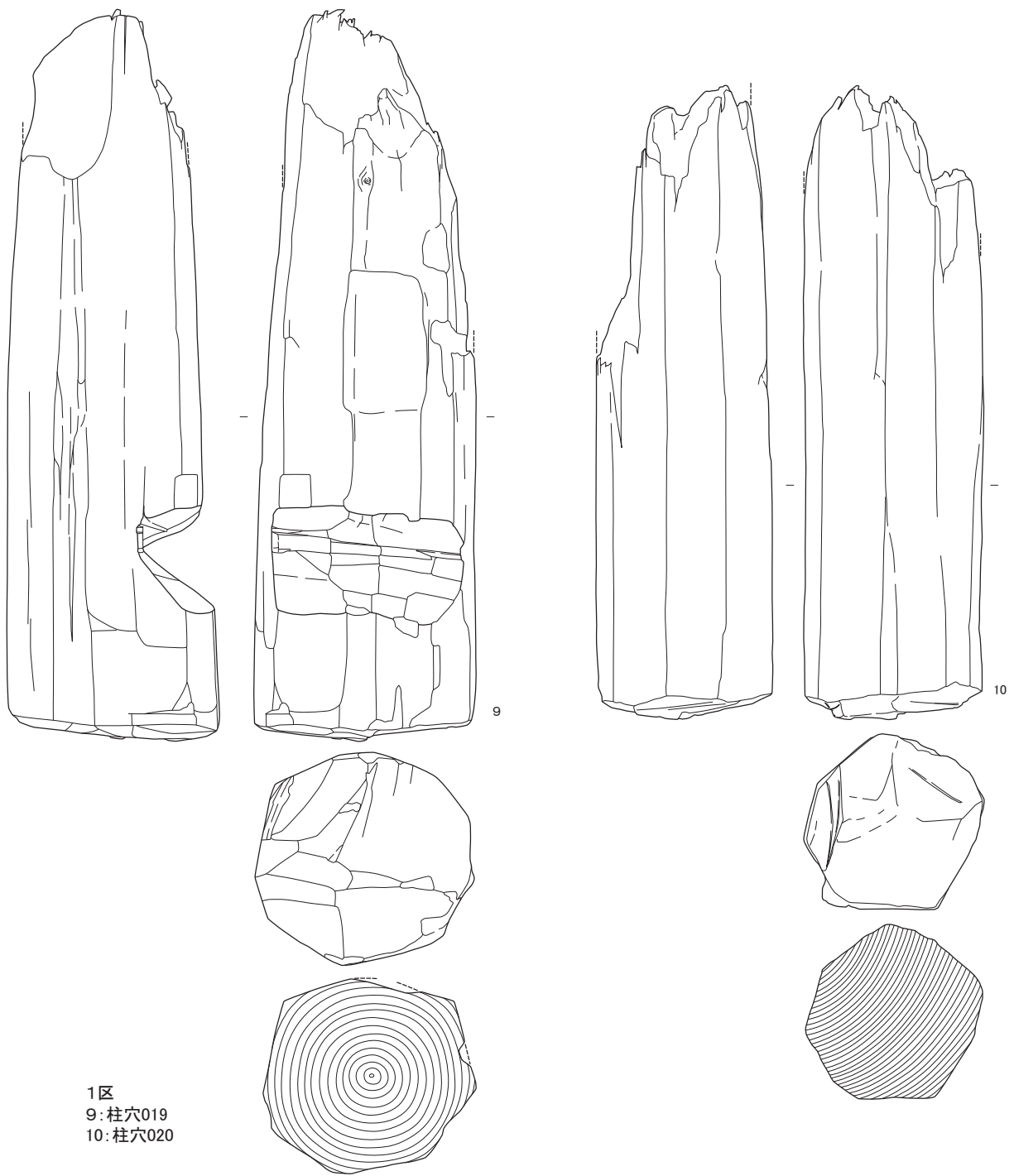


图 25 出土遺物 2 (1 : 4)

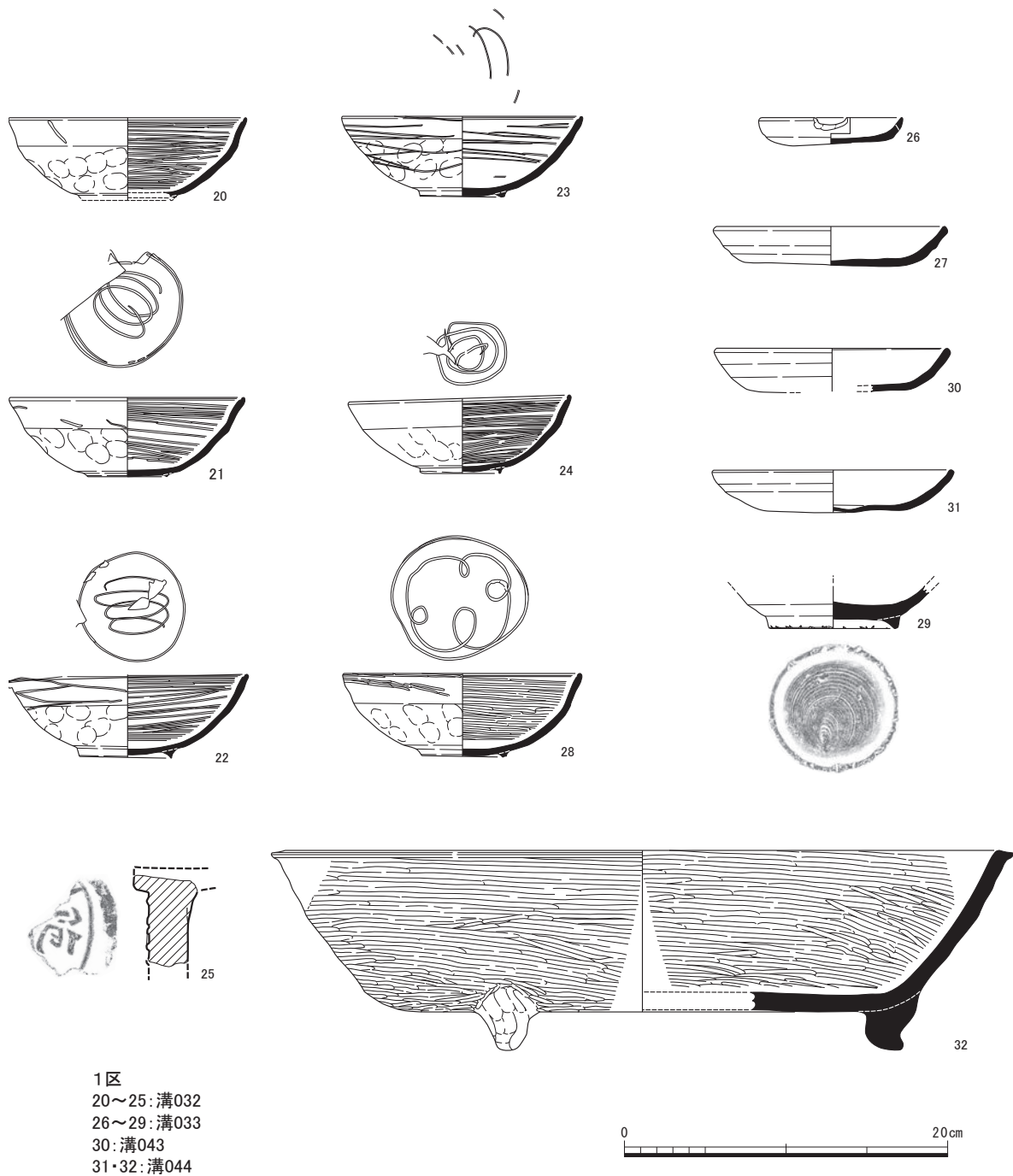


図 26 出土遺物 3 (1 : 4)

溝033 (図26、図版19-1・2)

土師器皿N (26・27)、瓦器椀 (28)、山茶椀 (29) が出土した。26は口径8.7cm、器高1.8cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。口縁の一部を打ち欠き、口縁端部に油煙が付着している。6 Cに属し、13世紀半ば~後半頃の所産と考えられる。27は口径14.1cm、器高2.5cm、口縁部はやや外反する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。6 Bに属し、13世紀前半頃の所産と考えられる。28は口径14.6cm、底径5.2cm、器高5.2cm、口縁部はやや外反し、口縁端部内面に沈線を施す。内面は横方向の緻密なミガキ、見込みに輪花を模したと思われるミガキを施し、外面はオサエの後に口縁部にミガキを施す。

楠葉型Ⅱ-3に属し、12世紀後半～末頃の所産と考えられる。29は底径7.7cm、残存器高2.6cm、高台は貼付高台で、底部は回転糸切痕が残る。内面・外面ともロクロナデを施す。尾張型第5形式に属し、12世紀末～13世紀前半の所産と考えられる。

溝043 (図26、図版18-2)

土師器皿N (30) が出土した。口径14.2cm、器高2.7cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。6Aに属し、12世紀末～13世紀前半頃の所産と考えられる。

溝044 (図26、図版18-2、19-2)

土師器皿N (31)、瓦質土器盤 (32) が出土した。31は口径14.6cm、器高2.7cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部は板圧痕のあるオサエを施す。6Aに属し、12世紀末～13世紀前半頃の所産と考えられる。32は口径44.3cm、底径26.9cm、器高12.4cm、口縁部は外反し口縁端部は平坦である。内面・外面とも横方向の緻密なミガキを施す。底部に獣脚の貼付脚部を施す。12世紀末～13世紀前半頃の所産と考えられる。

(2) 2区

(I) 第2面遺構出土遺物

〔溝〕

溝068 (図28、図版20-1)

輸入銭 (33・34) が出土した。33は元豊通宝で、径2.4cm、厚さ0.14cm、重さ2.0gである。元豊通宝は北宋時代元豊年間 (1078～1085年) に鑄造されたもので、鑄造量も多く日本へ多量に輸出された。34は開元通宝で、径2.25cm、厚さ0.11cm、重さ2.0gである。開元通宝は唐時代 (621～907年) に鑄造されたもので、日本へ多量に輸出された。

〔第2面整地層内 (第5層)〕 (図28)

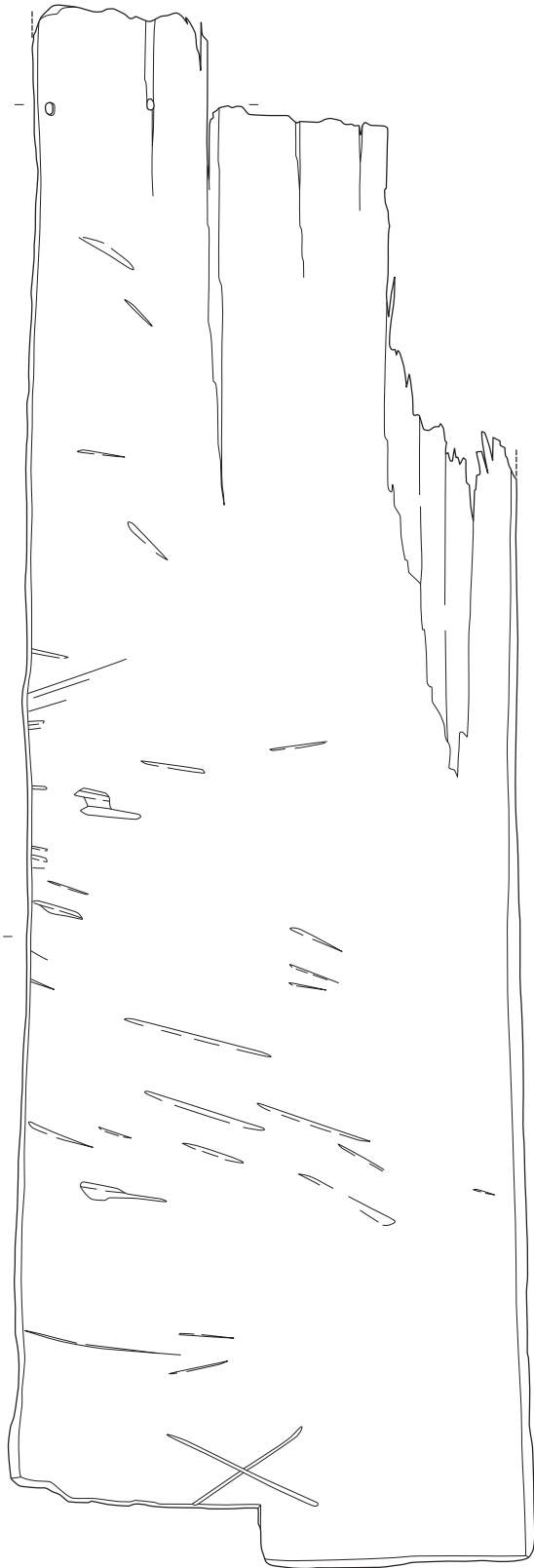
輸入青磁 (35) が出土した。口径10.9cm、底径4.0cm、器高2.1cm、口縁部はやや外反する。内面・外面ともオリーブ緑色の釉を施し、内面に劃花文と飛鉋文の文様を施す。底部は釉を剥ぎ取っている。中国、同安窯系の製品で、12世紀後半頃の所産である。

(II) 第3面遺構出土遺物

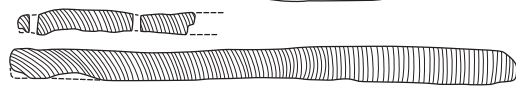
〔土坑〕

土坑074 (図27・28)

焼締陶器甕 (36)、板材 (37) が出土した。36は残存器高20.8cm、幅17.5cm、内面は横方向のナデを施し、外面は格子目のタタキを施す。14世紀末～15世紀前半頃の常滑焼と考えられる。37は残存



2区
37:土坑074



37



图 27 出土遺物 4 (1 : 4)

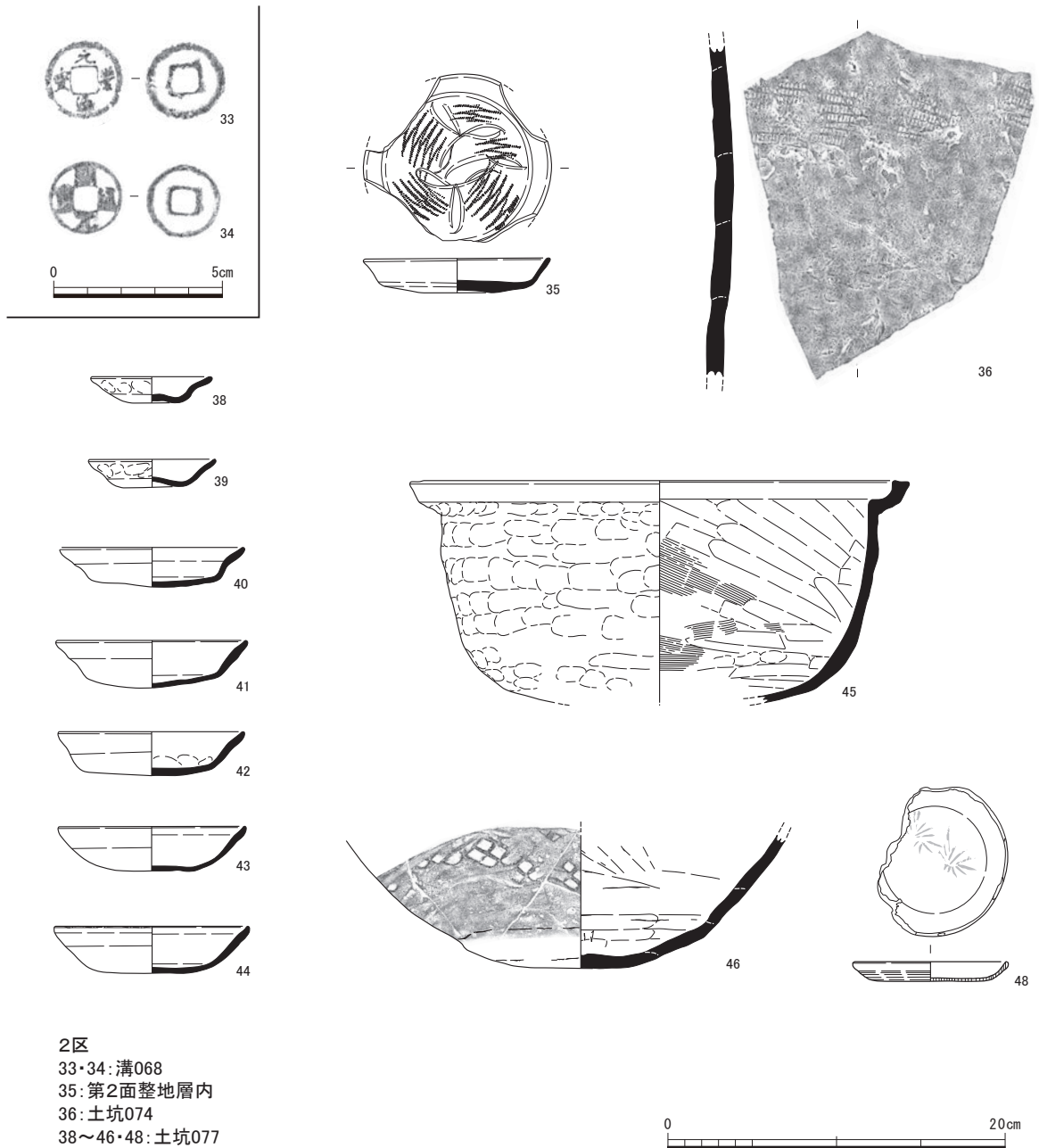


図28 出土遺物5 (1:2、1:4)

長84.9cm、幅28.5cm、厚さ1.9cm、両端ともに3~4cmの切り込みを入れる。一方には2ヶ所孔を開けている。組み合わせ式の木棺の板材と思われる。

土坑077 (図28・29、図版16-2、20-2、21-1)

土師器皿N (38~42)、土師器皿S (43・44) 瓦質土器鍋 (45・46)、須恵器甕 (47)、漆器皿 (48) が出土した。38は口径6.9cm、器高1.6cm、口縁部は大きく外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施し、内側へ凹ませる。9Aに属し、15世紀前半頃の所産と考えられる。39は口径7.4cm、器高1.7cm、口縁部は大きく外反する。口縁部から内面にかけてナ

デを施し、底部はオサエを施し内側へ凹ませる。9 Aに属し、15世紀前半頃の所産と考えられる。40は口径10.8cm、器高2.4cm、口縁部は大きく外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。8 Bに属し、14世紀末頃の所産と考えられる。41は口径11.2cm、器高2.8cm、口縁部は外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。8 Bに属し、14世紀末頃の所産と考えられる。42は口径10.9cm、器高2.6cm、口縁部は外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。8 Bに属し、14世紀末頃の所産と考えられる。43は口径11.0cm、器高2.7cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。7 Bに属し、13世紀末～14世紀前半頃の所産と考えられる。44は口径11.4cm、器高2.8cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部にオサエを施す。口縁端部に煤が付着する。7 Bに属し、13世紀末～14世紀前半頃の所産と考えられる。45は口径28.0cm、残存器高13.2cm、口縁部は「く」の字に立ち上げ、口縁端部は平坦である。口縁部はナデ、内面はハケのち板ナデを施し、外面から底部はオサエを施す。外面全体に煤が付着する。15世紀前半頃の所産と考えられる。46は残存器高10.9cm、内面はナデを施し、外面は格子目のタタキ、底部はオサエを施す。15世紀前半頃の所産と考えられる。47は口径28.0cm、残存器高33.1cm、口縁部は「く」の字となる。口縁部はナデを、内面はハケナデを施し、外面は格子目タタキを施す。全体的に摩滅と風化が激しい。48は口径9.0cm、器高1.2cm、口縁部はやや外反し肥厚する。内面・外面ともロクロで木地を削り出した際の痕が残る。内面・外面に黒漆を施し、内面に赤漆で草花と思われる漆絵を施す。14世紀末頃の所産と考えられる。

〔溝〕

溝031（図29、図版20－2）

土師器皿N（49）が出土した。口径11.8cm、残存器高2.2cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。8 Bに属し、14世紀末頃の所産と考えられる。

〔礎石建物〕

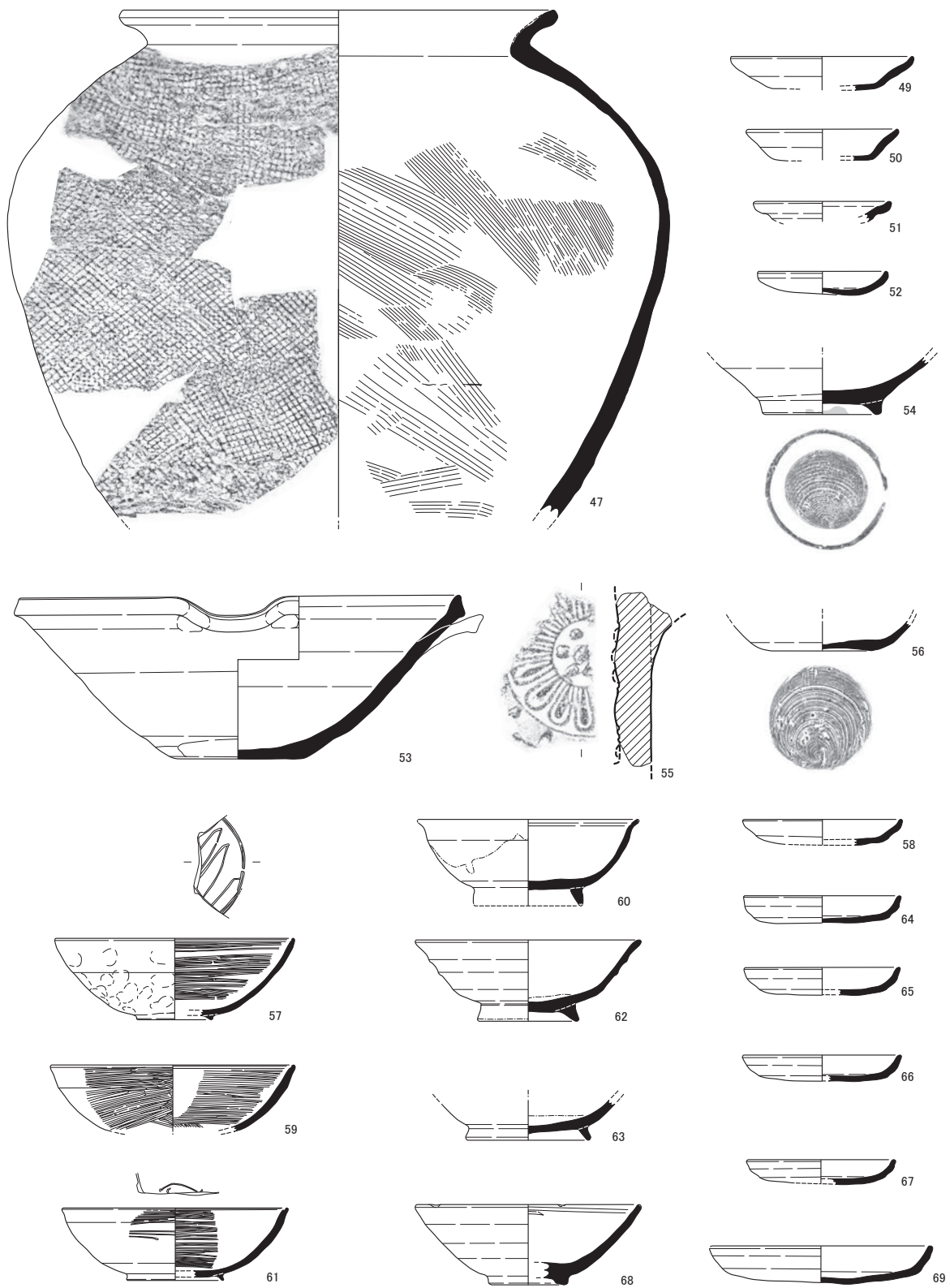
礎石建物141を構成する柱穴082・083より、土師器皿が出土した。

柱穴082（図29、図版20－2）

土師器皿N（50）が出土した。口径9.8cm、器高2.1cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。8 Bに属し、14世紀末頃の所産と考えられる。

柱穴083（図29、図版20－2）

土師器皿N（51）が出土した。口径8.8cm、残存器高1.3cm、口縁部は大きく外反し肥厚する。内面・外面ともナデを施す。8 Bに属し、14世紀末頃の所産と考えられる。



- | | | |
|----------------|-----------|--------------|
| 2区 | 56: 土坑104 | 62·63: 溝032 |
| 47: 土坑077 | 57: 土坑108 | 64~66: 柱穴071 |
| 49: 溝031 | 58: 土坑109 | 67: 柱穴098 |
| 50: 柱穴082 | 59: 土坑120 | 68: 柱穴133 |
| 51: 柱穴083 | 60: 土坑130 | 69: 柱穴139 |
| 52~55: 第3面整地層内 | 61: 土坑138 | |



图 29 出土遺物 6 (1 : 4)

〔第3面整地層内（第6層）〕（図29、図版20－2、21－2）

土師器皿N（52）、須恵器鉢（53）、山茶椀（54）、軒丸瓦（55）が出土した。52は口径8.4cm、器高1.6cm、口縁部は肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施し、内側へやや凹ませる。7Aに属し、13世紀後半～末頃の所産と考えられる。53は口径28.6cm、底径9.0cm、器高10.7cm、口縁部はやや外反し口縁端部は直立する。口縁部の一部を凹ませて片口にする。内面・外面ともロクロナデを施し、底部はケズリを施す。見込み部分は使用痕により摩滅している。東播系のこね鉢でⅢ－2類に属し、13世紀前半頃の所産と考えられる。54は山茶椀である。底径7.2cm、残存器高3.7cm、高台は貼付高台で、底部は回転糸切痕が残る。内面・外面ともロクロナデを施す。見込みに使用痕があり、高台と底部に煤が付着する。尾張型第5型式に属し、12世紀末～13世紀前半頃の所産と考えられる。55は推定瓦当径16.0cm、残存瓦当厚3.8cm、裏面はケズリを施し、丸瓦との接合痕が残存する。瓦当面は複弁蓮華文であり、外区に珠文がある。8世紀頃の所産と考えられる。

（Ⅲ）第4面遺構出土遺物

〔土坑〕

土坑104（図29、図版22－1）

土師器皿（56）が出土した。底径6.6cm、残存器高1.9cm、内面・外面ともロクロナデを施し、底部は回転糸切痕が残る。中井淳史氏の京都産土師器の分類⁽¹⁾による皿Dに当たるものと思われ、13世紀前半頃の所産と考えられる。

土坑108（図29、図版22－2）

瓦器椀（57）が出土した。口径15.5cm、底径4.8cm、器高5.3cm、口縁部はやや外反し、口縁端部内面に沈線を施す。内面は横方向の緻密なミガキを施し、外面はオサエを施す。高台は貼付高台である。楠葉型Ⅲ－2に属し、13世紀前半頃の所産と考えられる。

土坑109（図29、図版22－1）

土師器皿N（58）が出土した。口径10.2cm、器高1.7cm、口縁部は外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施す。6Bに属し、13世紀前半頃の所産と考えられる。

土坑120（図29）

瓦器椀（59）が出土した。口径15.8cm、残存器高4.4cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁端部内面に沈線を施す。内面・外面とも横方向の緻密なミガキを施す。楠葉型Ⅱ－1に属し、12世紀前半頃の所産と考えられる。

土坑130（図29、図版22－2）

灰釉陶器椀（60）が出土した。口径14.2cm、残存器高5.5cm、口縁部は外反する。内面・外面と

もロクロナデを施す。口縁部の一部に施釉がある。高台は貼付高台である。10世紀後半～11世紀前半頃の猿投系の所産と考えられる。

土坑138（図29、図版22-2）

瓦器碗（61）が出土した。口径14.6cm、底径6.2cm、器高4.7cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁端部上面に沈線を施す。内面は横方向の緻密なミガキを施し、外面はオサエのち口縁部にミガキを施す。高台は貼付高台である。大和型Ⅲ-A新に属し、12世紀末～13世紀前半頃の所産と考えられる。

〔溝〕

溝032（図29、図版22-2）

灰釉陶器碗（62・63）が出土した。62は口径14.6cm、底径6.4cm、器高5.3cm、口縁部は外反し肥厚する。内面・外面ともロクロナデを施す。高台は貼付高台である。見込み部分に使用痕がある。10世紀後半～11世紀前半頃の猿投系の所産と考えられる。63は底径8.0cm、残存器高2.6cm、内面はロクロナデを施し、外面は回転ヘラケズリを施す。高台は貼付高台である。内面全体に漆が付着しており、漆器を製作する工房で漆を入れる器として使用されていたものと思われる。10世紀後半～11世紀前半頃の猿投系の所産と考えられる。

〔柱穴〕

柱穴071（図29、図版22-1）

土師器皿N（64・65・66）が出土した。64は口径10.1cm、器高1.8cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。5Bに属し、12世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。65は口径10.0cm、器高1.8cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。5Bに属し、12世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。66は口径10.2cm、器高1.7cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。5Bに属し、12世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。

柱穴098（図29、図版22-1）

土師器皿N（67）が出土した。口径9.5cm、器高2.6cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。5Bに属し、12世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。

柱穴133（図29、図版22-2）

輸入青磁碗（68）が出土した。口径14.5cm、底径4.6cm、器高5.3cm、内面・外面ともオリーブ黄色の釉を施す。口縁端部をわずかに凹ませて輪花とする。口縁部内面に沈線を施し、内面に劃花

文の一部と思われる文様を施す。12世紀末～13世紀前半頃の龍泉窯系の所産と考えられる。

柱穴139 (図29)

土師器皿N (69) である。口径14.1cm、器高2.5cm、口縁部はやや外反し肥厚する。口縁部から内面にかけてナデを施し、底部はオサエを施す。5 Bに属し、12世紀半ば～後半頃の所産と考えられる。

註

- (1) 中井淳史「土師器」 新版『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 2022年

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査では、想定されていた西市外町に係わる遺構は確認できなかったが、室町時代前期～中期の第2面からは溝、南北朝時代の第3面からは土坑・溝・礎石建物、平安時代末期～鎌倉時代の第4面からは土坑・溝・柱穴を確認した。出土遺物としては平安時代～鎌倉時代の土器類の他に、瀬戸産の華瓶や水晶製装飾具、「南無阿弥陀仏」文軒丸瓦といった寺院と関わりのある遺物に加え、土坑墓に埋納された漆器皿等があげられる。特に「南無阿弥陀仏」文軒丸瓦は、兵庫県小野市の浄土寺および浄土寺の瓦を生産した神戸市の神出窯跡以外における初の出土例という特筆すべき点がある。

1 各面の検出遺構について (図30～33)

第1面は整地はされているものの、1区2区共に顕著な遺構は確認できなかった。

第2面は幅約1.5～2.0mの溝(溝008・012・028)と幅約0.3m前後の溝を検出した。1区検出の溝は全て南北方向であり、2区では東西方向の溝も検出した。幅約0.3m前後の溝は耕作溝と思われる。幅1.5～2.0mの溝は真北に対しほぼ振れが無いため、区画の溝と思われる。

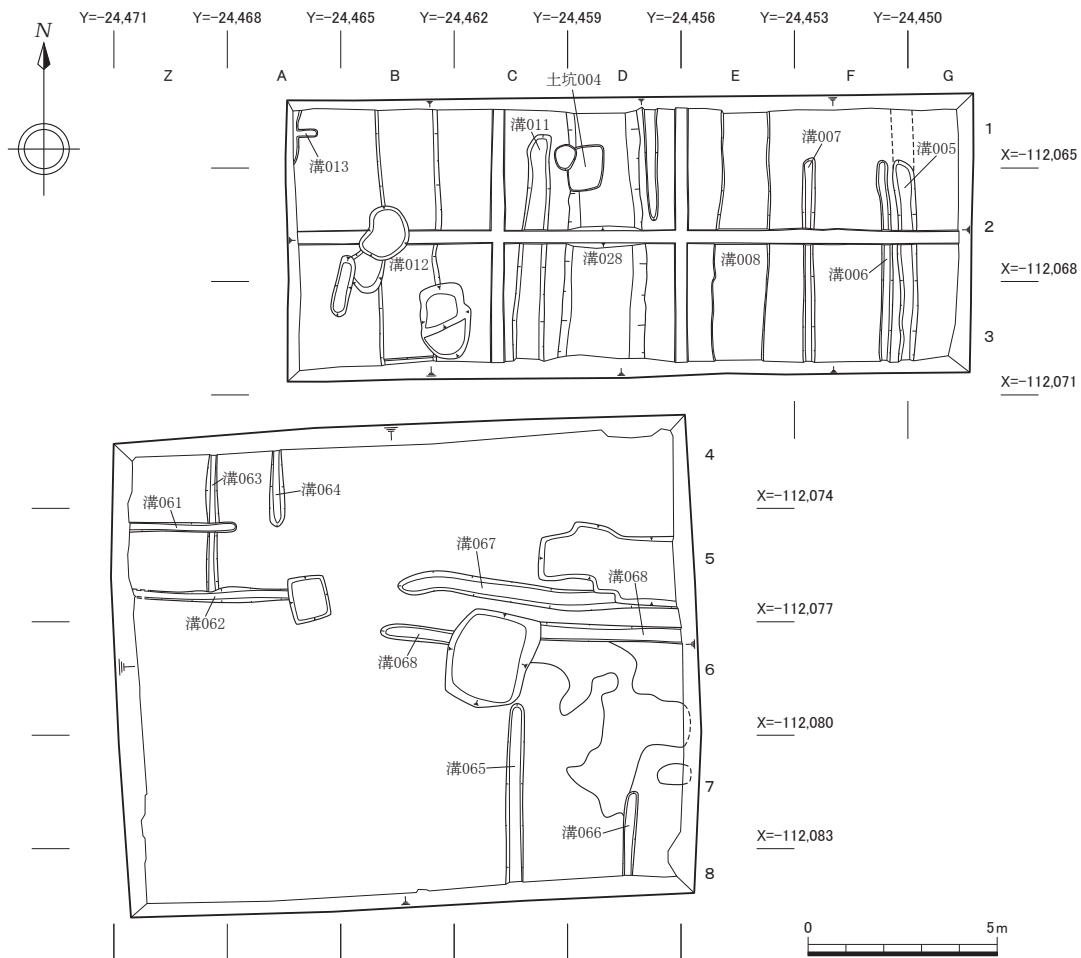


図30 1・2区第2面平面図(1:200)

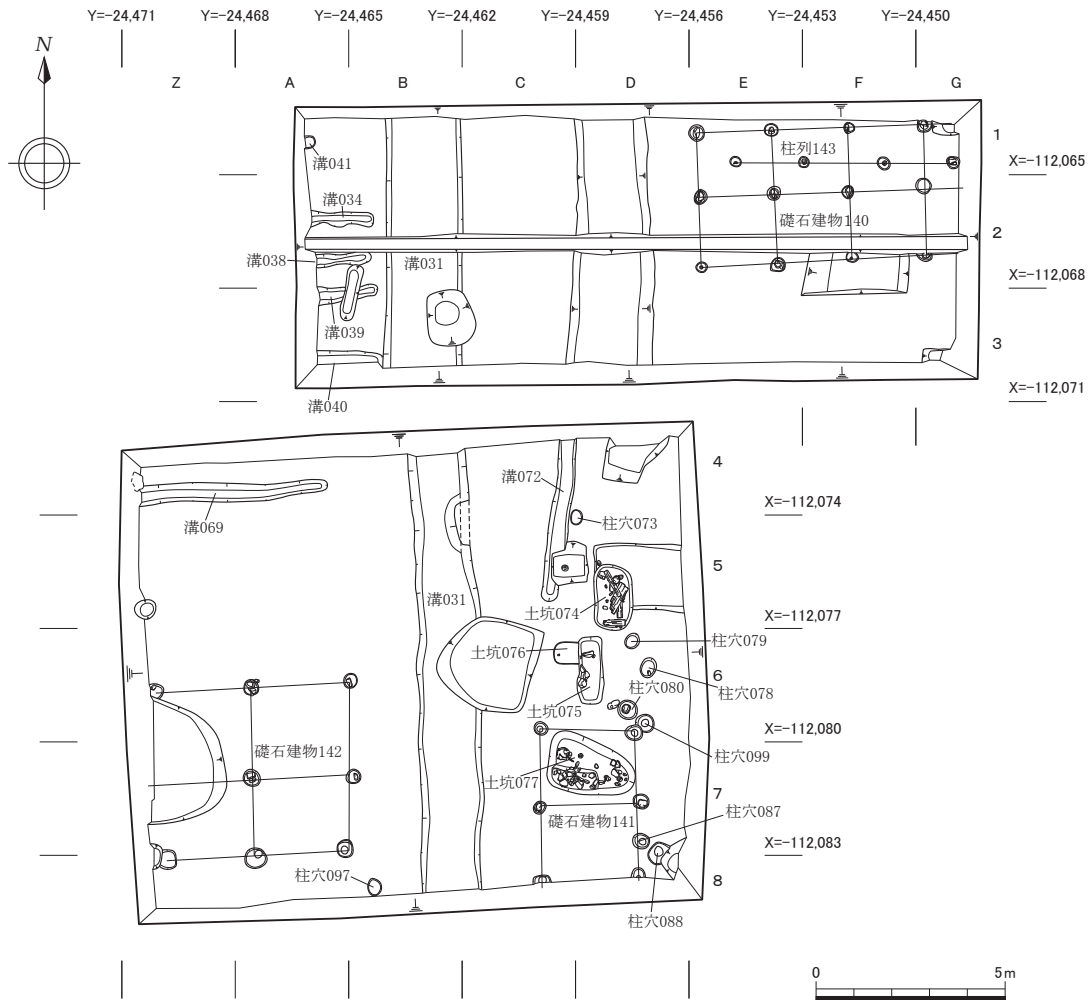


図 31 1・2区第3面平面図 (1:200)

第3面は幅約2.0mの溝(溝031)、礎石建物(礎石建物140・141・142)、柱列(柱列143)、土坑(土坑074・075・077)を検出した。溝031は第2面で検出した溝012の直下に構築されており、第3面が整地土で埋め立てられた後も、溝031を踏襲する形で同じ位置に溝012が構築されていることになる。礎石建物140は東西3間、南北2間の総柱建物で、東西の柱間は約2.0m(約7尺)、南北の柱間は約1.8m(約6尺)である。礎石建物142は東西1間、南北2間で、東西の柱間は約2.7m(約9尺)、南北の柱間は約2.4m(約8尺)である。礎石建物141は東西2間、南北2間の総柱建物であり、東西の柱間は約2.7m(約9尺)、南北の柱間は約2.4m(約8尺)である。柱列143は東西3間の柱列で、柱穴の底には礎石が据えられており、その上に柱材が残されていた。柱は8面の面取りがされており、いわゆる寺社建築において床下に用いられる八角柱と思われる。八角柱は円柱の下部の見えにくい箇所を簡略化するために用いられた技法で、南北朝時代頃から出現する⁽¹⁾。土坑074は長軸が南北方向の長方形の土坑墓で、土坑内からは板材が出土した。組み合わせのための切り込みや釘等で留めたとと思われる孔もあり、埋納された木棺であった可能性がある。土坑075は長軸を南北方向に向ける長方形の土坑であり、土坑内からは顕著な遺物の出土は無かったが、土坑074と軸方向が同じであり、土坑074と同じく土坑墓の可能性はある。土坑077は長軸を

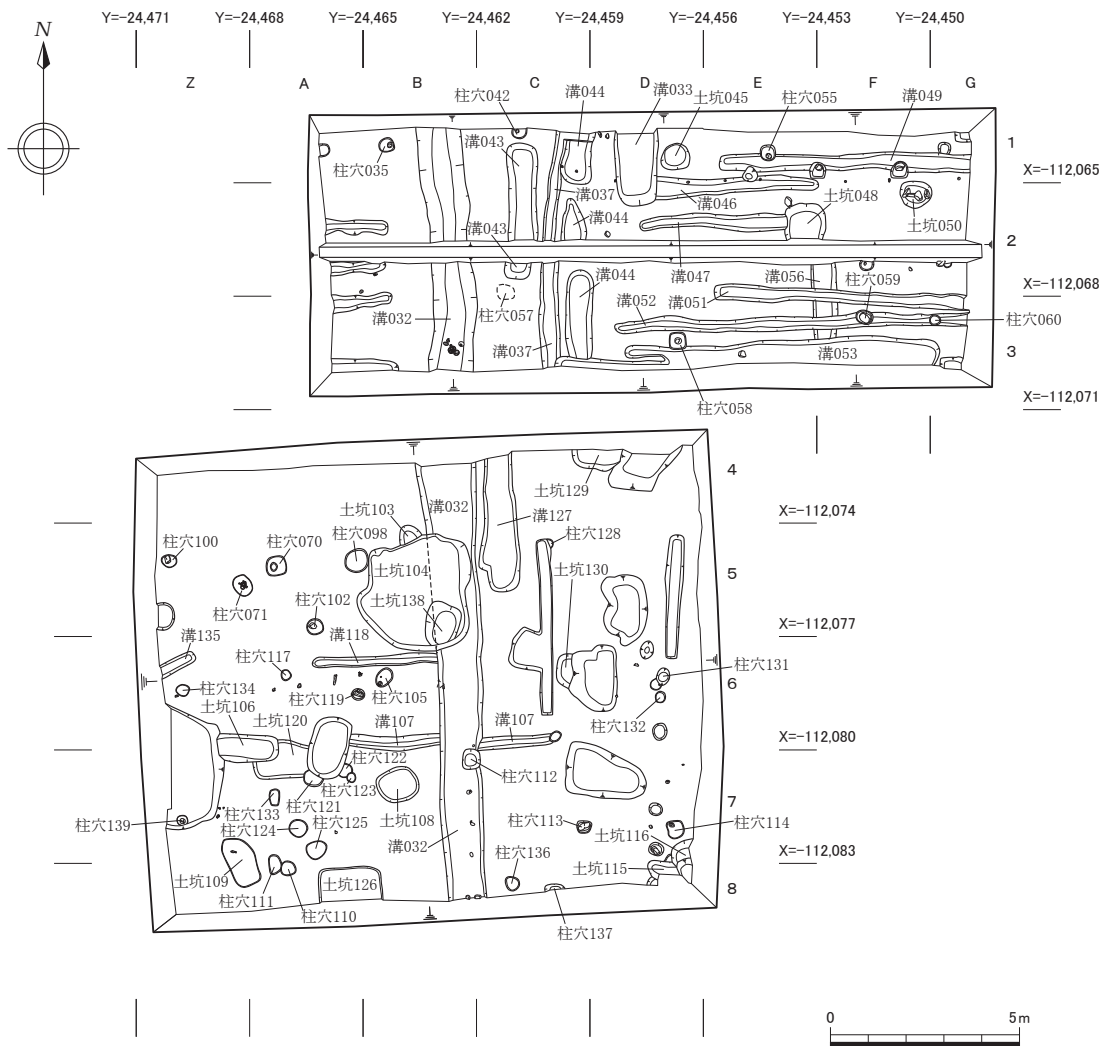


図 32 1・2区第4面平面図（1：200）

東西方向に向けるやや三角形の土坑墓で、土坑内からは土師器皿の他に漆器皿が出土した。埋葬者の副葬品と想定される。

土坑077は礎石建物141の中に納まっており、土坑077の規模に合わせ礎石建物141の柱間も東西間が1尺ほど長くなっている。礎石建物141は土坑077を覆っていた墓堂の役割があった可能性がある。墓堂の例として、鎌倉時代の神護寺五輪塔の四隅には1間四方の覆堂の礎石が残されており⁽²⁾、室町時代に描かれた善峯寺参詣曼荼羅には、堂の内部に五輪塔がある墓堂とみられる建物が描かれている⁽³⁾。また、南側の1間分に空間があるが、墓前で供養等の法要を行っていた可能性も考えられる⁽⁴⁾。

第4面は幅約1.2mの溝(溝032・033)、東西方向の耕作溝、柱穴等を検出した。溝032は第3面で検出した溝031の直下に構築されており、第4面が整地土で埋め立てられた後も溝032を踏襲する形で同じ位置に溝031が構築されていることになる。また、溝032内から完形を含む土師器と瓦器椀がまとまった形で出土した。また、溝033からも完形の瓦器椀が出土した。溝を埋める際に何らかの祭祀をしていた可能性がある。溝032からは後述する「南無阿弥陀佛」文の軒丸瓦が出土した。柱穴は柱痕に土師器皿を埋納した柱穴071と柱穴139が挙げられるが、いずれも建物としての並びを確認できなかった。



図33 善峯寺参詣曼荼羅(部分)
(大阪市立博物館『社寺参詣曼荼羅』より引用)

2 溝012・031・032について(図34)

今回の調査では、第2面から溝012、第3面から溝031、第4面から溝032といった幅約1.0～2.0mの南北方向の幅広の溝を検出した。溝012は2区では削平等で失われたのか確認できなかったが、溝031・032は1区2区に渡り検出した。これらの溝は、整地によって埋め立てられた後も同じ位置に重なるように構築されている。調査地は平安京四行八門での北六門東三行、北七門東三行、北六門東四行、北七門東四行に位置し⁽⁵⁾、東三行と東四行の境の西側約1.0mの位置に溝012・031・032が構築されている。東三行と東四行の境に沿うように構築されていることから、東三行と東四行の境に構築された小径に伴う区画溝の可能性が考えられる。同様の例として、右京八条二坊八町、右京七条二坊十二町、右京八条二坊一町の調査においても同じく小径に伴う区画溝が検出されている⁽⁵⁾。ただし、東三行と東四行の境の東側から検出した溝は位置が一定ではなく、東三行と東四行の境の西側の溝は平安時代～室町時代中期に至るまで基準として位置が踏襲されたが、東側は各時代ごとの状況に応じ変化したものと想定される。

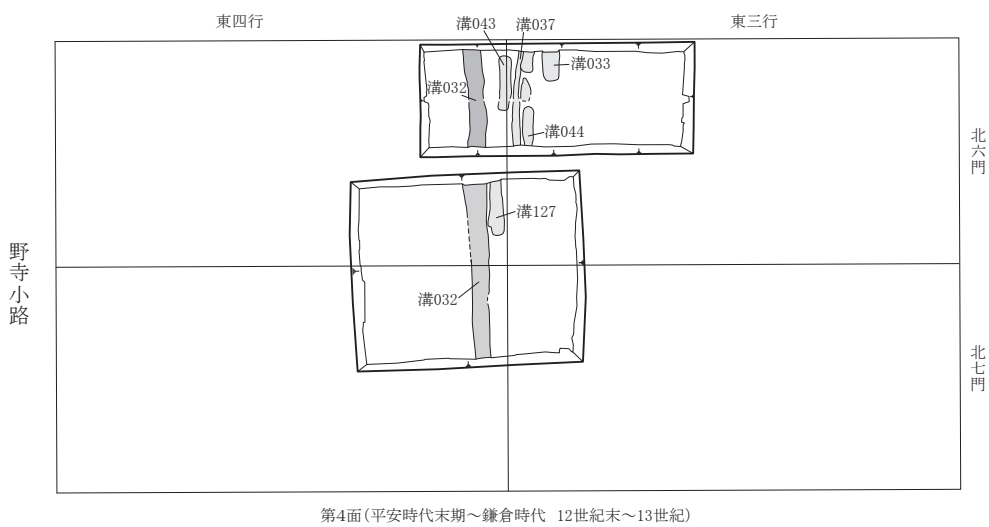
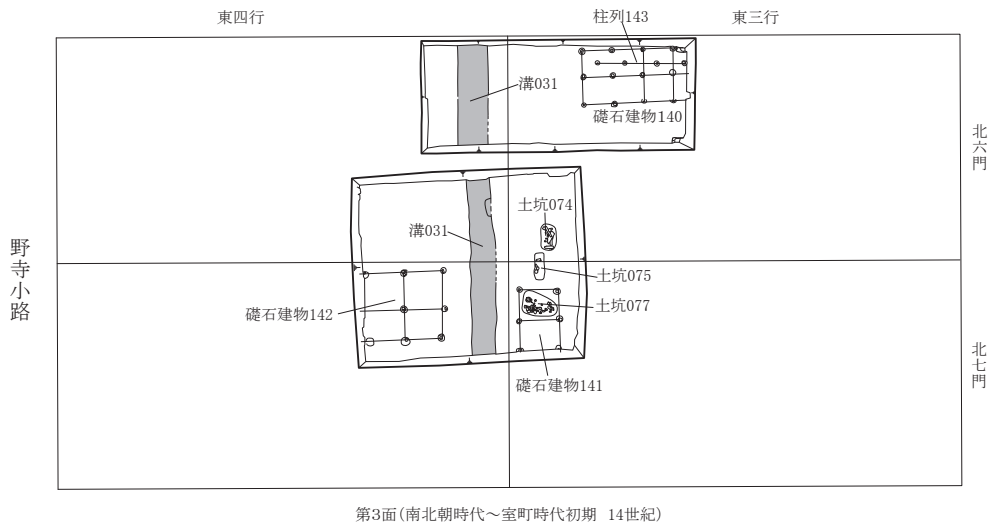
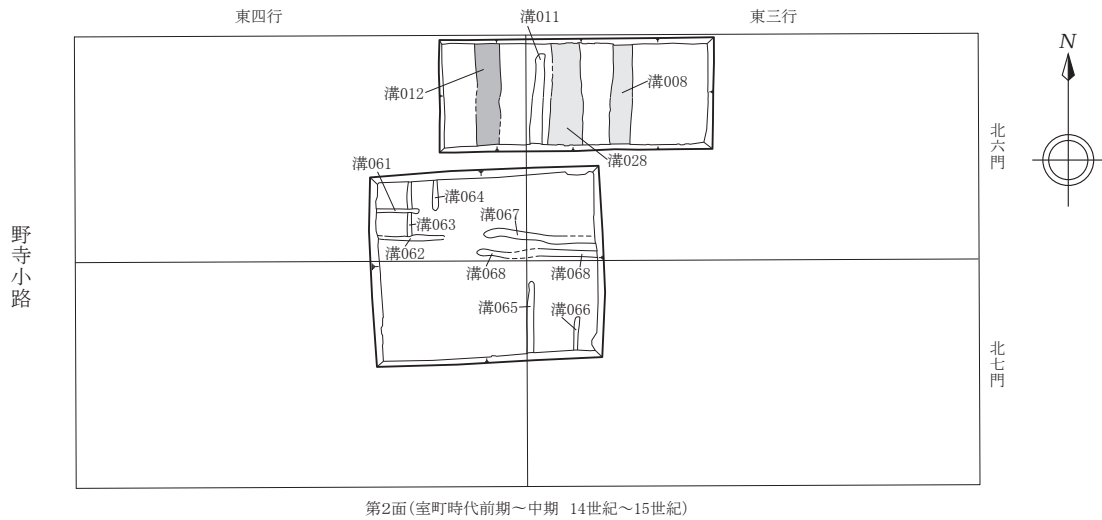


図34 区画溝変遷図 (1:500)

3 「南無阿弥陀仏」文軒丸瓦について（図35～37）

1区第4面の溝032より「陀」の字が刻まれた軒丸瓦の一部が出土した。兵庫県小野市の浄土寺⁽⁶⁾および神戸市の神出窯跡から同文の瓦が出土している⁽⁷⁾。浄土寺出土の瓦は、建久8年（1197）建立の浄土堂の創建瓦で、神出窯跡はその瓦を生産していた窯である。この「南無阿弥陀仏」文軒丸瓦は、浄土寺および神出窯跡以外での出土例は確認されておらず、同文の瓦としては京都市内で初の出土例となった⁽⁸⁾。浄土寺は重源の開基で、創建当初に建てられた浄土堂の柱材の年輪年代測定法の結果から、造営開始から2年ほどで建てられたと考えられる⁽⁹⁾。「南無阿弥陀仏」文軒丸瓦は他に出土例が確認されていないことから、造営期間にあたる2年間という短い間に特注品として生産された可能性がある。その特異な瓦が今回の調査で出土したことから、近隣にかつて重源と関わりのある寺院が存在した可能性が考えられるが、浄土寺例および神出窯跡例と比較すると、外区の珠文が存在しないこと、「陀」の書体が異なることなど違いがいくつかある。これらの差異から同文ではあるが同范瓦ではないことが明らかであり、浄土堂の瓦を模倣した製品である可能性も考えられる。



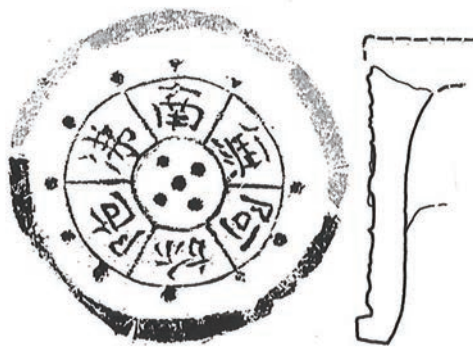
図35 浄土寺浄土堂
(執筆者撮影)



図36 浄土寺浄土堂復元瓦
(執筆者撮影)

小野市浄土寺出土軒丸瓦

神戸市神出窯跡出土軒丸瓦



平安京右京七条二坊十二町跡・西市跡 溝032出土軒丸瓦



※小野市浄土寺出土軒丸瓦の実測図は、小野市『小野市史』第4巻 史料編Ⅰ、
神戸市神出窯跡出土軒丸瓦の実測図は、明石市立博物館「明石の古代Ⅱ」掲載の図面を引用。

図37 浄土寺・神出窯跡・溝032出土軒丸瓦（1：4）

以上、今回の調査では、平安京の西市外町に関する遺構は確認できなかったが、平安時代末期～室町時代中期頃の四行八門の境界の小径に関わる区画溝が200年余りに渡って同じ位置で踏襲されたこと、南北朝時代の墓堂と思われる建物を伴う土坑墓や社寺建築の特徴を持つ柱材の出土、瀬戸産の華瓶、水晶製装飾具や「南無阿弥陀佛」文軒丸瓦の出土など、当地域での中世での土地利用や寺院関係の存在の可能性を明らかにすることができた。

註

- (1) 近藤豊『古建築の細部意匠』大河出版 1991年
- (2) 朽津信明『日本における覆屋の歴史について』国立文化財機構東京文化財研究所 2010年
- (3) 大阪市立博物館『社寺参詣曼荼羅』平凡社 1987年
- (4) 大阪大谷大学 狭川真一氏から見解を頂いた。
- (5) 財団法人 古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店 1994年
- (6) 小野市『小野市史』第四巻 史料編Ⅰ 小野市史編纂専門委員会 1997年
- (7) 発掘された明石の歴史展実行委員会『明石の歴史Ⅱ』 2014年
- (8) 京都産業大学 鈴木久男氏および、小野市教育委員会 山本原也氏から御教示をいただいた。
- (9) 小野市立好古館『知られざる浄土寺の至宝』 2021年

※図 33 は西山善峯寺、図 35・36 は極楽山浄土寺の了承を得て掲載した。

表4 遺物観察表

掲載No	器種	器形	調査区	面	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	厚(cm)	色調	備考
1	須恵器	鉢	1区	2面	溝008	23.8	(3.5)	-	-	N6/0 灰色	東播系
2	施釉陶器	瓶子	1区	2面	溝028	-	(5.6)	3.4	-	(釉) 2.5Y3/1 黒褐色 (胎) 10YR8/1 灰白色	瀬戸
3	土師器	皿	1区	2面	溝028	13.0	2.5	-	-	2.5YR8/1 灰白色	皿 N
4	水晶製製品	装飾具か	1区	2面	第2面整地層内	長 (3.0)	幅 0.8	-	0.8		重さ 2.9g
5	焼締陶器	壺	1区	2面	第2面整地層内	-	(8.9)	-	-	7.5YR7/4 ~ 6/4 にぶい橙色	常滑
6	石器	磨製石斧	1区	2面	第2面整地層内	長 11.3	幅 3.5	-	2.9		重さ 234g
7	土師器	皿	1区	3面	溝031	14.5	3.3	-	-	2.5Y8/2 灰白色	皿 N
8	瓦器	椀	1区	3面	溝031	長 (2.6)	幅 (3.5)	-	0.5	N3/0 暗灰色	楠葉型
9	木製品	柱材	1区	3面	柱穴019	長 (46.7)	幅 14.2	-	13.6		
10	木製品	柱材	1区	3面	柱穴020	長 (40.5)	幅 11.4	-	11.2		
11	緑釉陶器	皿	1区	3面	第3面整地層内	-	(2.0)	5.9	-	7.5Y6/3 オリーブ黄色	
12	瓦器	皿	1区	3面	第3面整地層内	9.3	1.5	-	-	N3/0 暗灰色	
13	石製品	石鍋	1区	3面	第3面整地層内	長 (5.0)	幅 (6.1)	-	2.5		重さ 91.0g
14	山茶椀	椀	1区	4面	土坑045	-	(3.8)	7.0	-	N7/0 灰白色	尾張型
15	土師器	皿	1区	4面	溝032	8.6	1.3	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 N
16	土師器	皿	1区	4面	溝032	9.3	1.7	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 N
17	土師器	皿	1区	4面	溝032	14.0	(3.1)	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 N
18	土師器	皿	1区	4面	溝032	14.0	3.0	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 N
19	土師器	皿	1区	4面	溝032	13.6	3.1	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	皿 N
20	瓦器	椀	1区	4面	溝032	14.6	(5.0)	-	-	N3/0 暗灰色	楠葉型
21	瓦器	椀	1区	4面	溝032	14.5	4.9	4.9	-	N3/0 暗灰色	楠葉型
22	瓦器	椀	1区	4面	溝032	14.8	5.2	5.1	-	N3/0 暗灰色	楠葉型
23	瓦器	椀	1区	4面	溝032	14.8	5.0	5.2	-	N3/0 暗灰色	楠葉型
24	瓦器	椀	1区	4面	溝032	13.7	4.8	4.6	-	N3/0 暗灰色	楠葉型
25	瓦	軒丸瓦	1区	4面	溝032	瓦当径 (15.0)	-	-	瓦当厚 (4.1)	N6/0 灰色	「南無阿弥陀佛」 軒丸瓦
26	土師器	皿	1区	4面	溝033	8.7	1.8	-	-	2.5Y7/2 灰黄色	皿 N
27	土師器	皿	1区	4面	溝033	14.1	2.5	-	-	10YR8/2 灰白色	皿 N
28	瓦器	椀	1区	4面	溝033	14.6	5.2	5.2	-	N4/0 灰色	楠葉型
29	山茶椀	椀	1区	4面	溝033	-	(2.6)	7.7	-	N7/0 灰白色	尾張型
30	土師器	皿	1区	4面	溝043	14.2	2.7	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 N
31	土師器	皿	1区	4面	溝044	14.6	2.7	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 N
32	瓦質土器	盤	1区	4面	溝044	44.3	12.4	26.9	-	N4/0 灰色	
33	金属製品	銭	2区	2面	溝068	径 2.4	-	-	0.14		元豊通宝 重さ 2.0g
34	金属製品	銭	2区	2面	溝069	径 2.25	-	-	0.11		開元通宝 重さ 2.0g
35	磁器	青磁	2区	2面	第2面整地層内	10.9	2.1	4.0	-	(釉) オリーブ緑色 (胎) 5Y7/2 灰白色	同安窯

掲載No	器種	器形	調査区	面	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	厚(cm)	色調	備考
36	焼締陶器	甕	2区	3面	土坑074	長(20.8)	幅(17.5)	-	1.1	(内) 7.5YR5/1 褐灰色 (外) N4/0 灰色	常滑
37	木製品	板材	2区	3面	土坑074	長28.5	幅(84.9)	-	1.9		
38	土師器	皿	2区	3面	土坑077	6.9	1.6	-	-	2.5Y7/2 灰黄色	皿 N
39	土師器	皿	2区	3面	土坑077	7.4	1.7	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	皿 N
40	土師器	皿	2区	3面	土坑077	10.8	2.4	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	皿 N
41	土師器	皿	2区	3面	土坑077	11.2	2.8	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 N
42	土師器	皿	2区	3面	土坑077	10.9	2.6	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	皿 N
43	土師器	皿	2区	3面	土坑077	11.0	2.7	-	-	2.5Y8/1 灰白色	皿 S
44	土師器	皿	2区	3面	土坑077	11.4	2.8	-	-	2.5Y8/2 灰白色	皿 S
45	瓦質土器	鍋	2区	3面	土坑077	28.0	(13.2)	-	-	N7/0 灰白色	
46	瓦質土器	鍋	2区	3面	土坑077	-	(10.9)	-	-	N3/0 暗灰色	
47	須恵器	甕	2区	3面	土坑077	28.0	(33.1)	-	-	N6/0 灰色～ N3/0 暗灰色	
48	漆器	皿	2区	3面	土坑077	9.0	1.2	-	-		
49	土師器	皿	2区	3面	溝031	11.8	(2.2)	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	皿 N
50	土師器	皿	2区	3面	柱穴082	9.8	2.1	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	皿 N
51	土師器	皿	2区	3面	柱穴083	8.8	(1.3)	-	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	皿 N
52	土師器	皿	2区	3面	第3面整地層内	8.4	1.6	-	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	皿 N
53	須恵器	鉢	2区	3面	第3面整地層内	28.6	10.7	9.0	-	N6/0 灰色	東播系
54	山茶椀	椀	2区	3面	第3面整地層内	-	(3.7)	7.2	-	N6/0 灰色	尾張型
55	瓦	軒丸瓦	2区	3面	第3面整地層内	瓦当径(16.0)	-	-	瓦当厚(3.8)	N5/0 灰色	複弁蓮華文
56	土師器	皿	2区	4面	土坑104	-	(1.9)	6.6	-	N7/0 灰白色	底部回転糸切痕有
57	瓦器	椀	2区	4面	土坑108	15.5	5.3	4.8	-	N3/0 暗灰色	楠葉型
58	土師器	皿	2区	4面	土坑109	10.2	1.7	-	-	10YR8/2 灰白色	皿 N
59	瓦器	椀	2区	4面	土坑120	15.8	(4.4)	-	-	N3/0 暗灰色～ N8/0 灰白色	楠葉型
60	灰釉陶器	椀	2区	4面	土坑130	14.2	(5.5)	8.1	-	(釉) N6/0 灰色 (胎) N6/0 灰色	猿投系
61	瓦器	椀	2区	4面	土坑138	14.6	4.7	6.2	-	N3/0 暗灰色	大和型
62	灰釉陶器	椀	2区	4面	溝032	14.6	5.3	6.4	-	(釉) 5Y7/2 灰白色 (胎) 5Y7/1 灰白色	猿投系
63	灰釉陶器	椀	2区	4面	溝032	-	(2.6)	8.0	-	(釉) 5Y7/3 浅黄色 (胎) N7/0 灰白色	猿投系内面全体に漆付着
64	土師器	皿	2区	4面	柱穴071	10.1	1.8	-	-	10YR8/2 灰白色	皿 N
65	土師器	皿	2区	4面	柱穴071	10.0	1.8	-	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	皿 N
66	土師器	皿	2区	4面	柱穴071	10.2	1.7	-	-	7.5YR8/2 灰白色	皿 N
67	土師器	皿	2区	4面	柱穴098	9.5	2.6	-	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 N
68	磁器	青磁	2区	4面	柱穴133	14.5	5.3	4.6	-	(釉) 5Y6/3 オリーブ黄色 (胎) 2.5Y7/1 灰白色	龍泉窯
69	土師器	皿	2区	4面	柱穴139	14.1	2.5	-	-	2.5Y8/1 灰白色	皿 N

附章 安阿弥寺門前の板碑について

今回の調査地から東へ約230mの位置に快慶を開基と伝える浄土宗西山禪林寺派の安阿弥寺がある。その門前に立てられている板碑について触れたい(図38)。安阿弥寺門前の板碑は高さ1.67m、幅0.32m、厚さ0.2mの花崗岩製で、頂部は山形で頂部から0.25mは全面に0.05m突出し、厚さは0.25mとなる。突出した山形には二条線があり、その下には阿弥陀如来の種子梵字であるキリークを陰刻彫りで表し、その下に蓮台を陽刻彫りで表す。その下には紀年銘や供養者名が刻まれていたと考えられるが、摩滅が激しく判読は不能である。安阿弥寺門前の板碑の年代について、山形の部分が突出している板碑は古い部類に多く⁽¹⁾、京都府京田辺市の極楽寺板碑(正中二年 1325年)、三重県伊賀市の慈尊寺板碑(元享元年 1321年)等の例がある。これらの板碑はいずれも南北朝時代、14世紀頃のものであり、同じ特徴を持つ安阿弥寺門前の板碑も南北朝時代、14世紀頃の作と考えられる。高さ1.67mの安阿弥寺門前の板碑は南北朝時代～室町時代初期に存在した墓地の中心の供養塔であった可能性があり、近隣にそれなりの規模の墓域があった可能性が考えられる。安阿弥寺によれば、この板碑は寺の近くの川の跡より見つかったとのことであり、ある時期に墓地が廃され、板碑は石橋の代わりとして使われた可能性がある。



図38 安阿弥寺門前板碑
(執筆者撮影)

今回の調査では、2区の第3面より南北朝時代～室町時代初期と思われる土坑墓を3基検出した。また、第4面の平安時代末期～鎌倉時代の溝032からは、南無阿弥陀佛の「陀」の部分の文字のある「南無阿弥陀佛」文軒丸瓦が出土している。同様の瓦は兵庫県小野市にある重源を開基とする浄土寺から出土しており、重源と深い関わりのあった快慶を開基とする安阿弥寺が調査地の近くに存在することは興味深い。

安阿弥寺門前の板碑は阿弥陀如来の種子を刻む南北朝時代の作と考えられ、今回の調査で検出した土坑墓や「南無阿弥陀佛」文軒丸瓦と直接は結びつけることはできないが、鎌倉時代～南北朝時代に阿弥陀信仰のある寺院や墓地等の存在を裏付ける可能性のある資料として取り上げることにした。

註

(1) 安阿弥寺門前の板碑の年代と類例に関して、大阪大谷大学の狭川真一教授より御教示をいただいた。

図 版



1. 1区第1面全景（東から）



2. 1区第1面全景（西から）



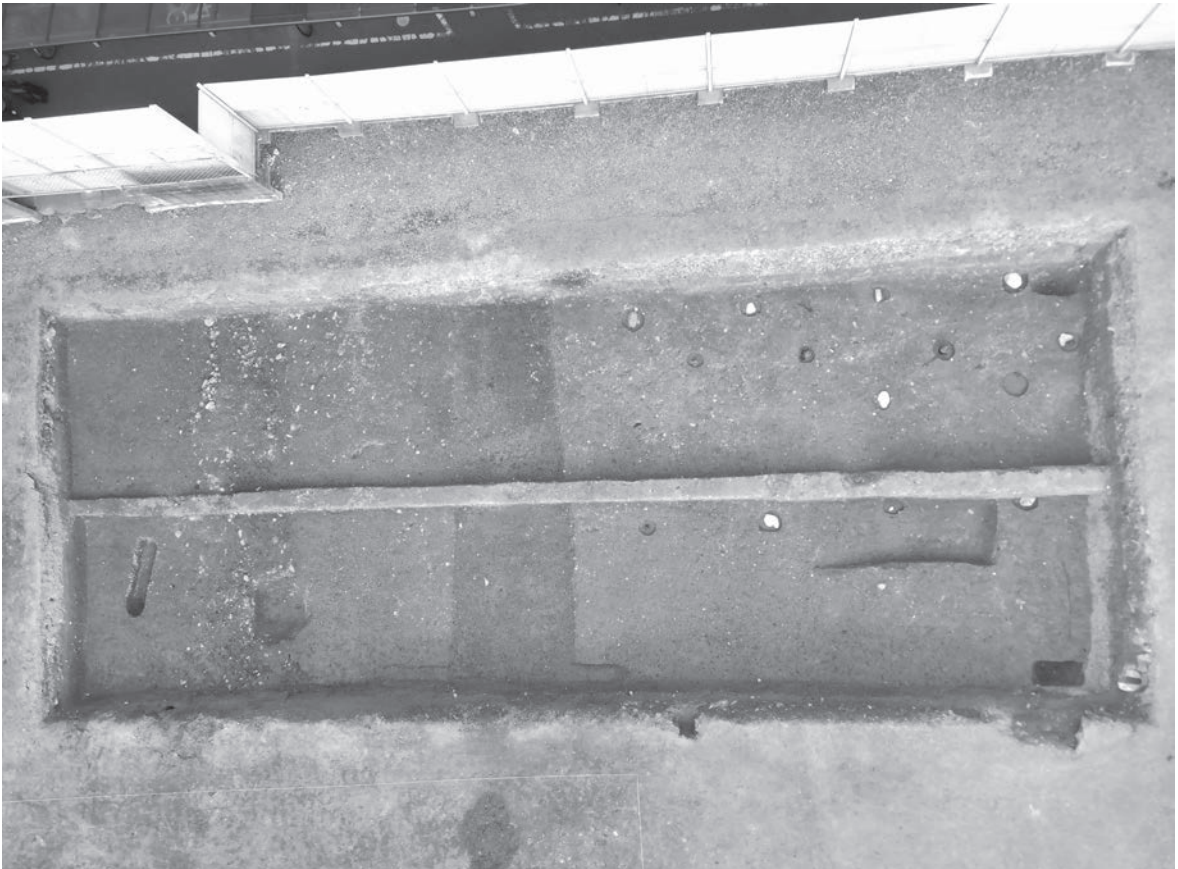
1. 1区第2面全景（東から）



2. 1区第2面全景（上が北）



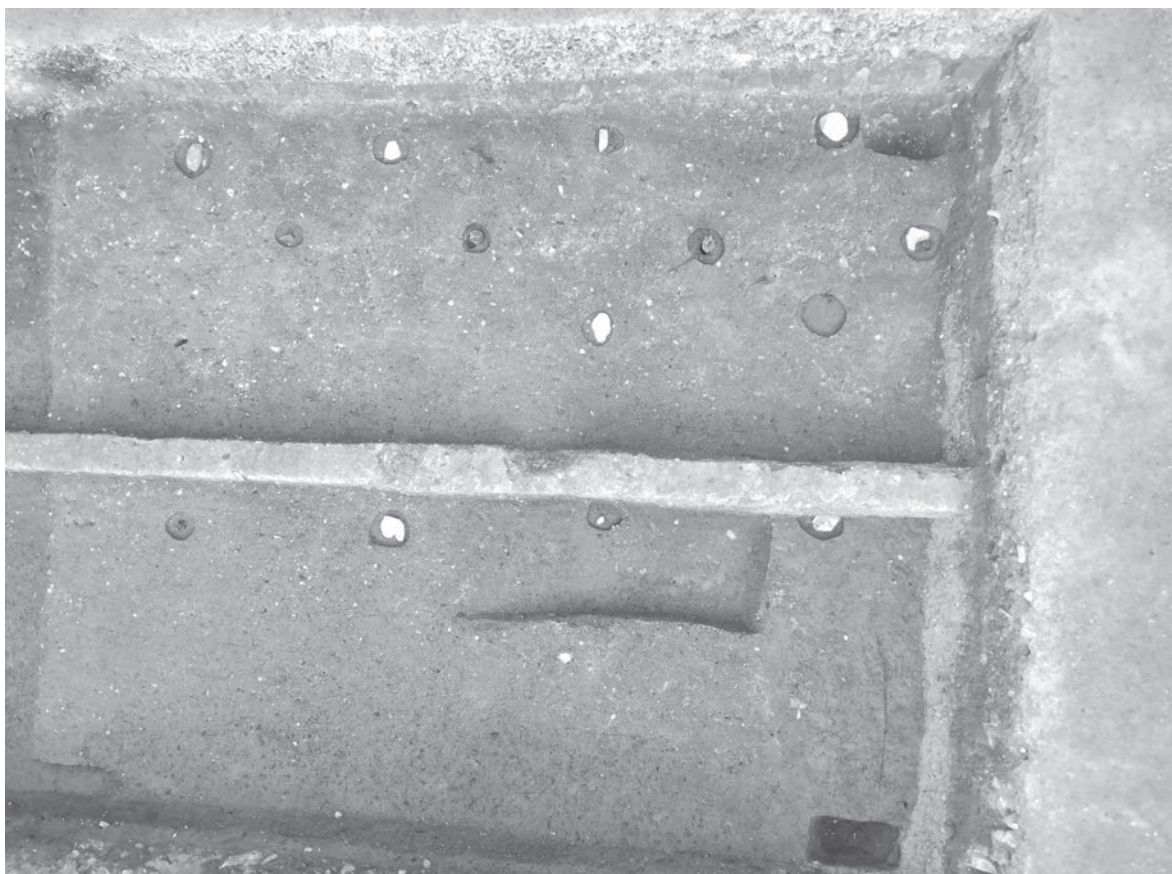
1. 1区第3面全景（東から）



2. 1区第3面全景（上が北）



1. 1区礎石建物140、柱列143検出状況（南東から）



2. 1区礎石建物140、柱列143検出状況（上が北）



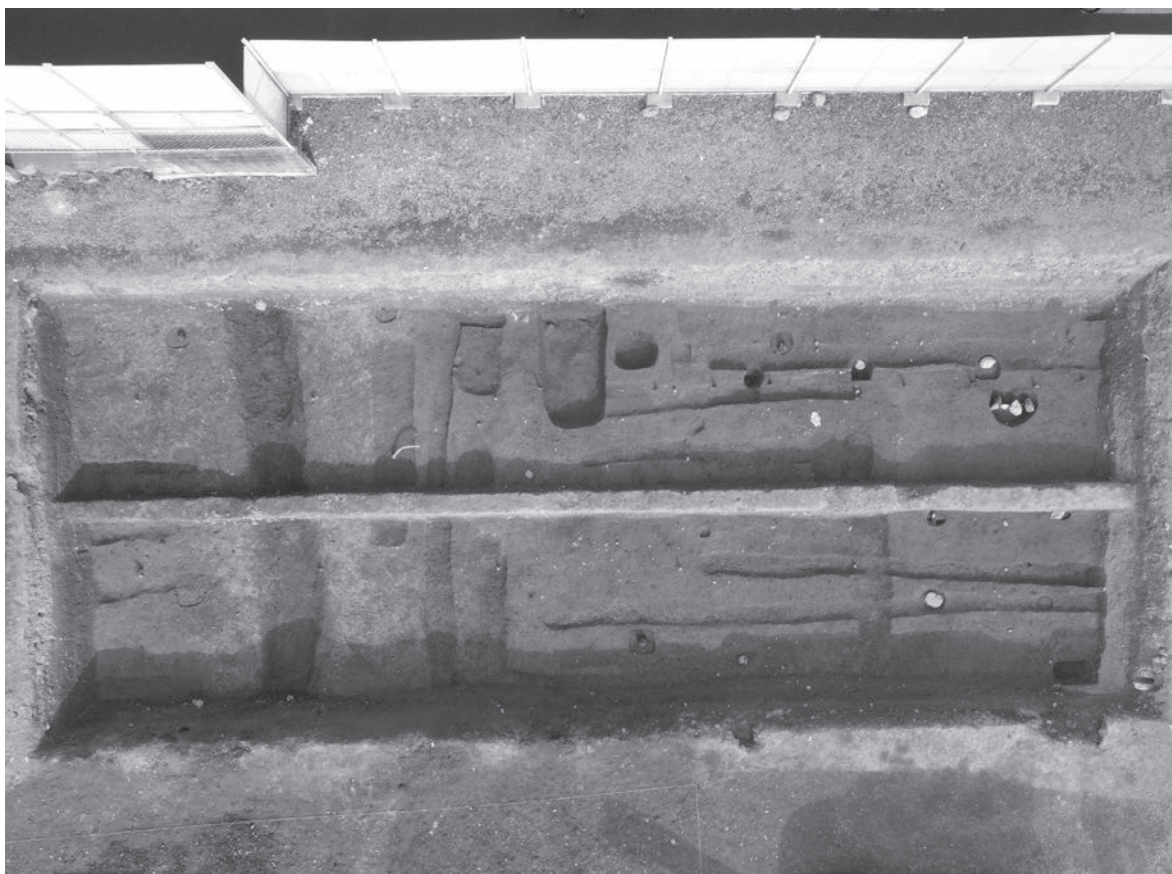
1. 1区柱穴019断面（南から）



2. 1区柱穴020断面（南から）



1. 1区第4面全景（東から）



2. 1区第4面全景（上が北）



1. 1区溝032遺物出土状況（北から）



2. 1区溝032完掘状況（南から）



1. 1区溝033遺物出土状況（南から）



2. 1区杭148・149断面（南から）



1. 2区第2面全景（東から）



2. 2区第2面全景（西から）



1. 2区第3面全景（東から）



2. 2区第3面全景（上が北）



1. 2区溝031、礎石建物141、土坑074・075・077全景（上が西）



2. 2区礎石建物142全景（上が西）



1. 2区土坑077掘削状況（北から）



2. 2区土坑077遺物出土状況（北から）



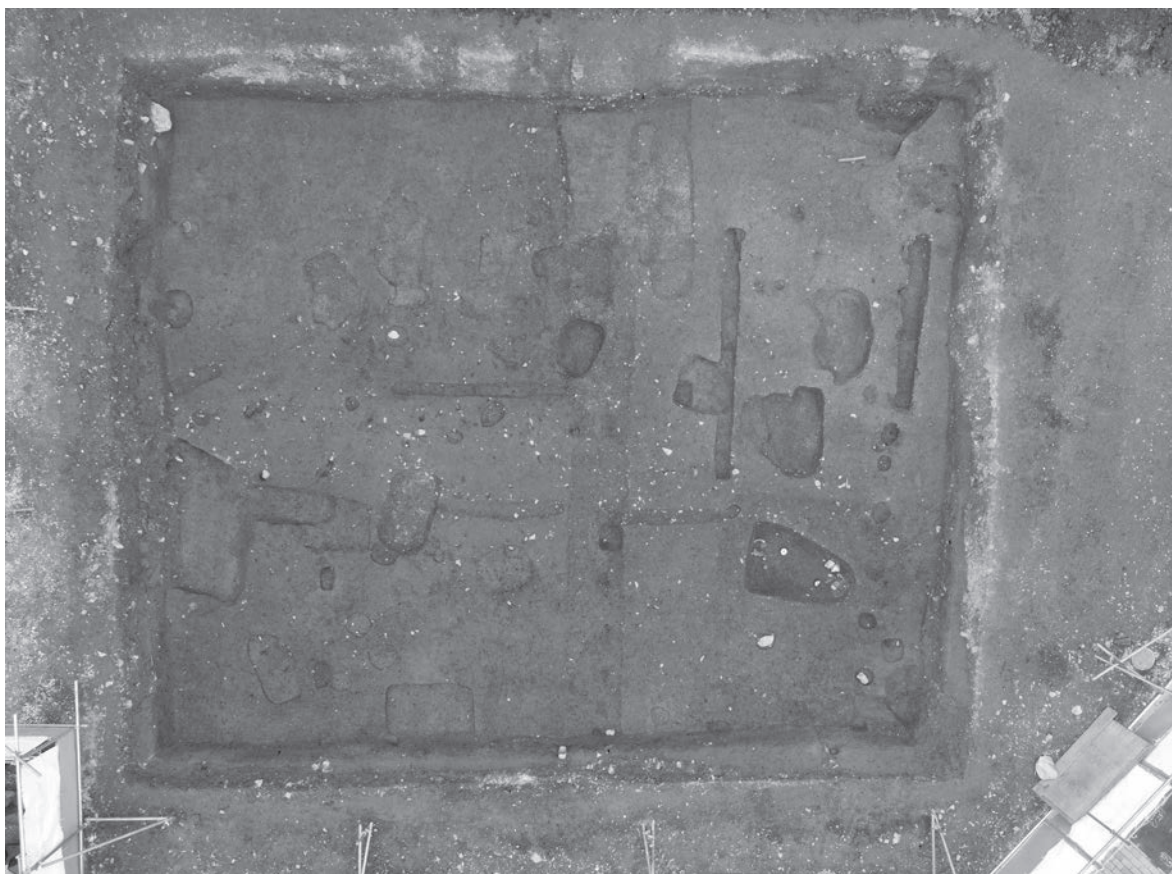
1. 2区土坑077漆器皿出土状況（北から）



2. 2区土坑074掘削状況（東から）



1. 2区第4面全景（東から）



2. 2区第4面全景（上が北）



1. 2区柱穴071遺物出土状況（東から）



2. 2区溝032完掘状況（北から）



1. 1区第4面 溝032出土遺物（「南無阿弥陀佛」文軒丸瓦）



2. 2区第3面 土坑077出土遺物（漆器皿）



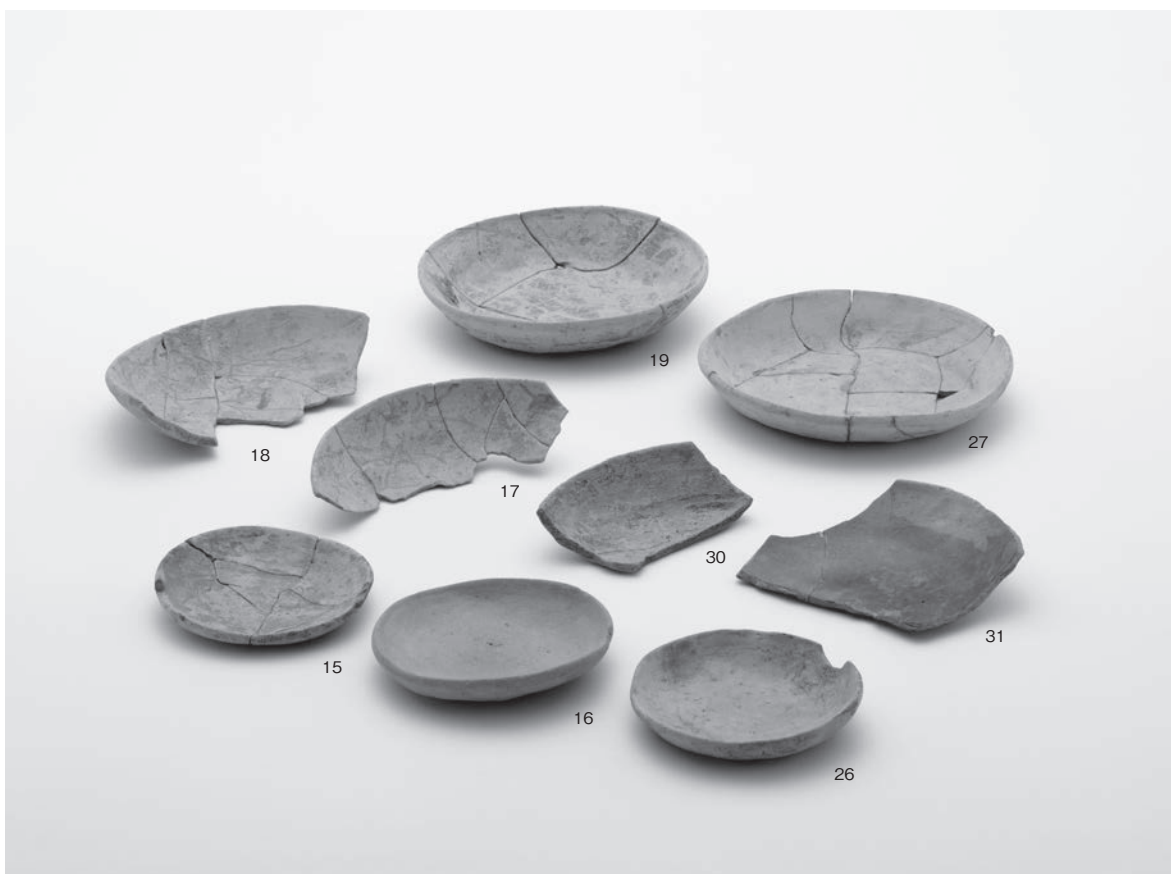
1. 1区第2面 整地層内出土遺物（水晶製裝飾具）



2. 1区第2面 溝008・028出土遺物（土師器・須恵器・施釉陶器）



1. 1区第3面 溝031出土遺物（土師器・瓦器）



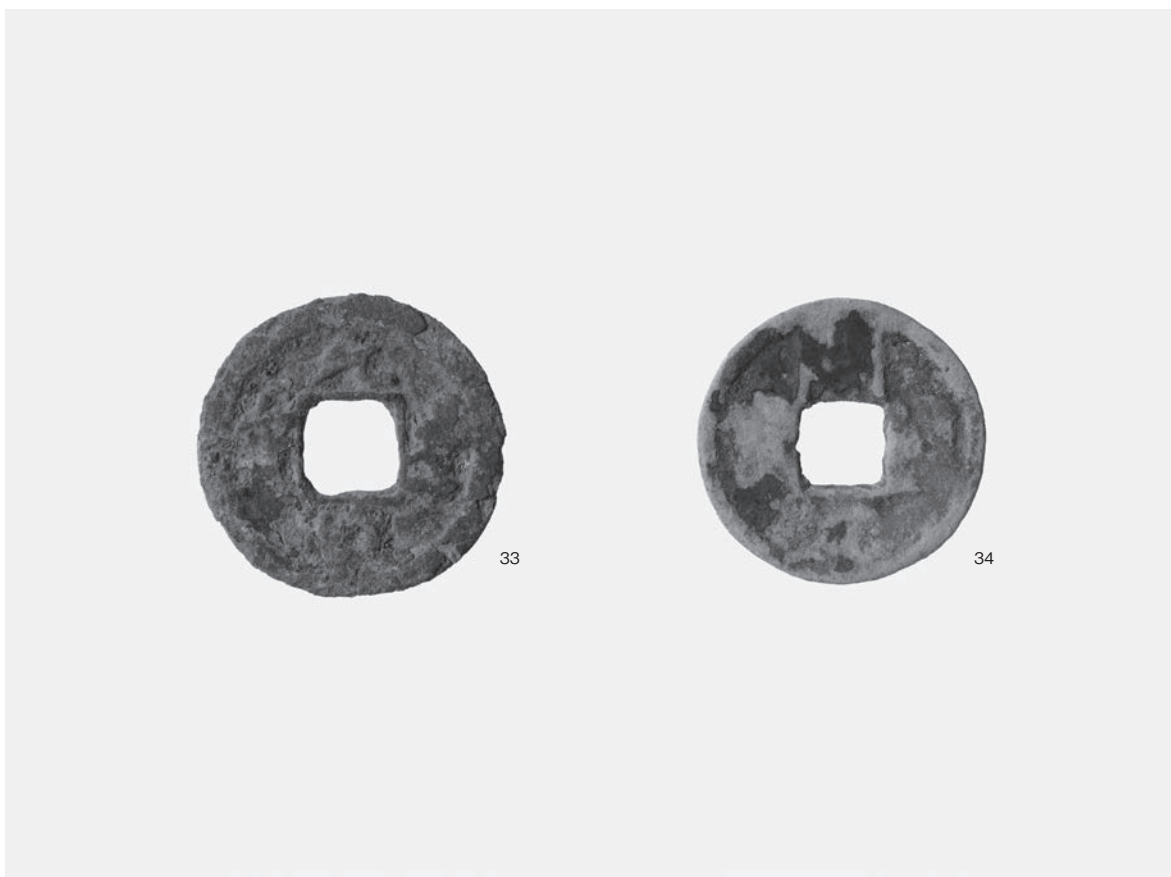
2. 1区第4面 溝032・033・043・044出土遺物（土師器）



1. 1区第4面 溝032・033出土遺物（瓦器）



2. 1区第4面 溝033・044、土坑045出土遺物（山茶碗・瓦質土器）



1. 2区第2面 溝068出土遺物（輸入銭）



2. 2区第3面 溝031、土坑077、柱穴082・083、整地層内出土遺物（土師器）



1. 2区第3面 土坑077出土遺物（瓦質土器・須恵器）



2. 2区第3面 整地層内出土遺物（須恵器）



1. 2区第4面 柱穴071・098、土坑104・109・139出土遺物（土師器）



2. 2区第4面 溝032、土坑108・130・133・138出土遺物（灰釉陶器・瓦器・輸入青磁）

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうしちじょうにぼうじゅうにちょうあと・にしいちあと・きぬたちょういせきはつかつちょうさほうこくしょ							
書名	平安京右京七条二坊十二町跡・西市跡・衣田町遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	田邊貴教 中西佳奈江							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2023年6月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょうしちじょう 平安京右京七条 にぼうじゅうにちょうあと 二坊十二町跡・ にしいちあと きぬたちょういせき 西市跡・衣田町遺跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 にしちじょうきたきぬたちょう 西七条北衣田町 37-1	26100	1 713 714	34度 59分 22秒	135度 43分 55秒	2022年 12月19日 ～ 2023年 2月21日	325.2㎡	医療施設、商業施設および共同住宅の複合施設の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京七条 二坊十二町跡・ 西市跡・衣田町遺跡	都城跡	室町時代後期以降	整地層		平安時代末期～室町時代中期に至るまで、四行八門境の小径の側溝と思われる溝を検出した。南北朝時代の礎石建物3棟、土坑墓3基を検出した。うち礎石建物1棟は土坑墓1基を覆う形となっており、墓堂の可能性はある。平安時代末期～鎌倉時代の四行八門境の溝から「南無阿弥陀佛」文軒丸瓦が出土した。兵庫県小野市の浄土寺境内と神戸市の神出窯跡から出土した軒丸瓦と同文のものであるが、浄土寺境内と神出窯跡以外の出土例は初となる。			
		室町時代前期～中期	土坑溝	土師器 施釉陶器 焼締陶器 水晶製装飾具 輸入銭				
		南北朝時代	土坑溝 礎石建物 柱列 柱穴	土師器 須恵器 土師質土器 漆器 木製品				
		平安時代末期～鎌倉時代	土坑溝 柱穴	土師器 須恵器 瓦器 瓦質土器 瓦				

文化財サービス発掘調査報告書 第28集

平安京右京七条二坊十二町跡・
西市跡・衣田町遺跡発掘調査報告書

発行日 2023年6月30日

株式会社 文化財サービス
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印刷 〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る273
TEL 075-467-5151